

狀

料ノ材	船體	置ノ具	網ノ具	敷ノ橋
船年一ケ	名社ハ名	若者	船主	名
税ノケ	ノ會	ク		
公稱馬力				
右ニ記載スル要件ヲ查明シ噸數測定規則ニ違ヒ其尺度噸數ヲ測定シ此登簿船免狀ヲ下付スル者也				
明治年月日 大日本帝國(農商務省)				

十四年第四十三號布告ニ依リ(帝國)ノ下(內務省)トアルヲ(農商務省)ト改ム

(附言)二十三年十月勅令第二百十九號ヲ以テ本令ハ船籍規則施行ノ日ヨリ廢ス但船籍規則ハ商法中本則ニ關聯スル條項施行延期中實施セズ

○第五百五十二 蒸汽船拾噸風帆船貳拾噸以下及湖川港灣限リ運轉スル西洋形船免

明治十二年五月第九號布告西洋形船免狀ハ自今蒸汽船ハ拾噸風帆船ハ貳拾噸以下及ヒ湖川港灣ヲ限リ運轉スルモノハ其船免狀ヲ受有スルニ及ハス此旨布告候事

(附言) 船籍規則施行ノ日ヨリ本令廢止ニ付テハ前令ニ附記スル如シ

○第五百五十三 西洋形船免狀請願手續(明治十二年五月二十一日 內務省達丙第二十五號沿海府縣

第拾九號ヲ以テ西洋形商船免狀改正公布相成候ニ付自今其免狀ヲ請願スル者ハ其願書ニ左

記ノ件名書相添出願可爲致且從前ノ免狀所持ノ者モ同様ノ手續ヲ以テ免狀書換出願爲致候儀ト可相心得此旨相達候事

但左ノ件名中詳カナラサルモノハ其項下ニ不詳ト書記シ可爲差出事

- 一 船名 漢字ヲ以テスルモノハ假名ヲ附スヘシ
- 一 信號符字 外國人ヨリ買受ケタル者及ヒ新造ノ者ハ除ク
- 一 一定繫港 何府縣何國
- 一 本船管轄廳名 何府縣廳
- 一 船ノ種類 蒸汽又ハ風帆
- 一 甲板ノ層數 何層
- 一 船體ノ材料 鐵又ハ木
- 一 櫓ノ數 何本
- 一 船骨ノ材料 鐵又ハ木
- 一 網具ノ裝置 バルク、ブリツク、スクー、チル等
- 一 船尾ノ形狀 方形又ハ圓形
- 一 製造地名 何國何地
- 一 製造年月 何年何月
- 一 造船工場ノ氏名 何國何地何某
- 一 船ノ原名 最初製造シタル者ノ名但シ外國人ヨリ買受ケタルモノハ其外國文字ヲ併セテ記スヘシ
- 一 舊船免狀ノ番號 外國人ヨリ買受ケタル者及ヒ新造ノ者ハ除ク

一 船主若クハ會社ノ名 船主ハ二人以上ナルモ其總代一人ノ名及ヒ其本質  
 一 壹箇年ノ船稅何  
 一 量噸甲板最大ノ長 船首ノ内板ヨリ船尾ノ内板迄○量噸甲板トハ三層以上ノ船ニ於テハ最下ノ甲板  
 一 内法リ最大ノ幅 船幅最モ潮大ナル部ニ  
 一 艙室ニ於テ量噸甲板ヨリ船底中央ノ内板ニ至ル深何尺  
 一 量噸甲板下部ノ噸數何  
 一 量噸甲板上諸部ノ噸數(若シアレハ)即チ  
 甲板ノ場所 何噸○三層以上ノ船ニ於テハ上甲板ト量噸甲板ノ間ノ場所  
 船尾室 何噸○上甲板ニ於ケル船尾ノ  
 圓室 何噸○上甲板中央線(船首ヨリ船尾ニ至ル中央線)若クハ  
 中央線ノ近傍ニ設ケルモノニシテ外圍ヲ回歩シ得ルモノ  
 其他ノ場所(若シアレハ) 上甲板ニ於ケル船首室、艙室、厨室、  
 浴室等ノ如ク上ニ掲ケサルモノ  
 一 總噸數 何噸  
 一 内除去スヘキ噸數  
 機關室ノ噸數 何噸  
 乗組人常用室ノ噸數 何噸  
 一 登簿噸數 何噸○諸船ニ於テハ機關室ノ噸數及ヒ乗組人常用室ノ噸數ヲ總噸數ヨリ除去シ其殘數ヲ以テ登簿  
 噸數トナシ風帆船ニ於テハ總噸數ヨリ乗組人常用室ノ噸數ヲ除去シ其殘數ヲ以テ登簿噸數トナス  
 一 機關ノ數 一箇又 一箇ノ軸ニ因リ車軸ノ運轉ヲ起スモノヲ一箇ノ機關ト稱シ二箇ノ  
 軸ニ因リ車軸ノ運轉ヲ起スモノヲ二箇ノ機關ト稱ス以下之ニ準ス

一 公稱馬力何馬力

(附言) 二十三年十一月遞信省令第二十號船籍規則施行細則第十八條ニ依リ該細則施行  
 ノ日ヨリ廢ス但該細則ハ船籍規則施行日マテ其施行ヲ延期セラル  
 ○第五百五十四 西洋形船船籍編入方ノ件 明治二十二年二月五日  
 自今西洋形(商船)ハ總テ沿海府縣ノ所轄ニ被附候條來ル七月三十一日迄ニ本船ノ定繫港ヲ  
 定メ其地ノ船籍ニ編入致ス(シ 十三年三月第十號ヲ以テ(商船)ノ  
 文字ヲ削リ(西洋形船)ト改ム  
 但定繫港ハ船主又ハ本船ノ公務ヲ代理スル者所在ノ地ニ於テ定ムヘシ  
 右布告候事  
 (附言) 二十三年十月勅令第二百十九號ヲ以テ船籍規則施行ノ日ヨリ本令ヲ廢ス  
 ○第五百五十五 失踪船取扱規則 明治二十六年三月十六日  
 失踪船取扱規則左ノ通相定ム  
 失踪船取扱規則  
 第一條 船舶發航ノ後到達港ニ到達セス其所在分明ナラサルトキハ船主ハ左記ノ事項ヲ記  
 シ市町村長ノ加印ヲ受ケ地方官廳ヲ經由シテ遞信省ニ届出ツヘシ  
 一 船舶ノ名稱、種類、積量、馬力(汽船ナル  
 一 載貨ノ種類、量目及ヒ其見積代價  
 二 船舶乘組員及ヒ旅客ノ族籍、身分、氏名、年齢  
 三 船舶乘組員及ヒ旅客ノ族籍、身分、氏名、年齢

四 發港地ノ名及ヒ其日時

第二條 前條ノ届出ハ之ヲ官報ニ掲載ス

官報掲載ノ日付ヨリ起算シ内國航海船ニ在テハ六箇月外國航海船ニ在テハ一箇年ヲ經過スルモ船舶ノ所在尙ホ分明ナラサルトキハ踪跡ヲ失ヒタルモノト看做シ市町村長ニ於テ其船籍ヲ削除スルト同時ニ其旨ヲ記シ地方官廳ヲ經由シテ遞信省ニ報告スヘシ

第三條 船籍ヲ削除セラレタル後其船舶ノ所在ヲ發見シタルトキハ船主ハ其旨ヲ記シ市町村長ニ届出ツヘシ市町村長ハ其船籍ヲ復活スルト同時ニ其旨ヲ記シ地方官廳ヲ經由シテ遞信省ニ報告スヘシ

第二節 船舶積量測度及公稱馬力算定ノ件

○第五百五十六

船舶積量測度規則明治十七年四月二十四日 布告第拾號

右奉 勅旨布告候事

(別紙)

船舶積量測度規則

第一條 凡ソ船舶海軍艦船ヲ除クノ積量ハ此規則ニ依リ測度スル者トス

第二條 船舶ノ積量ヲ測度スルハ總テ曲尺ヲ用ヒ尺位ヲ以テ單位トシ其尺度ハ分位ニ止ムヘシ

第三條 西洋形船ノ積量ハ百立方尺ヲ以テ一噸トシ日本形船ノ積量ハ十立方尺ヲ以テ一石トス

第四條 西洋形船ニシテ甲板一層ノ者ハ其甲板ヲ以テ量噸甲板トシ二層ノ者ハ其上層ヲ以テ量噸甲板トシ三層以上ノ者ハ其最下ヨリ第二層ニアル者ヲ以テ量噸甲板トス

第五條 西洋形船ニシテ甲板一層若クハ二層ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ量噸甲板上諸室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トシ又甲板三層以上ノ者ハ量噸甲板下ノ噸數ニ量噸甲板上各甲板間ノ噸數及ヒ最上甲板上諸室ノ噸數ヲ合セテ之ヲ該船ノ總噸數トス

第六條 汽船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乗組人常用室及ヒ機關室ノ噸數ヲ除キタル者トス

第七條 帆船ノ登簿噸數ハ總噸數ヨリ乗組人常用室ノ噸數ヲ除キタル者トス

第八條 機關室トシテ除クヘキ噸數ノ割合ハ左ノ如シ

外車汽船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ二十ヨリ三十マテハ總噸數ノ百分ノ三十七  
暗車汽船機關室ノ噸數該船總噸數ノ百分ノ十三ヨリ二十マテハ總噸數ノ百分ノ三十二  
機關室ノ噸數ニ依リ前項ノ割合ニ適セサル者ハ該室ノ噸數ニ外車汽船ナレハ其二分ノ一ヲ加ヘ暗車汽船ナレハ其四分ノ三ヲ加ヘタル者トス

第九條 日本形回漕船ハ船梁上下船艙ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トシ又其構造回漕船ニ異ナル者ハ舷繩壁下ノ石數ヲ以テ該船ノ積石トス

第十條 船舶ノ噸數及ヒ積石測度ノ方法ハ布達ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

○第五百五十七 船舶積量測度方法 明治十七年四月二十四日 太政官布達第十號

今般第拾號ヲ以テ船舶積量測度規則布告候ニ付テハ船舶積量測度方法別紙ノ通相定ム  
右布達候事

(別紙)

船舶積量測度方法

第一條 西洋形船ノ噸數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ

第一項 量噸甲板ノ噸數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ  
ト船首船尾ノ傾度ニ對スル甲板ノ長及ヒ終尾船梁ノ矢 船梁ノ弧形ノ三分ノ一ニテ船尾ノ傾度ニ對スル甲板ノ長ヲ減シテ量噸甲板下ノ長トシ之ヲ左ノ等級ニ準ヒ等分スヘシ  
第一級 量噸甲板下ノ長五十尺迄ノ船ハ四個

第二條 機關室ノ噸數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ

第一項 機關室內平均ノ長幅深ヲ測リ之ヲ相乘シテ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ機關室ノ噸數トス

第二項 機關室ノ上端ニ機關運轉又ハ空氣流通等ノ爲メ圍ヒタル場所アルトキハ其長幅

深ヲ測リ之ヲ相乘シテ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ機關室ノ噸數ニ加フヘシ

第三項 暗車汽船ニ於テハ軸室平均ノ長幅高ヲ測リ之ヲ相乘シテ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ機關室ノ噸數ニ加フヘシ

第三條 甲板方キ西洋形船ノ噸數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ

第一項 船首上端ノ内側ヨリ船尾上端ノ内側ニ至ル長ヲ測リ之ヲ第一條第一項ニ掲ケル等級ニ準ヒ等分シ其各分長點ニ於テ船舷ノ上端ヲ境線トシ之ヨリ船底ニ至ル深ヲ測リ其他第一條第一項ニ據リテ噸數ヲ求メ之ヲ該船ノ總噸數トス

第二項 船舷上端ノ境線ヲ超ニ船室ノ設アルモノハ境線上ニ於ケル該室平均ノ長幅高ヲ測リテ之ヲ相乘シ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ該線下ノ噸數ニ加フヘシ

第四條 日本形回漕船ノ石數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ

第一項 船舷ノ上端ヲ境線トシ之ヨリ船梁ノ上面ニ至ル平均ノ高ヲ測リ又船首室ノ境界ヨリ船尾室ノ境界ニ至ル長ヲ測リ又船舷ノ内側ニ至ル平均ノ幅ヲ測リテ此長幅高ヲ相乘シ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ船梁上船艙ノ石數トス

第二項 船首室ノ境界ヨリ船尾ノ内側ニ至ル船底ノ長ヲ測リ之ヲ四個ニ等分シ其各分長點及ヒ前後兩端ニ於テ深ヲ測リ又各深ノ中央及ヒ上下ニ於テ平均ノ幅ヲ測リテ其深幅ヲ平均シ而シテ此平均ノ深幅ト長ヲ相乘シ其得數ヲ百ニテ除シ之ヲ船梁下船艙ノ石數トス

第五條 日本形ニシテ其構造回漕船ニ異ナル船ノ石數ヲ測定スルハ左ノ方法ニ據ルヘシ  
 船首ノ内側ヨリ船尾ノ内側ニ至ル船底ノ長ヲ測リテ之ヲ四個ニ等分シ其各分長點ニ於  
 テ船舷上端ヲ境線トシ之ヨリ船底ニ至ル深ヲ測リ其深ノ中央及ヒ上下ニテ平均ノ幅ヲ  
 測リテ其深幅ヲ平均シ而シテ此平均ノ深幅ト長ヲ相乘シ其得數ヲ十二テ除シ之ヲ該船  
 ノ石數トス

○第五百五十八

船舶積量改測結了方明治二十年十二月九日  
逓信省訓令第七號北海道廳府廳

船舶積量改測期限ノ儀ニ付テハ明治十七年九月農商務省第二十九號達ノ旨モ有之候處今以  
 テ改測未済ノ地方有之右ハ此際速ニ結了候様致スヘシ尤モ自然航海等ノ爲メ船籍外ノ地ニ  
 繫留シテ歸港セサル船舶有之候ハ、其旨ヲ船籍地ノ地方廳ヨリ繫留地ノ地方廳ニ通知シ繫  
 留地ノ地方廳ニ於テ改測結了候様取計フヘシ

○第五百五十九

汽船公稱馬力算定方法明治十七年五月二十二日  
農商務省令第三拾三號府廳

汽船公稱馬力算定方法左之通相定候條此旨相達候事

公稱馬力算定方法

第一冷汽器ヲ備ヘサル機關ノ公稱馬力ハ汽笛吸鑿ノ徑ヲ英寸ニテ測リ之ヲ自乘シ得數ヲ拾  
 個ニテ除シタルモノ

但汽笛二個以上ヲ備フルモノハ本法ニ從テ一個毎ニ之ヲ求メ其得數ヲ相合セタルモノ  
 第二冷汽器ヲ備フル機關ノ公稱馬力ハ汽笛吸鑿ノ徑ヲ英寸ニテ測リ之ヲ自乘シ得數ヲ二拾

個ニテ除シタルモノ

但汽笛二具以上ヲ備フルモノハ本法ニ從テ一具毎ニ之ヲ求メ其得數ヲ相合セタルモノ

第三冷汽器ヲ備ヘサル聯成機關ノ公稱馬力ハ其各汽笛吸鑿ノ徑ヲ英寸ニテ測リ各之ヲ自乘  
 シテ相加ヘ其得數ヲ拾個ニテ除シタルモノ

但汽笛二具以上ヲ備フルモノハ本法ニ從テ一具毎ニ之ヲ求メ其得數ヲ相合セタルモノ  
 第四冷汽器ヲ備フル聯成機關ノ公稱馬力ハ其各汽笛吸鑿ノ徑ヲ英寸ニテ測リ各之ヲ自乘シ  
 テ相加ヘ其得數ヲ三拾個ニテ除シタルモノ

但汽笛二具以上ヲ備フルモノハ本法ニ從テ一具毎ニ之ヲ求メ其得數ヲ相合セタルモノ

同指令

●從前檢査濟ノ船舶更ニ檢査ノ件明治十七年五月十五日  
廣島縣同

客月廿四日付第十號ヲ以テ船舶積量測度規則布告相成右ハ來ル七月一日ヨリ施行セラルハ  
 モノナレハ從前檢査濟ノ船舶ニシテ同日付第十號布達船舶積量測度方法ニ依リ測度スル時  
 ハ多少差違ヲ生スルモ更ニ檢査スルニ及ハサル儀ニ候哉  
 農商務省指令 明治十七年五月十九日

同之趣從前測度濟ノ分ト雖モ更ニ檢査候儀ト相心得ヘキ事

第二節 西洋形船海員雇入雇止ニ關スル件

○第五百六十 西洋形船海員雇入雇止規則明治十二年二月十九日  
布告第九號

西洋形(商船)海員雇入雇止規則別冊ノ通相定來ル八月十六日ヨリ施行候條此旨布告候事  
三十二年三月布告第十號ヲ以テ(商船)ノ二字ヲ削リ(西洋形船)ト改ム

(別冊)

西洋形船海員雇入雇止規則

第一條 西洋形船(蒸氣船ハ拾噸以上風帆船ハ二十噸以上)ニ於テ海員ヲ雇入又ハ雇止ヲ爲

ス時ハ總テ此規則ノ條款ニ準據スヘシ

第二條 雇入ノ時ハ其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省ヨリ發スル海員雇入證書用紙ヲ以

テ其定約書ヲ作り雇者被雇者記名調印ノ上浦役人ノ公認ヲ受クヘシ十四年布告第四十三號ヲ以テ(内務省)ヲ農商務省ト改ム以下皆同シ

但定約書ハ正副貳通ニ作り其本書ハ本船ニ保チ置キ副書ハ浦役場ニ止メ置クヘシ

第三條 内海回漕船ニ於テハ雇入期限ヲ六ヶ月以内ト定ム然レトモ外國航船ニ於テハ六ヶ月以外ヲ約スルヲ得ヘシ

第四條 雇止ノ時雇者其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省ヨリ發スル海員雇止證書用紙

ヲ以テ雇止證書ヲ作り記名調印ノ上浦役人ノ公認ヲ受ケ之ヲ其被雇者ニ付與スヘシ同上

雇入又ハ雇止ノ下キ技術免狀ヲ所持スルモ又ハ浦役人ノ検査ニ供シ且其検査證書ヲ申受

ヘシ十六年布告第四十五號ヲ以テ本項以下三項ヲ追加ス

雇入又ハ雇止ノ公認ヲ受クルトキ、ニ改料トシテ被雇者給金一月分ノ百分一ニ當ル金額

ヲ雇者被雇者ヨリ各其半額ツ、浦役場ニ納ムヘシ

雇入定約書及ヒ雇止證書ヲ亡夫毀損シ其寫ヲ乞フ者ハ貳名以上ノ保證人ト連署シテ當初

公認ヲ受ケタル浦役場ニ申出ヘシ浦役人ハ簿冊ニヨリ之ヲ製シ認印ヲ捺シテ交付スヘシ

第五條 雇止ハ雇入地ニ限り行フヘシ故ニ雇入地外ニ於テ滿期ニ至ルモ雇入地ニ歸著スル迄ハ雇入期限内ト見做スヲ得ヘシ

但雇者被雇者雙方ノ同意ヲ以テスルモノハ本條ノ限リニアラス

第六條 左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇入期限内トニ拘ラス雇者ヨリ雇止ヲナスヲ得ヘシ

一 疾病又ハ體質衰弱ノ故ヲ以テ本務ヲ執行シ能ハサル者

一 本船難破其他ノ災厄ニ罹リ進航シ能ハサル時

但以上二項ノ場合ニ於テハ雇者ノ費用ヲ以テ雇入地へ歸還セシムヘシ

一 第十條ニ掲クル違約一ヶ月三回以上ニ至ル者

一 第十一條ヲ犯ス者

第七條 又左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇入期限内トニ拘ハラス被雇者ヨリ其定約ヲ解ク

ヲ得ヘシ

一 苛虐ノ取扱ヲ受ケシ時

一 飲食物又ハ給金ノ全額或ハ幾分ヲ給與セラレタル時

但右ノ場合ニ於テハ雇入地へ歸著ノ旅費ヲ請求スルヲ得ヘシ

第八條 外國ニ於テ雇入若クハ雇止ヲ爲ス時ハ其國駐留ノ我國領事館ニ於テ是向務省ヨリ發スル用紙ヲ以テ定約書若クハ雇止證書ヲ作り記名調印ノ上領事ノ公認ヲ受クヘシ同但定約書ハ正副貳通ニ作り其本書ハ本船ニ保チ置キ副書ハ領事館ニ止メ置クヘシ

第九條 新タニ海員トナル者及ヒ此規則施行以前雇止トナリシ者ヲ除クノ外被雇者ハ必ス最後ノ雇止證書ヲ所持スヘシ又雇者ハ最後ノ雇止證書ヲ所持セサル者ハ雇入スヘカラス

第十條 船長ノ指圖ニ背ク者許可ヲ得シテ上陸シ又ハ許可ノ時限ヲ過キテ歸船スル者(第十一條ノ脱船者ニアラス)本務ヲ怠ル者喧嘩口論ヲナス者酩酊スル者私ニ銃器刀槍或ハ酒類ヲ船中ニ貯フ者ハ毎回其給金三日分ヨリ多カラサル額ヲ違約金トシテ雇主之ヲ收メ且其銃器刀槍或ハ酒類ヲ取上クルヲ得ヘシ

第十一條 船中ニ於テ徒黨ヲ謀ル者船長ヲ劫ス者脱船スル者(雇入期限内ニ逃亡スル者ヲ云フ)ハ其事情ニ因リ百日内ノ懲役ニ處ス者シ船體船具ヲ毀傷シ又ハ載貨ヲ私用スル者ハ其實價ヲ償ハシムルノ外本條ニ依テ其罪ヲ科スヘシ

第十二條 海員ヲ虐使シ飲食物或ハ給金ノ全額又ハ幾分ヲ給與セサル者ハ其事情ニ因リ百圓以内ノ罰金ヲ科シ其給與セサル金額ハ年六分ノ利子ヲ加ヘ償還セシムヘシ

第十三條 此規則中第十條第十一條第十二條ヲ除キ其他ノ諸條款ヲ犯ス者ハ其事情ニ因リ五拾圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ

○第五百六十一 海員雇入雇止取扱手續明治十七年三月三十一日農商務省達第九號沿海府縣遵照

客歲十二月第四拾五號布告ヲ以明治十二年第九號布告西洋形船海員雇入雇止規則第四條(三項追加相成候ニ就テ)ハ右事務取扱手續左之通相定候條此旨相達候事

海員雇入雇止事務取扱手續

- 第一條 雇入ノ公認ヲ與ルニ際シ浦役人ハ左項ニ注意スヘシ
  - 第一 雇長、運轉手、機關手、技術免狀ノ有無ヲ檢問スル
  - 第二 被雇者ニ於テ最後ノ雇止證書ヲ所持スルヤ否ヲ推問スル
  - 第三 被雇者ヲシテ雇入定約ノ旨趣ヲ了解シタルヤ否ヲ推問スル
- 第二條 浦役人ハ船長、運轉手、機關手、技術免狀ヲ檢査シ真正ノモノト認ムルトキハ農商務省ヨリ發行シタル技術免狀檢査證書ニ該免狀ノ種類及船名、定繫港名等ヲ記シ之ヲ交付スヘシ
- 第三條 浦役人ハ被雇者ヨリ最後雇止證書ヲ出サシメ其證書裏面ヘ何年月日何港ニ於テ更ニ何船ヘ雇入トナリタル旨ヲ記入シ且之レニ認印スヘシ但新ニ海員トナリ最後雇止證書所持セサルモノハ此限ニアラス
- 第四條 被雇者中定約ノ旨趣ヲ了解セサルモノアレハ浦役人ニ於テ或ハ之ヲ讀聞セ或ハ解釋シテ充分了解セシムヘシ
- 第五條 新タニ海員トナル者ニ雇入ノ公認ヲ與ヘタルキハ其族籍氏名年齢ヲ本籍ノ戶長ニ照會シ從前海軍兵役ノ有無ヲ取調ヘ雇入證書ノ寫若クハ海員名簿ニ記入スヘシ十七年省達第廿五號ヲ

以テ本條ヲ追加シ舊第  
五條以下順次繰下ル

第六條 雇入ノ片ハ勿論雇止ノ片ト雖モ其證書ノ寫ヲ浦役場ニ保存スヘシ且雇入雇止事務  
繫劇ノ場所ニ於テハ更ニ海員名簿ヲ備置雇者被雇者ノ住所、氏名、乘組船名等ヲ記入シ他  
日ノ参照ニ供スヘシ元第五條同上省違元第六條トス

第七條 雇止ノ公認ヲ爲ス片ハ前定約面ト相違ノ有無ヲ取糺シ若シ當初雇入ノ定約面ト相  
違ノ廉有之片ハ船内日記簿其他ノ書類ニ據リ雇者ヨリ其事實ヲ證明セシメ海員名簿ニ其  
旨ヲ記入シ而シテ之カ公認ヲ與フヘシ元第六條同上第(第七條)トス

第八條 甲地浦役場ニ於テ雇入ノ公認ヲナシタルモノヲ乙地浦役場ニ於テ雇止ノ公認ヲ爲  
シタル時ハ郵便其他便宜ノ方法ヲ以テ甲地浦役場ヘ遅クモ一ヶ月以内ニ之ヲ通報スヘシ  
此場合ニ於テハ甲乙兩浦役場ニ於テハ其雇入證書ノ寫若クハ海員名簿ニ其事由ヲ記入ス  
ヘシ元第七條同上第(第八條)トス

第九條 雇入雇止證書中被雇者年齢ハ必ス生年月日ヲ記入セシムヘシ元第六條同上  
第十條 雇入雇止證書中書損アル片ハ必ス正誤セシメ浦役場之人ニ認印スヘシ若シ書損甚シ  
ク字句不分明ナル片ハ更ニ新調セシムヘシ元第九條同上第(第十條)トス

第十一條 雇入期限内脱船又ハ死者アリシコトヲ届出タル時ハ雇入證書中事故摘要ノ部ヘ其  
事故ヲ記載シ尙ホ其證書ノ寫若クハ海員名簿ニ之ヲ記入スヘシ元第十條同上  
第十二條 雇入證書ハ假令ヒ餘白アリト雖モ再度之レヲ使用スルヲ許サス故ニ其餘白ハ總  
テ斜線リ書スヘシ元第十一條同上第(第十二條)トス

第十三條 雇入期限内雇者被雇者ヨリ雇止ノ公認ヲ請フモノアル時ハ規則ニ照シテ其事由  
ヲ查明シ之カ公認ヲ與フヘシ但シ正副雇入證書及ヒ海員名簿ニ其事由ヲ記入スヘシ元第十  
三條トス

第十四條 雇入期限内ニ雇者變更スト雖モ更ニ雇入定約ヲ爲サシムルニ及ハス然レモ此場  
合ニ於テハ滿期雇止ノ片雇者變更ノ事由ヲ正副雇入證書若クハ海員名簿ニ記入スヘシ  
元第十三條同上第(第十四條)トス

第十五條 海技免狀ヲ受有スル者ハ海員雇入雇止證書職務欄内ニ免狀ノ種類及現ニ服務ノ  
職名ヲ記シテ公認ヲ與フヘシ元第十四條トス第(第十五條)トス

○第五百六十二 海員雇入雇止證書用紙拂下ノ件明治十二年六月二十一日  
内務省達第百三拾四號海府縣  
本年第九號ヲ以テ西洋形船海員雇入雇止規則公布相成候就テハ本則ニ依リ當省ヨリ發行ス  
ル雇入雇止證書用紙ハ各浦役場等ニ於テ左ノ定價ヲ以テ拂下可申依テ爲心得別紙雜形相付  
ル此旨相達候事

但本文用紙拂下代金ノ儀ハ毎年三月九月(明治十八年度ニ  
限リ十二月三日)ノ兩度ニ取纏テ明細書相添農商務  
省ヘ可相納事十八年農商務省達第二十  
一號ヲ以テ但書ヲ改正ス  
海員雇入證書用紙 定價金四錢  
同 雇止證書用紙 同 金貳錢



(證書用紙離形等ス)

○第五百六十三 海員雇入證書用紙發行拂下ノ件 明治十二年十一月二十一日  
本年六月當省丙第三十四號ヲ以テ西洋形商船海員雇入雇止證書發行ノ儀相違候處尙ホ少數ノ人員雇入便宜ノ爲メ更ニ別紙離形ノ通り雇入證書發行候條右用紙ハ各浦役場ニ於テ左ノ定價ヲ以テ拂下可申此旨相違候事

海員雇入證書用紙 定價金貳錢

(證書用紙離形等ス)

○第五百六十四 海員雇入雇止證書用紙改正ノ件 明治十七年十一月十五日  
明治十二年內務省丙第三十四號并丙第五十四號達海員雇入雇止證書及技術免狀検査證書用紙別紙離形ノ通り改正候條此旨相違候事  
但證書用紙ハ當分新舊交用スルコトヲ得

(別紙離形等ス)

○第五百六十五 西洋形船海員雇入雇止手数料ヲ市町村ノ收入ト爲ス件 明治二十二年六月十二日公布  
勅令第八十三號

朕西洋形船海員雇入雇止手数料ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
西洋形船海員雇入雇止規則ニ依リ雇者被雇者ヨリ徴收スル手数料ハ明治二十二年四月以降市町村ノ收入トス但未タ市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ其實施ノ期ヨリ本令ニ依ルヘ

○第五百六十六

島嶼ニ於ケル西洋形船海員雇入雇止手数料ヲ町村ノ收入ト爲ス件 明治二十二年十一月二日(十一月二日公布)  
勅令第百十五號

朕西洋形船海員雇入雇止手数料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

西洋形船海員雇入雇止規則ニ依リ雇者被雇者ヨリ徴收スル手数料ハ明治二十二年一勅令第一號ヲ以テ指定シタル島嶼ニ在テハ東京府管轄小笠原島伊豆七島ヲ除クノ外其町村ノ收入トス

第十四類 民刑商事ニ關スル件

前加 裁判所構成法中郡市町村長ニ於テ檢事ノ代理タル件

第五百六十七

裁判所構成法明治二十三年二月八日(二月十日公布)法律第六號

朕裁判所構成法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此ノ法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

裁判所構成法

第一編 裁判所及檢事局

第一章 總則

第一條 左ノ裁判所ヲ通常裁判所トス

第一 區裁判所

第二 地方裁判所

第三 控訴院

第四 大審院

第二條 通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三條 地方裁判所控訴院及大審院ヲ合議裁判所トシ數人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ總テノ事件ヲ審問裁判ス但シ訴訟法又ハ特別法ニ別段規定シタルモノハ此ノ限ニ在ラ

ス

第四條 裁判所ノ設立廢止及管轄區域並ニ其ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 各裁判所ニ相應ナル員數ノ判事ヲ置ク

第六條 各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付公訴ヲ起シ其ノ取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及判決ノ適當ニ執行セラル、ヤヲ監視シ又民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ其ノ意見ヲ述フルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行政事件ニ付公益ノ代表者トシテ法律上其ノ職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ檢事ハ裁判所ニ對シ獨立シテ其ノ事務ヲ行フ

檢事局ノ管轄區域ハ其ノ附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シ

若一人ノ檢事若ハ數人ノ檢事悉ク差支アリテ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ裁判所長又ハ區裁判所ニ於テ判事若ハ監督判事ハ其ノ事件猶豫スヘカラサルニ於テハ判事ニ檢事ノ代理ヲ命シ其事件ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第七條 檢事局ニ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク

第八條 各裁判所ニ書記課ヲ設ク書記課ハ往復會計記錄其ノ他此ノ法律又ハ他ノ法律ニ特定シタル事務ヲ取扱フ

裁判所ニ附置セラレタル檢事局ニ於テ前項ノ如キ事務ヲ取扱フ爲必要ナリト認メタルトキニ限り別ニ書記課ヲ設クルコトヲ得但シ合議裁判所ノ檢事局ニ限ル

司法大臣ハ裁判所ノ會計事務ヲ專任スル爲特別官吏ヲ裁判所ニ置クコトヲ得

第九條 區裁判所ニ執達吏ヲ置ク執達吏ハ裁判所ヨリ發スル文書ヲ送達シ及裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前項ノ外執達吏ハ此ノ法律又ハ他ノ法律ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フ

第十條 法律ヲ以テ特定シタルモノヲ除ク外左ノ場合ニ於テ適當ノ申請アルトキハ關係アル各裁判所ヲ併セテ之ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所ハ何レノ裁判所ニ於テ本件ヲ裁判スルノ權アルヤヲ裁判ス

第一 權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ス且此ノ法律第十三條ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所モ亦之ヲ行フコトヲ得サルトキ

第二 裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲其ノ權限ニ付疑ヲ生シタルトキ

第三 法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所裁判權ヲ互有スルトキ

第四 二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シ又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其ノ裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ

第二章 區裁判所

第十一條 區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ其ノ裁判事務

各判事ニ分配スル事ハ、此ノ事務分配ハ、毎年地方裁判所長前以テ之ヲ定ム。區裁判所判事ノ取扱ヒタル事ハ、裁判事務分配上其ノ事他ノ判事ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ効力ヲ失フコトナシ。判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ハ其ノ一人ヲ監督判事トシ之ニ其ノ行政事務ヲ委任ス。

第十二條 事務分配一タヒ定マリタルトキハ司法年度中之ヲ變更セス但シ一人ノ判事ノ分擔多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支ヲ生シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス。

第十三條 區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方裁判所長ノ前以テ定メタル順序ニ從ヒ互ニ相代理ス但シ監督判事ノ職務ハ其ノ裁判所ノ判事官等ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス。一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ同ク毎年以前以テ之ヲ定ム。

第十四條 區裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル。

第一 百圓ヲ超過セザル金額又ハ價額百圓ヲ超過セザル物ニ關ル請求  
第二 價額ニ拘ラス左ノ訴訟

(イ) 住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ又ハ貸借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト貸借人トノ間ニ起リタル訴訟

(ロ) 不動産ノ境界ノミニ關ル訴訟

(ハ) 占有ノミニ關ル訴訟

(ニ) 雇主ハ雇人トノ間ニ雇期限一年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

(ホ) 左ニ掲ケタル事項ニ付旅人ト旅店若ハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

(一) 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

(二) 旅店若ハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲預ケタル手荷物金錢又ハ有價物

第十五條 區裁判所ハ非訟事件ニ付法律ニ定メタル範圍及方法ニ從ヒ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有ス

第一 未成年者癡癩白癡者失踪者其ノ他法律若ハ判決ニ因リ治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人若ハ管財人ヲ監督スル事

第二 不動産及船舶ニ關ル權利關係ヲ登記スル事

第三 商業登記及特許局ニ登録シタル特許意匠及商標ノ登記ヲ爲ス事

第十六條 區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 違警罪

第二 本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若ハ附加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪

第三 刑法第二編第一章ヲ除キ其ノ他ノ輕罪ニシテ本刑二百圓以下ノ罰金ヲ附加シ若ハ附加セサル二年以下ノ禁錮又ハ單ニ三百圓以下ノ罰金ニ該リ其情第二ニ掲ケタル刑ヨリ更ニ重キ刑ニ處スルコトヲ要セスト認メ地方裁判所若ハ其ノ支部ノ檢事局ヨリ區裁判所ニ移付シタルモノ

前項ノ手續ニ因リ訴追ヲ爲シ犯罪ノ證明アリタル場合ニ於テ判決ヲ爲ス前何時ニテモ其ノ情第二ニ掲ケタル刑ニテハ相當ニ罰スルコトヲ得スト認ムルトキハ區裁判所ハ之ヲ裁判スル權限ヲ有セストノ言渡ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ檢事ハ被告人ヲシテ相當ノ裁判所ニ於テ裁判ヲ受ケシムル爲適當ノ手續ヲ爲ス

第十七條 前數條ニ掲ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ權限ハ此ノ章ニ掲ケタル事件ニ關リ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第十八條 各區裁判所ノ檢事局ニ檢事ヲ置ク

區裁判所檢事局ノ檢事ノ事務ハ其ノ地ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得

司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

第一章 民事ニ係ル件

第一款 證據

前加 公證人及代人ニ係ル規則

○第五百六十八 公證人規則明治十九年八月十一日(八月十三日公布)

朕公證人規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公證人規則

第一章 總則

第一條 公證人ハ人民ノ囑託ニ應シ民事ニ關スル公正證書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス

第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證書又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公證書類ヲ作ルコトヲ得ス若シ之ヲ作リタルトキハ公正ノ効ヲ有セス

第三條 公證人ノ作リタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スルカアルモノトス但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ又民事裁判所ニ偽造ノ申立アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ

第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其住宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但役場外ニ住居セ

ントスルトキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受ク可シ

已ムヲ得サル事件ニ付テハ受持区内ニ限り役場外ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第五條 各区内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム

第六條 公證人ハ司法大臣ニ隷屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第七條 公證人其受持区内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フ可シ但受持區外ニ於テハ何人ノ爲メニモ職務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第八條 公證人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキ囑託人ノ求メアレハ其理由ヲ記シテ渡ス可シ

第九條 公證人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十條 公證人ハ公證人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出ス可シ

前項ノ印鑑ヲ差出サル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第十一條 公證人已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ近隣ノ公證人ニ代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ

第十二條 公證人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲ爲サシムルコトヲ得

第十三條 公證人ノ作ル證書及謄本ノ用紙ハ某始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル罫紙ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本 證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出可キ旨ヲ其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本 原本ノ一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳 日々授受シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公證ヲ受クル爲メノ外裁判所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ渡ス可カラス

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩ス可カラス

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 滿二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ者及法學士法科大學卒業生  
代理人ハ此條件ヲ要セス

第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事

第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ定ム

第二十條 左ニ掲クル者ハ公證人タルコトヲ得ス

第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第二 盜罪詐偽賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者

第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少クモ二箇月前ニ告示ス可シ

第二十二條 試験委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ス

第二十三條 試験ノ科目ハ公證人規則、民法、訴訟法、商法其他公證人ノ職務ニ關スル法律命令トス

第二十四條 公證人タラント欲スル者ハ願書ニ試験及第證書ハ寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出ス可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法科大學卒業生ハ其卒業證書代理人ハ其免許狀ヲ以テ及第證書ニ代フルコトヲ得

第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ス

第二十六條 試験ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試験ニ合格セサル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十七條 試験及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知リ面識アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス面識ナキトキハ其本籍或ハ寄留地ノ郡區長若クハ戶長ハ證明書又ハ公證人氏名ヲ知リ面識アル丁年者二人以上ヲ以テ其人ヲ證セシム可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第二十九條 左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ス

第一 公證人及囑託人ノ親族雇人又ハ公證人ノ筆生

第二 第二十條ニ掲ケタル者

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載ス可シ

第一 囑託人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齢

第二 囑託人代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第四 郡區長戸長ノ證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要シタルトキハ其族籍住所職業氏名年齢

第五 證書ヲ作りシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日ノ記入ヲ遺脱シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セズ

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス  
接續ス可キ字行ニ空白アルトキハ黒線ヲ以テ之ヲ接續ス可シ  
數量並ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸柒捌玖拾陌阡萬ノ字ヲ用フ可シ

第三十二條 度量衡貨幣ノ數量、名稱及曆法ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記ス可シ  
既ニ廢シタル度量衡、貨幣、曆法又ハ外國ノ度量衡、貨幣、曆法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ

於テハ之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲ストキハ其原字ノ尙ホ明カニ讀得可キコトヲ要ス且何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追加、改正、消字ノ効ヲ有セズ

第三十四條 證書ヲ作りタルトキハ關係人ニ讀聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係人各自署名捺印シ公證人ハ其治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ  
公證人並ニ關係人署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セズ  
若シ署名スル能ハサル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告ニ從フ可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セズ

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑託人之ニ捺印ス可シ

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得ス其親屬他人ノ代理人タルトキモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セズ

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若クハ代言人ト爲リ又ハ爲リタルコトアルトキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作ルコトヲ得ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セズ

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記ス可カ



ラネ若シ之ヲ記シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セス又ハ亡失シタル場合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サザルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又ハ其證書ノ寫ヲ原本ニ連續ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本書トニ割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連續スルコトヲ得之ヲ連續シタルトキハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用ス可シ

第二節 正本及謄本

第四十三條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價證券ノ支辨ニ限リ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ニ違ヒタルトキハ正本ノ効ヲ有セス

正式謄本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ

第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作リタル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係人ノ面前ニ於テシ原本ヲ作リタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セザルトキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記

一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

裁判所ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連續ス可シ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場合ニ於テハ公證人及他ノ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ其旨ト年月日トヲ附記シ權利者ヲシテ署名捺印セシム可シ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經之ヲ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 數事件ヲ列記シ數人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡ス可カラス又抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可カラス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ非サレハ再度之ヲ渡スコトヲ得ス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス  
再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公證人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡スコトヲ命スルコトアル可シ

其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ末尾ニ附記シ公證人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第五十條 抄録謄本又ハ抄録正式謄本ハ總テ正本又ハ正式謄本ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作ル可シ其効力モ亦同シ

第五十一條 證書ノ謄本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應シ之ヲ渡スコシ

第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十三條 抄録謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職業氏名ヲ記シ末尾ニ抄録謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第二節 見出帳

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差出シ綴目合目ニ其所長ノ官印ヲ受クヘシ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條及第三十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件件ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シテ直ニ後任者ノ命セラレタル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セシム可シ

役場ヲ廢シタルトキハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公證人ニ命ス可シ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキトキ其他必要ト見認ムル場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印ヲ爲ス可シ

第五十九條 公證人免職辭職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作り共ニ署名捺印シテ授受ス可シ  
死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所

ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ル可シ  
書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ封印ヲ解  
キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ  
後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁  
判所ニ差出ス可シ  
第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ爲スニ及ハス書類ノ保  
存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ  
兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フ可シ  
第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡ストキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三  
日以内ニ自己ノ引繼キタルトキノ目錄ニ依テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署  
名捺印ス可シ  
受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄始審裁判所ニ差出ス可  
シ  
第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命ス可シ  
第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ其受繼人タル  
旨ヲ附記ス可シ  
前任者ノ作りタル原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ兼任者タル旨ヲ附記ス可  
シ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料及旅費日當ヲ受クルコ  
トヲ得  
第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付キ貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付キ拾錢但一行二十字  
二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス  
第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ作りタルトキハ草案ノ  
手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得ス但其原本ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受クル  
コトヲ得  
第六十七條 公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フトキハ往返トモ旅費トシテ  
一里毎ニ貳拾錢ヲ受クルコトヲ得其職務ヲ行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ  
滞留スルトキハ日當七拾錢ヲ受クルコトヲ得  
第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ職務ヲ行フトキハ其手数料ハ總テ兼任者之ヲ受ク可シ  
第六十九條 手数料ノ外證券印紙並ニ郵紙ノ代價ハ囑託人ヨリ之ヲ受クルコトヲ得  
第七十條 囑託人ノ求メアルトキハ手数料等ノ計算書ヲ與フ可シ  
第七十一條 手数料等ニ係リ争ノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハラヌ管轄始審裁判所ニ訴フ  
可シ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於テ第七十三條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分ス可シ

第七十三條 左ノ違犯ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ過料ニ處ス

第八條ニ違ヒタル時

第十一條ニ違ヒタル時

第十三條ニ違ヒタル時

第三十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時

第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十二條ノ第二項ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第六項ニ違ヒ譴問セシコトヲ記入セス又ハ肩書ヲ爲サ、リシ時

第三十五條ニ違ヒタル時

第四十條ニ違ヒタル時

第四十一條ニ違ヒタル時

第四十二條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十六條ニ違ヒタル時

第五十二條ニ違ヒタル時

第五十三條ニ違ヒタル時

第五十四條ニ違ヒタル時

第五十五條ニ違ヒタル時

第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時

第六十一條ニ違ヒタル時

第六十三條ニ違ヒタル時

第七十四條 左ノ違犯ハ二圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス

第四十三條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上三十圓以下ノ過料ニ處ス

第二條ニ違ヒタル時

第七條ニ違ヒタル時

第十條ノ第三項ニ違ヒタル時

第二十八條ニ違ヒタル時  
 第三十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時  
 第三十三條ニ違ヒタル時  
 第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時  
 第三十六條ニ違ヒタル時  
 第三十七條ニ違ヒタル時  
 第三十八條ニ違ヒタル時  
 第三十九條ニ違ヒタル時  
 第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス  
 第四條ノ第二項ニ違ヒタル時  
 第十五條ニ違ヒタル時  
 第十六條ニ違ヒタル時  
 第十七條ニ違ヒタル時  
 第七十七條 公證人前數條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ抗告ス  
 抗告トシテ得但抗告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス  
 第七十八條 公證人停職當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス  
 第二十條ノ第一第三第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身許保證金ヲ差入レサルトキ亦前

項ニ同シ

第七十九條 公證人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生セシメタルトキハ之ヲ賠償ス  
 可シ

○第五百六十九 代人規則 明治六年六月十八日 布告第二百十五號  
 人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候條此旨

別紙

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラス己レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ  
 但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任ス  
 ルヲ得ヘシ  
 第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人  
 ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タルヘシ  
 第三條 凡ソ代人ハ必術正實ニシテ滿二十歲以上ノ者ヲ撰ムヘシ 九年布告第四拾四號  
 第四條 代人ハ總理代人都理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者  
 ニシテ都理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス  
 第五條 凡ソ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲ント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シタ

ル委任狀ヲ與フ可シ  
但シ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載ス可シ  
第七條 委任狀書式左ノ通

抽者共儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ總理代人ト定メ抽者ノ名義ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事

一何々ノ事(但權限ノ次第ヲ分條記載スベシ)  
右代理ノ委任狀仍而如件

住所身分

年號何年何月何日

姓 名 印

第八條 代人ヲ任スルノ權限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク

委任セントスルハ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

○第五百七十 代人ニ於テ結約シタル證書ニ付裁判處分方ノ件明治六年六月二十四日  
司法省達丁第十八號大審院諸

義務ノ證書ニ某代理某ト代人ノ名ヲ以テ捺印結約シタル者ハ權利者ニ於テ此證書ヲ提供シ

出訴スルニハ其本人ヲ相手取ル固ヨリ當然ナリト雖モ便宜ニ隨ヒ記名捺印シタル代人ヲ相手取ルコトアルモ必ス棄却スルヲ要セズ他ノ本人又ハ代人ヲ引合人トシテ召喚シ俱ニ之カ答辭ヲ爲サシメ被告者ノ義務ニ歸スルハ被告者ヲシテ負擔セシメ引合人ノ義務ニ歸スルニ於テハ引合人ヲシテ負擔セシムル様相當ノ裁判ヲ爲シ與フヘキ筋ニ有之候條豫テ心得モ可有之候得共爲念此旨相違候事

第二節 證書認メ方印章押用其他證據書類ニ關スル件

○第五百七十一 年月日ヲ略記シタル書類證據ニ立タサル件明治六年六月十四日  
布告第二百十二號

來ル七月十日以後ノ證書類及ヒ公私ノ文書ニハ總テ年號月日ヲ記載可致若シ疎漏ニシテ年月日ノ内何レニテモ略記シタル時ハ裁判上證據ニ不立候事

○第五百七十二 年月日ノ内ヲ略記シタル書類證據効力ニ關スル件明治八年二月十七日  
司法省布達甲第一號

明治六年第二拾貳號ヲ以テ年月日ノ内何レニテモ略記シタル諸證書類及ヒ公文書等ハ裁判上證據ニ不立旨布告相成候ハ其證書全ク證據ニ不立ル儀ニハ之レナク唯其年月日ノ早晚ヲ定ムヘキ證據ニ相立サル儀ニ候條右等ノ證書ヲ以テ年月日ノ早晚ニ拘ハラズ其記入事件ニ付訴訟ニ及フ片ハ取揚ケ裁判ニ及フヘク候條此旨布達候事

○第五百七十三 諸證書ニ氏名記載並押印ノ件明治十年七月七日  
布告第五十號

諸證書ノ姓名ハ必ス本人自ラ書シテ實印ヲ押スヘシ若シ自書スルコト能ハサル者ハ他人ヲシテ代書セシムルヲ得ルト雖モ必ス其實印ヲ押スヘシ其代書セシ者ハ本人姓名ノ傍ニ其代書

セシ事由ト己レノ姓名トヲ記シテ實印ヲ押スヘシ

但シ本文諸證書トハ契約ノ證書(金穀地所建物貸借買賣讓與並預リ證書等凡テ民事上相

互ノ契約ニ係ルモノヲ云フ)ニ限ルモノトス十年布告第六拾四號

右布告候事

○第五百七十四

銀行及銀行類似ノ會社ニ於テ證書ニ役印押用ノ件明治二十一年十二月四日

大藏省訓令第四十七號北海道廳府廳

諸證書ニ押用スル印章ノ儀ニ付客年十二月第六十八號ヲ以テ及訓令置候處今般日本銀行ヨリ請願ノ趣ニ據リ役印押用ノ儀及認可候條爾今私立銀行及銀行類似會社ニ於テモ適宜役印ヲ押用セシメ苦シカラス

○第五百七十五

私ノ證書ニ官名ヲ記シ官名ヲ刻シタル印章ヲ用ユルヲ禁スル件明治六年六月二十三日

布告第二百二十號

本年第九拾六號ノ公布ノ儀ハ取消シ更ニ左之通改正候條此旨相達候事

金銀貸借其他私用ノ證書類ヘ官名ヲ記載シ或ハ官名ヲ刻シタル印章ヲ相用候儀ハ固ヨリ有之間敷事ニ候得共間ニハ誤用候者モ有之哉ノ趣不都合ノ事ニ候條屹度令禁止候事

○第五百七十六

婦女ニシテ一家相續ノ者證據書類ニ自印ヲ押用スヘキ件明治六年五月三十一日

布告第八十四號

婦女子ニテ一家相續致候者ハ公私トモ他日證據ト爲スヘキ者ヘ自印相用可申事

○第五百七十七

證書面金員數等改作塗抹及數字ノ字體ニ係ル件明治八年五月十二日

府廳

大政官達第七十七號

金銀貸借證書面金員數等ヲ改作塗抹シ文ハ一二十等ノ數字ヨリ往々紛雜ヲ醸シ不都合ノ儀不抄候間凡ソ他日ノ證據ヲ要スル書類ハ自今一二十ノ數字ハ壹貳拾ノ字體ヲ用ヒ無餘儀改作塗抹スル時ハ其處ニ押印シ且物品員數等一紙ニ書盡シ難ク又ハ帳簿ヲ爲スモノハ其綴目及ヒ綴目ニ押印シ總テ他日紛雜ノ基ヲ生セサル様深ク注意可致旨各管下ヘ可曉諭此旨相達候事

○第五百七十八

諸品賣買取引證書認メ方ノ件明治八年五月十八日

布告第八十七號

諸品賣買取引心得方定書去ル明治四年九月布告ニ及ヒ置候處自今相廢シ候尤向後賣買ノ約定ハ勿論其他諸取引ノ定約ヲ爲ス證書ニハ成ルヘキ丈ケ其約定ノ趣意ヲ明確ニ書キ載セ疎漏曖昧ノ事之レナキ様注意可致此旨布告候事

第二節

郡區役所市町村公署ノ帳簿謄寫提出方ノ件

○第五百七十九

詞訟審判上必要ニ付地方廳郡市役所町村役場所管之帳簿等寫取差

廻方ノ件

明治十年六月四日

司法省內務部第一號府廳

詞訟審判上必要ニ付其廳並郡區役所及戶長役場所管之帳簿等寫取方各裁判所ヨリ及照會候節ハ右寫本ニ正寫之證トシテ該廳所之印ヲ捺シ同所ヘ差廻候様可取計事  
但寫本多數ニテ費用相掛候節ハ其照會ヲ發シタル裁判所ヨリ仕拂候儀ト相心得且詞訟事

件ニ依リ元帳ヲ要スルキハ差廻方可取計此旨豫テ郡區役所及戶長役場ヘ相達可申事

第二款 附託及賣買讓與貸借ニ關スル件

前加 地所建物船舶特許意匠商標賣買讓與質入等ノ登記ニ係ル諸則

○第五百八十 登記法明治十九年八月十一日(八月十三日公布)法律第一號

朕登記法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

登記法

第一章 總則

第一條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ヲ爲ス者ハ本法ニ從ヒ地所建物ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ登記所ニ登記ヲ請フ可シ

已ニ登記ヲ受ケタル地所建物船舶ニ變更ヲ生シ又ハ亡失破壞シタルトキハ其物件ノ所有者ヨリ登記ノ變更又ハ取消ヲ請フ可シ二十年七月法律第一號

農商務省特許局ニ於テ登錄シタル特許意匠及商標ノ登記ハ本人ノ居住地ヲ管轄スル登記所ニ於テ之ヲ爲スコシ二十三年九月法律第七十八號ヲ以テ本條ヲ改正ス

第二條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ノ登記ハ始審裁判所長之ヲ監督ス可シ

第三條 登記事務ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ取扱フモノトス治安裁判所遠隔ノ地方ニ於テハ郡區役所其他司法大臣指定スル所ニ於テ之ヲ取扱ハシム

第四條 登記所ノ位置及其管轄ノ區域ハ司法大臣之ヲ定ム

第五條 登記官吏ハ登記事務取扱ニ付テハ始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第六條 登記簿ニ登記ヲ爲サル地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノトス

第七條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ニ付キ登記ス可キ概目左ノ如シ

第一 地所ハ郡區町村名、字、番地、地目、反別若クハ坪數、地券面ノ價格

第二 建物ハ郡區町村名、字、番地、地目、構造ノ種類、建坪、造作ノ有無

第三 西洋形船舶ハ汽船、風帆船ノ區別、船名、番號、登簿噸數、公稱馬力、汽機及汽罐ノ種類端船其他必要ノ所屬品

第四 日本形船舶ハ船名、番號、積石數、間數、端船其他必要ノ所屬品

第五 登記ノ事由

第六 金額

第七 質入書入ハ其期限及利息

第八 所有者及登記ヲ受クル者ノ氏名住所

第九 一筆ノ地所又ハ一棟ノ建物ヲ區別シ賣買讓與質入書入ヲ爲ストキハ其事實

第十 二番以後ノ書入ヲ爲シ又ハ書入ニ爲シタルモノヲ質入ト爲シ質入ニ爲シタルモノヲ書入ト爲ストキハ其事實



第十一 登記ノ年月日

第八條 登記ノ契約者雙方又ハ其代理人登記所ニ出頭シテ之ヲ請求ス可シ

登記ヲ請フ者アルトキハ登記官吏ハ之ヲ受付帳ニ記載シ契約者ヨリ差出シタル書類ノ受  
取證ヲ下付ス可シ

登記ヲ爲スニハ登記ノ番號ヲ記シ登記官吏之ニ署名捺印ス可シ同上法律ヲ以テ  
本條ヲ改正ス

第九條 地所建物船舶ニ關スル差押假差留假差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付テ

ハ裁判所ノ命令書又ハ官廳ノ照會書ニ依リ登記簿ニ其記入ヲ爲ス可シ同上法律ヲ以テ(命  
令書)ノ下ニ(又ハ官  
廳ノ照會書)ノ  
八字ヲ加フ

(前項ノ記入ハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ取消スコトヲ得ス)同上法律ヲ以テ  
本項ヲ削除ス

前項ノ記入ハ裁判所又ハ官廳ヨリ直ニ之ヲ求ム可シ同上法律ヲ以テ  
本項ヲ加フ

第十條 登記ハ第一條第二項第十五條第二項第十六條第十七條及第十八條ヲ除クノ外契約

者雙方ノ請求若クハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ爲シ又ハ變更シ又ハ取消スコ  
トヲ得ス二十年七月法律第一號  
ヲ以テ本條ヲ改正ス

第十一條 登記ノ謄本又ハ抜書又ハ一覽ヲ要スル者ハ其登記所ニ(出頭シテ)之ヲ請求スル

コトヲ得二十三年九月法律第七十八號ヲ  
以テ(出頭シテ)ノ四字ヲ削除ス

第十二條 登記官吏ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十三條 登記ニ關スル取扱ノ手續及登記簿ノ書式ハ司法大臣之ヲ定ム

第二章 買賣讓與

第十四條 地所建物船舶ノ買賣讓與ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シテ其證書ヲ

示シ其署名捺印シタル謄本一通ヲ差出ス可シ但第九條第十六條第十七條第十八條及第十

九條ノ登記ニ付テハ證書ヲ示スノ限ニ在ラス

本條ノ謄本ハ登記簿ノ一部トシテ之ヲ添ヘ置ク可シ

證書ニ塗抹改竄アリテ利害關係人ノ承諾シタル證ナク登記官吏ノ求ニ應シ請求者ヨリ之

ヲ説明スルコト能ハサルトキハ登記官吏ハ登記ヲ拒絕スルコトヲ得同上法律ヲ以テ  
本條ヲ改正ス

第十五條 家督相續ニ因リ地所建物船舶ノ登記ヲ請フトキハ雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

死亡者失踪者若クハ離縁戸主ノ遺留シタル地所建物船舶ヲ相續スル者登記ヲ請フトキハ

親屬「二名以上」又親屬ナキトキハ近隣ノ戸主二名以上述署ノ書面ヲ差出シ且證明書類ア

ルモノハ之ヲ示ス可シ同上法律ヲ以テ(親屬)ノ下(又)  
二名以上)ノ四字ヲ加フ

第十六條 行政官廳ノ公賣處分ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者登記ヲ請フトキハ

落札達書及其代金完納ノ證書ヲ示ス可シ

本條ノ登記ハ其處分ヲ爲シタル官廳ヨリ直ニ之ヲ求ム可シ本項ノ規定ハ第十七條及第十

九條ノ場合ニモ亦之ヲ準用ス同上法律ヲ以テ  
本項ヲ追加ス

第十七條 官有ノ地所建物船舶ノ拂下又ハ無代價下渡ヲ受ケ登記ヲ請フトキハ其指令ノ本

書若クハ達書ヲ示ス可シ

第十八條 民有ノ地所建物船舶ヲ官有ト爲シタルトキハ其官廳ハ第七條ノ概目ヲ示シテ登記ヲ求ム可シ

第十九條 裁判執行上ノ糶賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者アルトキハ裁判所ノ命令ニ依リ其登記ヲ爲ス可シ

第二十條 地所船舶ノ賣買讓與ニ因リ地券鑑札ノ下付若クハ書換ヲ請フ者ハ登記所ヨリ登記濟ノ證ヲ受ク可シ二十年七月法律第一號  
本條ヲ改正ス

第三章 質入書入

第二十一條 地所建物船舶ノ質入書入ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

質借ノ爲ニ非スシテ義務ヲ果ス可キ保證ノ爲メ地所建物船舶ヲ質入書入ト爲シ其登記ヲ請フ者モ亦前項ノ規定ニ依ル可シ

地所建物船舶ノ質入書入ニ付テモ亦第十四條ヲ準用ス二十三年九月法律第七十八號ヲ以テ本項ヲ追加ス

第二十二條 書入ノ地所建物船舶ヲ重テ書入ト爲ストキハ第二債主ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ書入ト爲リタル地所ヲ質入ト爲シ又ハ質入ト爲リタル地所ヲ書入ト爲ストキ亦同シ

第二十三條 質入書入契約ノ全部若クハ一部ノ解除又ハ變更ニ付テモ亦第十四條ヲ準用ス  
同上法律ヲ以テ本條ヲ改正ス

第二十四條 同一ノ地所建物船舶ニ付キ數個ノ登記ヲ爲ストキハ其登記ヲ請フ日時ノ前後ニ因リ登記ノ順序ヲ定ムルモノトス

第四章 登記料及手数料

第二十五條 地所建物船舶賣買ノ登記ニ付テハ其買受人左ノ賣買代價ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ヲ納ム可シ

五圓未滿	五錢
拾圓以上	拾錢
拾圓未滿	貳拾五錢
貳拾圓以上	五拾錢
貳拾圓未滿	壹圓
貳拾圓以上	貳圓
百圓未滿	三圓
百圓以上	四圓
百圓未滿	五圓
百圓以上	六圓
千圓未滿	七圓
千圓以上	七圓

千圓以上	八圓
千五百圓未滿	九圓
貳千圓未滿	拾圓
貳千五百圓未滿	拾貳圓
三千圓未滿	
三千五百圓未滿	
四千圓未滿	
四千五百圓未滿	
五千圓未滿	
五千五百圓未滿	
六千圓未滿	
六千五百圓未滿	
七千圓未滿	
七千五百圓未滿	
八千圓未滿	
八千五百圓未滿	
九千圓未滿	
九千五百圓未滿	
十千圓未滿	
十千五百圓未滿	
十一千圓未滿	
十一千五百圓未滿	
十二千圓未滿	
十二千五百圓未滿	
十三千圓未滿	
十三千五百圓未滿	
十四千圓未滿	
十四千五百圓未滿	
十五千圓未滿	
十五千五百圓未滿	
十六千圓未滿	
十六千五百圓未滿	
十七千圓未滿	
十七千五百圓未滿	
十八千圓未滿	
十八千五百圓未滿	
十九千圓未滿	
十九千五百圓未滿	
二十千圓未滿	
二十千五百圓未滿	
二十五千圓未滿	
三十千圓未滿	
三十千五百圓未滿	
三十一千圓未滿	
三十一千五百圓未滿	
三十二千圓未滿	
三十二千五百圓未滿	
三十三千圓未滿	
三十三千五百圓未滿	
三十四千圓未滿	
三十四千五百圓未滿	
三十五千圓未滿	
三十五千五百圓未滿	
三十六千圓未滿	
三十六千五百圓未滿	
三十七千圓未滿	
三十七千五百圓未滿	
三十八千圓未滿	
三十八千五百圓未滿	
三十九千圓未滿	
三十九千五百圓未滿	
四十千圓未滿	
四十千五百圓未滿	
四十一千圓未滿	
四十一千五百圓未滿	
四十二千圓未滿	
四十二千五百圓未滿	
四十三千圓未滿	
四十三千五百圓未滿	
四十四千圓未滿	
四十四千五百圓未滿	
四十五千圓未滿	
四十五千五百圓未滿	
四十六千圓未滿	
四十六千五百圓未滿	
四十七千圓未滿	
四十七千五百圓未滿	
四十八千圓未滿	
四十八千五百圓未滿	
四十九千圓未滿	
四十九千五百圓未滿	
五十千圓未滿	
五十千五百圓未滿	
五十一千圓未滿	
五十一千五百圓未滿	
五十二千圓未滿	
五十二千五百圓未滿	
五十三千圓未滿	
五十三千五百圓未滿	
五十四千圓未滿	
五十四千五百圓未滿	
五十五千圓未滿	
五十五千五百圓未滿	
五十六千圓未滿	
五十六千五百圓未滿	
五十七千圓未滿	
五十七千五百圓未滿	
五十八千圓未滿	
五十八千五百圓未滿	
五十九千圓未滿	
五十九千五百圓未滿	
六十千圓未滿	
六十千五百圓未滿	
六十一千圓未滿	
六十一千五百圓未滿	
六十二千圓未滿	
六十二千五百圓未滿	
六十三千圓未滿	
六十三千五百圓未滿	
六十四千圓未滿	
六十四千五百圓未滿	
六十五千圓未滿	
六十五千五百圓未滿	
六十六千圓未滿	
六十六千五百圓未滿	
六十七千圓未滿	
六十七千五百圓未滿	
六十八千圓未滿	
六十八千五百圓未滿	
六十九千圓未滿	
六十九千五百圓未滿	
七十千圓未滿	
七十千五百圓未滿	
七十一千圓未滿	
七十一千五百圓未滿	
七十二千圓未滿	
七十二千五百圓未滿	
七十三千圓未滿	
七十三千五百圓未滿	
七十四千圓未滿	
七十四千五百圓未滿	
七十五千圓未滿	
七十五千五百圓未滿	
七十六千圓未滿	
七十六千五百圓未滿	
七十七千圓未滿	
七十七千五百圓未滿	
七十八千圓未滿	
七十八千五百圓未滿	
七十九千圓未滿	
七十九千五百圓未滿	
八十千圓未滿	
八十千五百圓未滿	
八十一千圓未滿	
八十一千五百圓未滿	
八十二千圓未滿	
八十二千五百圓未滿	
八十三千圓未滿	
八十三千五百圓未滿	
八十四千圓未滿	
八十四千五百圓未滿	
八十五千圓未滿	
八十五千五百圓未滿	
八十六千圓未滿	
八十六千五百圓未滿	
八十七千圓未滿	
八十七千五百圓未滿	
八十八千圓未滿	
八十八千五百圓未滿	
八十九千圓未滿	
八十九千五百圓未滿	
九十千圓未滿	
九十千五百圓未滿	
九十一千圓未滿	
九十一千五百圓未滿	
九十二千圓未滿	
九十二千五百圓未滿	
九十三千圓未滿	
九十三千五百圓未滿	
九十四千圓未滿	
九十四千五百圓未滿	
九十五千圓未滿	
九十五千五百圓未滿	
九十六千圓未滿	
九十六千五百圓未滿	
九十七千圓未滿	
九十七千五百圓未滿	
九十八千圓未滿	
九十八千五百圓未滿	
九十九千圓未滿	
九十九千五百圓未滿	
百圓未滿	

以上五千圓マテ毎二二圓ヲ増加ス

第二十六條 地所建物船舶讓與ノ登記ニ付テハ其讓渡人讓受人ニ於テ時價相當ノ價格ヲ定

メ前條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其讓受人ヨリ登記料ヲ納ム可シ

第二十七條 地所建物船舶質入書入ノ登記ニ付テハ其質入人書入人ハ第二十五條ニ掲クル

金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ半額ヲ納ム可シ但一件ニ付キ金五錢ヨリ下スコト

ヲ得ス

第二十八條 第二十一條第二項ノ登記ニ付テハ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム

可シ

第九條第一項ノ記入ニ付テハ其價格ノ定マリタル物件ハ其價格又其價格ノ定マラサル物

件ハ時價相當ノ價格ヲ定メ前條ノ例ニ依リ其登記料ヲ納ム可シ

第九條第十六條第十七條及第十九條ノ場合ニ於テ處分ヲ爲シタル官廳ヨリ登記ヲ求ムル

ニハ登記料ハ登記印紙ヲ請求書ニ貼用シテ其官廳ニ納メシメ官廳ヨリ之ヲ登記所ニ送付

ス可シ同上法律ヲ以テ本項ヲ追加ス

第二十九條 第十五條ノ登記ニ關シ地所ニ付テハ一筆毎ニ金三錢ヲ納メシメ建物船舶ニ付

テハ時價相當ノ價格ヲ定メ第二十五條ニ掲クル金額ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ノ五

分一ヲ納メシム但一件ニ付金三錢ヨリ下スコトヲ得ス

第十五條第一項ノ場合ニ於テ家督相續ノ日ヨリ六十日ヲ經過シタルモノニ付テハ讓與ノ

登記料ヲ納メシム同上法律ヲ以テ本條ヲ改正ス

第三十條 左ニ掲クル者ハ手数料トシテ金五錢ヲ納ム可シ

第一 登記事件ノ取消又ハ其變更ノ登記ヲ請フ者ハ每一件

第二 登記ノ謄本若クハ拔書ヲ請フ者ハ每一枚

第三 登記ノ一覽ヲ請フ者

第三十一條 左ニ掲クルモノハ登記料及手数料ヲ要セス

第一 官廳ノ請求ニ係ル登記

第二 公立ノ學校病院、公園及養育院ニ係ル登記

第三 社寺、堂宇及墳墓地ニ係ル登記

第四 人民共有ノ用惡水路溜池敷、堤敷、井溝敷及公衆ノ用ニ供スル道路ニ係ル登記

第三十二條 登記所ニ於テ第二十五條第二十六條第二十八條第二項及第二十九條ニ從ヒ届

出タル價格ヲ不相當ト認ムルトキハ其事件ニ關係ナキ者三名ヲ選ヒ之ヲ評價入ト爲シテ

其價格ヲ評定セシム可シ

第三十三條 評價入ノ評定シタル價格届出ノ價格ヨリ増加スルトキハ其評價ニ關スル費用ハ其登記料ヲ納ムル者之ヲ負擔ス可シ若シ其價格届出ノ價格ト同價又ハ低下ナルトキハ該費用ハ其登記所ニ於テ之ヲ支辨ス可シ

第三十四條 評價人ニ選ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十五條 評價人ノ日當ハ登記所ノ見込ヲ以テ一日金貳拾錢ヨリ五拾錢マテヲ給ス可シ

第五章 罰則

第三十六條 詐偽ノ所爲ヲ以テ登記料ヲ減脱シ及之ニ通謀シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十七條 本法ニ依リ罰金ニ處スル者ハ刑法ノ不論罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

附則

第三十八條 明治十年第二十八號布告船舶買賣書入質手續同十三年第五十二號布告土地買賣讓渡規則同十四年第二十號布告地券證印稅則其他從前ノ法律規則中本法ニ牴觸スルモノハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十九條 地所賣買讓與荒地起返開墾鐵下年期明等總テ地券下付書換ニ係ル手續及其手数料ハ大藏大臣之ヲ定ム

第四十條 登記簿ニ未タ登記セサル地所建物船舶ニ付キ從來保有セル所有權ヲ明確ナラシ

メント欲スル者ハ管轄登記所ニ其所有權ノ登記ヲ請フコトヲ得

右ノ登記ヲ請フ者ハ物件ヲ明示シタル請求書ニ其所有權ノ證明書類ヲ添ヘ之ヲ登記所ニ差出ス可シ但其所有權ヲ取得シタルコトヲ證スル證書ヲ其證明書トシテ差出ストキハ第十四條ヲ準用ス

本條ノ登記ニ關シ地所ニ付テハ一筆毎ニ金壹錢ヲ納メシメ建物船舶ニ付テハ一件毎ニ金壹錢ヲ納メシム同上法律ヲ以テ本條ヲ改正ス

第四十一條 登記所ハ初テ登記ヲ爲シタル地所ニ付テハ之ヲ其地ノ土地臺帳所管應ニ通知シ其所管應ヨリハ右ノ地所ニ付キ分合筆又ハ地番號及地目ノ變換アル毎ニ之ヲ登記所ニ通知ス可シ

土地臺帳所管應ハ明治二十二年勅令第三十九號ニ依リ登記所ヨリ所有ノ移轉又ハ質入ニ付キ通知ヲ受ケタル地所ニ關シ前項ノ變換アルトキモ亦通知ヲ爲ス可シ

登記所ハ前二項ノ通知ニ依リテ登記簿ニ其變換ノ旨ヲ追記ス可シ(同上)

(附言) 二十一年七月司法省訓令第十號(符號第二百五十二)同年十月全第十五號(符號第二百五十三)同年十一月全第十七號(符號第二百五十四)ヲ以テ失踪死亡跡遺留財產處分ニ付裁判所ノ認許ヲ得セシムル件ヲ掲ク

○第五百八十一 登記法取扱規則明治二十三年十月二十九日司法省令第七號

本年法律第七十八號ヲ以テ登記法中改正追加セシメタルニ付明治十九年省令甲第五號ヲ廢

シ登記法取扱規則左ノ通之ヲ定ム (番式離形ハ別ニ示シ) (離形略ス)  
登記法取扱規則

第一章 地所建物船舶ノ登記

第一節 登記簿

第一條 登記簿ハ地所建物船舶ヲ分チ別冊ト爲スコシ  
登記簿ハ前項ノ外町村毎ニ冊ヲ分テ之ヲ設ク可シ但事件寡少ナル町村ニ付テハ數町村ヲ  
合セ一冊ト爲スコトヲ得此場合ニ於テハ各町村毎ニ見出ヲ付スコシ

市及ヒ事件夥多ナル町村ニ付テハ大字其他從前ノ區畫ニ從ヒ分冊スルコトヲ得  
第二條 登記簿ハ一用紙毎ニ登記物件ノ番號ヲ付シ且其一用紙ヲ表題登記簿用紙中物件ノ欄ヲ  
股ケタル所ヲ云フ以下準  
之及ヒ甲乙丙ノ三區ニ分チ仍ホ其表題及ヒ各區ヲ數欄ニ分ツモノトス

其表題ハ登記法第七條ノ第一號第二號第三號第四號及ヒ商法第八百二十六條ノ第一號第  
二號第三號第四號ニ掲ケタル項目ヲ登記スルノ所トス

其甲區ハ賣買讓與等所有權ノ移轉及ヒ從來保有セル所有權ヲ登記スルノ所トス  
其乙區ハ質入借入及ヒ商法第八百五十二條ノ船舶ニ對スル債權ヲ登記スルノ所トス  
其丙區ハ登記法第九條ニ記載シタル諸件ヲ記入スルノ所トス

船舶登記簿ハ第一號書式ニ準シ地所建物ノ登記簿ハ從前ノ例ニ依ル可シ  
第三條 登記簿ハ登記所ノ請求ニ因リ地方裁判所長之ヲ渡スモノトス

登記所ハ凡一年間用フヘキ登記簿ノ冊數及ヒ各冊ノ枚數ヲ見積リ豫メ前項ノ請求ヲ爲ス  
可シ

第四條 登記簿ハ地方裁判所長其枚數ヲ表紙ノ裡面ニ記載シテ之ニ職氏名ヲ署シ職印ヲ捺  
シ且毎葉ニ契印スコシ

第五條 町村ノ分合アリタル場合ニ於テハ登記所ハ其旨ヲ地方裁判所長ニ申告シ更ニ分合  
セシ町村ニ對スル登記簿ノ下付ヲ受ク可シ  
前項ノ場合ニ於テ舊登記簿其他之ニ屬スル帳簿ハ現状ノ儘之ヲ保存シ已ニ登記シアル事  
件ノ變更取消ハ其登記簿ニ登記スコシ

第二節 登記手續

第六條 登記ヲ請フ者ハ第二號書式ニ準シ登記ノ件目等ヲ記載シ實印ヲ押シタル名刺ヲ登  
記所ニ差出スコシ但商法ニ依リ船舶ノ登記ヲ受クルモノハ明治二十三年省令第八號第五  
條ニ從ヒ陳述書ヲ差出スヘシ

登記簿ノ謄本若クハ抜書又ハ登記所ノ閱覽ヲ請フ者亦同シ  
第七條 後見人ヨリ登記ヲ請フトキハ後見人タルハ證書ヲ登記所ニ差出スコシ

代人ヲ以テ登記ヲ請フトキハ代理ノ委任狀ヲ付與シ之ヲ登記所ニ差出サシム可シ  
第八條 登記所ニ於テハ受付帳ヲ製シ置キ登記ノ出願若クハ請求等ノ順序ニ從ヒ之ニ其受  
付事件ヲ記載シ番號ヲ付シ第三號書式ニ準シ書類ノ受取證ヲ下付スコシ

第九條 登記官ハ受付番號ノ順次ニ從ヒ願人ヲ取調ヘ證書類ヲ審査シ登記ノ手續ヲ爲スコシ

第十條 登記簿ニ未タ登記セサル地所建物船舶ニ付キ初テ登記ヲ爲ス場合ニ於テハ先ツ登記簿表題ノ部ニ其物件ヲ記載シ相當區ニ登記ノ手續ヲ爲スコシ

第十一條 乙區ノ登記ヲ爲ス場合ニ於テ未タ物件及ヒ所有者ノ登記アラサルトキハ前條ノ手續ヲ爲シタル上甲區中登記事由ノ欄内ニ書入若クハ質入ノ登記出願ニ付記載セシ旨ヲ記シ乙區中ニ出願事件ノ登記ヲ爲スコシ

丙區ノ記入ヲ爲ス場合ニ於テ未タ所有者ノ登記アラサルトキハ前條及ヒ本條前項ニ準シ物件及所有者ノ氏名ヲ記載シ丙區中ニ命令事件ノ記入ヲ爲スヘシ

第十二條 登記物件ノ番號ハ初テ其物件ヲ記載スル毎ニ出願若クハ請求ノ順序ニ從ヒ之ヲ付スルモノトス但其番號ハ町村毎ニ之ヲ區別シテ仍ホ地所建物船舶ヲ區別シテ之ヲ付ス可シ

第十三條 同時ニ登記ヲ求メ且ツ同一ノ所有者ニ屬スル同種類ノ物件ハ同町村内ニ在リテ且合録ノ爲メ混雜ヲ生スルノ憂ナキニ於テハ之ヲ同番號中ニ記載スコシ若シ其物件多數ニシテ同番號中ニ記載スル能ハサルトキハ所有者ノ意見ヲ聽キ便宜分割シテ之ヲ次ノ番號中ニ記載スルコト得

第十三條 一番號中ニ登記セシ數物件ヲ分チ又ハ一物件ヲ割テ賣買讓與スルトキハ表題部

中取消ノ欄内ニ其要領及ヒ第何號ニ移シタルコトヲ記載シ分割シタル物件ハ未タ登記ヲ爲サル用紙ニ記載シテ新番號ヲ付シ且第何號ヨリ移シタルコトヲ記載スコシ其他ノ手續ハ通常ノ場合ニ同シ

前項ノ場合ニ於テ舊番號中分割セラレタル物件ハ之ヲ朱抹スコシ若シ一物件ヲ割キタルトキハ更ニ殘餘ノ現狀ヲ記載スコシ

數番號ニ登記セシ物件ヲ合併シテ賣買讓與スルトキハ各番號中甲區登記事由ノ欄内ニ其旨ヲ明記シテ登記ヲ爲スコシ

第十四條 一番號中ノ物件ヲ分割シテ質入書入若クハ差押等ト爲ストキハ乙區若クハ丙區ノ登記事由欄内ニ何カノ物件ヲ質入書入若クハ差押等ト爲シタルコトヲ明記シテ登記ヲ爲スコシ

數番號ニ屬スル物件ヲ合併シテ質入書入ト爲ストキハ各番號中乙區登記事由ノ欄内ニ其旨ヲ明記シテ登記ヲ爲スコシ

第十五條 登記法第二十二條ノ場合ニ於テハ乙區登記事由欄内ニ第二債主ニ於テ其質入又ハ書入中ニ係ルコトヲ了知セル旨ヲ明記シテ登記ヲ爲スコシ

第十六條 物件ヲ分割シテ賣買讓與スル爲メ第十一條ノ手續ヲ爲ス場合ニ於テ新ニ番號ヲ付スヘキ物件既ニ舊番號ノ物件ト共ニ書入質入ト爲リタルモノナルトキハ前番號ノ表題部中物件ヲ記載シタル側ニ第何號ヲ云フノ物件ト連帶シテ書入若クハ質入トナリタルモ

ノナルコトヲ付記ス可シ  
 其書入若クハ質入ヲ取消タル場合ニ於テハ前項ノ付記ヲ朱抹ス可シ  
 第十七條 質入書入ノ權ヲ賣買讓與シ相續ノ場又ハ他人ニ於テ負債者ノ負債ヲ辨濟シテ債主ノ權ニ代ル等權利ノ他人ニ移リタル場合ニ於テ登記ヲ出願シタルトキハ之ヲ乙區變更ノ欄内ニ登記スヘシ  
 質入書入ノ債主負債主ト協議ノ上質入書入トナシタル物件ヲ引取り所有者ト爲リタル場合ニ於テハ乙區取消ノ欄内及ヒ甲區登記事由ノ欄内ニ其要旨ヲ登記ス可シ  
 第十八條 質入ヲ變更シテ書入ト爲シ書入ヲ變更シテ質入ト爲シ又ハ利息期限等ヲ變更シタル場合ニ於テハ之ヲ乙區變更ノ欄内ニ登記スヘシ  
 商法第八百五十四條ノ裏書讓渡モ亦タ乙區變更ノ欄内ニ登記ス可シ  
 第十九條 登記法第十五條及ヒ第四十條ノ場合ニ於テ登記ヲ爲ス可キ土地若シ華族世襲財產ナルトキハ請求者ノ申出ニ依リ世襲財產タル旨ヲ表題部中物件ノ側ニ記入ス可シ  
 第二十條 登記法第四十條ノ場合ニ於テハ甲區登記事由欄内ニ從來保存スル所有權ヲ明確ナラシメンカ爲メ登記出願ニ付何々ノ證明書類ニ依リ登記スル旨ヲ記載シ價格及權利移付者ノ欄ヲ朱抹ス可シ  
 第二十一條 従前ノ公證簿ニ登記セシ書入質入ノ取消ヲ願出タルトキハ手数料ヲ徵收セシ舊手續ニ依リ之ヲ終結ス可シ

若シ變更ノ登記ヲ願出タルトキハ第十一條ノ例ニ準シ所有者及ヒ原契約ヲ登記シタル上乙區變更ノ欄内ニ其登記ヲ爲ス可シ此場合ニ於テハ變更ノ手数料ヲ徵收ス可キモノトス  
 第二十二條 登記ヲ受タル物件ノ全部若クハ一部毀壞燒失流亡等ニ依リテ消滅シタルトキハ其物件ノ所有者ヨリ登記ヲ爲シタル登記所ニ書面ヲ以テ其旨ヲ届出ツ可シ但其物件質入書入又ハ差押等ニ係ルトキハ債主又ハ差押等ノ權利者ノ連印ヲ要ス  
 地目變換ノ場合ニ於テモ亦前項ノ例ニ準シ届出ヲ爲ス可シ  
 第二十三條 前條ニ依リ毀壞燒失流亡等ノ届出アリタルトキハ表題部中取消欄内ニ之ヲ登記シ其物件ハ朱抹ス可シ若シ殘餘アルトキハ第十三條第二項ノ例ニ準シ其現狀ヲ記載ス可シ  
 地目變換ヲ届出タルトキハ表題部中記載シタル地目ヲ更正シ其旨ヲ付記ス可シ  
 前二項ノ場合ニ於テハ手数料ヲ徵收ス  
 登記法第四十一條ニ依リ土地臺帳所管廳ヨリ變換ノ通知ヲ受ケタルトキモ亦タ表題部ノ物件ニ付テ訂正ヲ爲ス可シ  
 第二十四條 船舶ノ登記ニ付テハ明治二十三年勅令第二百十九條船籍規則第一條ニ依リ定メタル船籍港ヲ管轄スル登記所ヲ以テ定繫場ノ登記所トス  
 第二十五條 商法ニ依リ爲スヘキ船舶ノ登記ハ明治二十三年省令第八號第六條第七條及ヒ第十條ヲ適用ス

第三十六條 鑑札アル船舶ニ付始メテ登記ヲ請フモノハ其鑑札ヲ示ス可シ但船舶ニ釘付シタルモノハ此限リニ在ラス  
商法ニ依リ船舶ノ登記ヲ請フモノハ船舶證書其他商法ノ規定ニ從ヒ必要ナル證明書類ヲ示ス可シ

第二十七條 登記所ノ同管内ニ在リテ船舶ノ定置場ヲ更改シタルトキハ登記ノ變更ヲ請フ可シ其登記所ハ轉入セシ町村ノ登記簿ニ其物件及ヒ所有者ヲ轉寫シ表題部中物件ヲ記載シタル側ニ某町村ヨリ轉入セシ旨ヲ付記シ若シ船舶既ニ書入質入又ハ差押等トナリタルモノナルトキハ其旨ヲモ付記ス可シ轉出セシ町村ノ登記簿ニハ其表題部中取消ノ欄内ニ轉出ノ旨ヲ記載シテ其物件ハ朱抹ス可シ  
若シ他ノ登記所ニ屬スル町村ニ轉入スルトキハ原登記所コリ登記簿ノ拔書ヲ受ケ之ヲ轉入地ノ登記所ニ差出シ其登記ヲ請フ可シ  
前項ノ拔書ニハ現存セル所有權、書入質、差押其他ノ負擔ヲ摘載シ且轉出ノ旨ヲ付記シ之ヲ本人ニ下付シテ轉入スル登記所ニ差出サシメ其登記所ハ其拔書ニ依リ登記ヲ爲シ登記濟ノ通知ヲ原登記所ニ送致ス可ク原登記所ハ其通知ニ依リ前項ノ例ニ準シ轉出ノ旨ヲ記載ス可シ  
前二項ノ場合ニ於テハ登記法第三十條第一號第二號ノ規定ニ依リ變更及ヒ拔書ノ手数料ヲ徵收スルモノトス

第二十八條 建物ニ付キ登記ヲ請フトキハ其圖面ヲ登記所ニ差出ス可シ

建物ノ圖面ハ邸地ノ形狀、坪數、(段別)方位及ヒ建物ノ形狀、間尺、位置等ヲ記シ登記ヲ受ク可キ建物ノ圖ハ墨引墨字ト爲シ登記外ナル建物アルトキハ其圖ハ朱引朱字ト爲ス可シ  
建物ノ圖面ニハ登記法第九條第十六條第十七條第十八條第十九條ノ場合ヲ除クノ外結約者雙方之ニ署名捺印ス可シ但同第十五條第二項ノ場合ニ於テハ親屬又ハ近隣戶主之ニ連署ス可シ

地所船舶ニ付キ圖面アルトキモ亦前項ニ定メタル署名捺印若クハ連署ヲ要ス

第二十九條 登記事件ニ附屬スル圖面アルトキハ登記簿表題中ニ其旨ヲ記載シ其圖面ニ登記物件ノ番號ヲ記シ帳簿ニ編入ス可シ

第三十條 騰記ノ爲メ差出シタル原證書ニハ登記濟ノ上登記官吏之ニ登記物件ノ番號及ヒ登記濟ノ旨ヲ記載シ年月日ヲ附シ且登記所ノ印ヲ捺シテ受取證持參人ニ其受取證ト引換ニテ還付ス可シ

前項ノ記載ヲ以テ登記法第二十條ニ定メタル登記濟ノ證トス但此記載ヲ爲スヘキ證書ナキトキハ物件ヲ記シタル書面ヲ差出サシメ前項ニ準シ登記濟ノ旨ヲ記入シテ本人ニ下付スヘシ

第三十一條 登記簿ノ一用紙中或ル欄内更ニ登記ヲ爲ス可キ餘白ナキニ至リタルトキハ其登記簿中未タ登記ヲ爲サル他ノ用紙ニ原番號ヲ轉寫シ之ニ其番號ノ第二ナルコトヲ付



記シ原用紙番號ノ下ニハ第一ノ文字ヲ追加シ且第何冊何丁ニ綴ク旨ヲ記載ス可シ第三以下ノ綴ヲ設クルトキ亦此例ニ準ス

前項ノ場合ニ於テ新用紙ニハ原用紙ニ記載アル登記ノ順番ヲ繼續シテ之ヲ付ス可シ

第三十二條 登記所ニ登記ヲ爲ス字畫ハ鮮明ナルヲ要ス又金錢物品ノ數量ヲ記スルニハ必ス壹貳參拾ノ文字ヲ用フ可シ

登記ヲ爲スニハ之ヲ墨書ス可シ

文字ハ之ヲ改竄ス可カラス若シ削除スルトキハ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存ス可シ

訂正挿入削除等ヲ爲シタルトキハ登記官吏之ニ認印ス可シ

本條ノ規定ハ受付帳ニモ亦之ヲ適用ス

第三節 帳簿及ヒ謄本拔書

第二十三條 登記簿及ヒ受付帳ノ外登記所使用ノ帳簿ハ左ノ如シ

- 一 登記見出帳
- 二 證書謄本綴込帳
- 三 謄本下付帳
- 四 登記済證下付帳
- 五 圖面綴込帳
- 六 請求書綴込帳（附則所又ハ行政廳ノ登記請求書ヲ綴込タルモノ）

七 登記願書綴込帳（登記法第十五條第三項附則所又ハ登記簿ノ綴込タルモノ）

八 證明書綴込帳（登記法第四十條ノ證明書類ヲ綴込タルモノ）

九 名刺綴込帳

十 代理及ヒ後見ノ證書綴込帳

商法ニ依リ船舶登記ヲ受クル爲メ差出タル書類ハ明治二十三年省令第八號第八條ニ從ヒ之ヲ保存ス可シ

綿二十四條 登記見出帳ハ地所建物ニ付テハ地所ノ番號ニ依リ船舶ニ付テハ十五噸以上及ヒ百五十石以上ハ其船名ニ依リ其以下ノモノハ鑑札ノ番號ニ依リ登記物件ノ番號ヲ付スル毎ニ各番號ヲ記入スルモノトス

同番號ノ地所ニシテ數筆ニ分レタルモノニ付テハ其分筆ノ爲メニ付シタル符號ヲ番地ノ下ニ記載ス可シ

同番地ニアル建物ニシテ棟ヲ異ニシタルトキハ建物ノ番號ヲ番地ノ下ニ記載シテ之ヲ區別ス可シ

番地若クハ棟ヲ同フスル建物ヲ分割シテ賣買讓與質入書入ト爲ストキハ其各部ノ建物ニ子丑寅卯ノ符合ヲ付シテ之ヲ區別ス可シ

前三項ノ區別ハ登記簿ニモ亦之ヲ記載ス可キモノトス

第二十五條 登記ヲ請フ爲メ登記法第十四條第二十一條第一項及ヒ第二十三條ニ依リ差出

シタル證書ノ謄本ハ甲部乙部ニ別テ綴込ミ各箇ニ番號ヲ付シ且登記簿ノ市町村名冊號及ヒ丁數ヲ記ス可シ其登記簿ニハ相當欄内ニ何部謄本綴込帳第何號ト記入スヘシ

甲部謄本綴込帳ハ登記簿中甲區ノ登記ニ關スルモノヲ保存スルモノトス

乙部謄本綴込帳ハ登記簿中乙區ノ登記ニ關スルモノヲ保存スルモノトス

謄本綴込帳ハ一箇年ヲ以テ一冊ト爲シ其表紙ニ明治何年分ト記ス可シ但事件夥多ナル登記所ニ在リテハ第一第二ノ符號ヲ以テ一箇年分ヲ分冊シテ綴込ムコトヲ得

第三十六條 登記簿ノ證ヲ請フ者アルトキハ其願書ニ記載アル物件ヲ登記簿ト照査シタル上登記簿ノ旨ヲ朱記シ登記簿下付帳ト割印シテ之ヲ下付スヘシ

第三十七條 登記ニ關スル帳簿ハ常ニ書箱ニ藏メ其封緘ヲ嚴ニシ非常持退ノ準備ヲ爲シ勉テ紛亂毀損ヲ豫防ス可シ

登記ニ關スル帳簿ハ之ヲ保存スル爲メノ外登記所外ニ出スコトヲ得ス

第三十八條 登記簿ノ閱覽ヲ請フ者アルトキハ官吏ノ職務ヲ以テ閱覽スルノ外吏員ノ面前ニ於テ之ヲ閱覽セシム可シ

第三十九條 登記簿ノ謄本若クハ拔書ヲ請フ者アルトキハ其用紙ニ謄寫シ謄本下付帳ト割印シテ之ヲ下付ス可シ但手数料ヲ領收セサル前ニ謄本又ハ拔書ヲ下付スルコトヲ得ス

第四十條 謄本ハ登記簿用紙ノ全部ヲ遺漏ナク謄寫シテ之ヲ作ル可シ

拔書ハ請求アル部分ノミ登記簿ヨリ摘寫シテ之ヲ作ル可シ

第四十一條 登記所ニ出頭セスシテ謄本又ハ拔書ヲ請フ者アルトキハ手数料ノ外郵送料ヲ前納スルニ於テハ之ヲ送付ス可シ

第四節 登記料手数料及ヒ評價費用

第四十二條 登記印紙ハ名刺又ハ陳述書ニ之ヲ貼用ス可シ但登記官吏ハ貼用印紙ノ過不足ヲ調査シタル後之ヲ消印セシムルコトヲ得

第四十三條 登記法第三十二條ニ依リ評價ヲ要スル場合ニ於テハ登記料ヲ納ムル者ヨリ登記所ノ見積タル費用金額ヲ豫納ス可シ

第四十四條 登記所ニ於テハ評價人ヲシテ速ニ物件ノ所在ニ就キ價格ヲ評定シ其評價書ヲ差出サシム可シ

評價人中ノ一名意見ヲ異ニスルトキハ他ノ二名ノ意見ニ依リ價格ヲ定ム可ク若シ各自意見ヲ異ニスルトキハ更ニ評價人ヲ撰定ス可シ

第四十五條 登記法第三十三條ニ依リ評價ノ費用ヲ本人ニ負擔セシム可キトキハ豫納金ヲ以テ之ヲ支辨シ殘額アルトキハ之ヲ還付ス可ク不足スルトキハ納完スルマテ登記ヲ爲ス可カラス

第二章 特許、意匠及ヒ商標ノ登記

第四十六條 特許、意匠及ヒ商標ノ登記ハ農商務省特許局ノ通知ニ依リ第四號書式ニ準シ之ヲ爲スモノトス

第四十七條 明治二十三年十一月一日以後ニ特許、意匠及ヒ商標ノ登録ヲ受ケ又ハ賣與、讓與、共有、書入ヲ爲シタル者其居住地ヲ轉スルトキハ從前ノ居住地ヲ管轄スル登記所ニ自身ニテ又ハ郵便ヲ以テ其旨ヲ届出ツ可シ  
 前項ノ届出アリタルトキハ登記所ハ登記簿ノ謄本ヲ作り之ヲ轉住地ノ登記所ニ送付シ登記簿ニ轉出ノ旨ヲ記載ス可シ  
 其送付ヲ受ケタル登記所ハ其謄本ニ依リ登記簿ニ登記ヲ爲シ且轉入シタル旨及ヒ其年月日ヲ附記ス可シ  
 第四十八條 第三條第四條第三十二條第三十七條第三十八條第三十九條及第四十條ハ本章ノ登記ニモ之ヲ適用ス

附則

第四十九條 既ニ登記簿ニ登記シタル船舶ニ付商法第八百二十五條及ヒ商法施行條例第二十九條ニ依リ登記ヲ請フモノアルトキハ登記官更ハ其登記簿ノ物件欄内ノ餘白ニ商法第八百二十六條ニ規定シタル事項ヲ追記シ年月日ヲ付シ署名捺印ス可シ  
 (附言) 本條例第二十四條ノ船籍規則ハ二十五年勅令第百十七號ヲ以テ商法中本則ニ關聯スル條項ノ施行延期中實施セサル旨公布ニ依リ掲ケス●本條例中ニ明記セル商法第八百二十五條及同施行條例第二十九條ハ追テ公布アルマテ施行セサルモノトス  
 ○第五百八十二 後見人ニ於テ登記請求方ノ件明治十九年十二月六日 司法省訓令第三十九號裁判所登記所

來ル明治二十年二月一日以後登記法施行ニ付後見人ヨリ地所建物船舶ノ登記ヲ請フトキハ明治十六年七月十八日內務省達ノ通り其證書又ハ願書ニ親屬連署ノ上ナラテハ登記ヲ爲サル儀ト心得ヘシ

(附言) 十六年七月十八日內務省ノ達ハ(符號第二百三十二)ニ掲載ス  
 ○第五百八十三 一筆ノ土地ニシテ之ヲ分合シ賣買讓與スルモノノ登記方ノ件明治二十一年十二月 司法省訓令第十三號始審裁判所治安裁判所登記所

一筆ノ土地ニシテ之ヲ分合シ賣買讓與スルモノハ明治二十年大藏省訓令第二十五號ニ依リ行政廳ノ分合處分ヲ經タル上登記ヲ爲スヘキモノトス  
 但本訓令ニ抵觸スル指令内訓ハ之ヲ取消ス

○第五百八十四 一筆ノ土地ヲ分合シテ賣買讓與賣入ヲ爲サントスルモノ其登記請求前ノ手續ノ件明治二十二年十一月十五日 大藏省訓令第六十七號府縣(沖繩縣ヲ除ク)

一筆ノ土地ヲ分合シテ賣買讓與賣入ヲ爲サントスルモノハ其登記請求前ニ於テ明治二十年大藏省訓令第二十五號ノ手續ヲ爲サシムヘシ  
 ○第五百八十五 土地臺帳規則第三條ニ依リ登記ヲ爲シタルトキ通知日限ノ件明治二十二年五月七日 司法省令第三號

本年三月勅令第三十九條第三條ノ通知ハ登記ヲ爲シタル日ヨリ十日内ニ之ヲ爲スヘシ  
 但地租每納期終盡ノ前十日以内ハ其都度通知ヲ爲スヘシ

(附言) 勅令第三十九號ハ(符號第三百十一)ニ掲ク

○第五百八十六

區裁判所及出張所登記所ニ地所建物船舶所有者ノ印鑑簿設備ノ件  
明治二十六年三月九日  
司法省令第三號

第一條 區裁判所及其出張所並ニ登記所ニ於テハ管轄内ノ地所建物及船舶所有者ノ印鑑簿ヲ備ヘ登記照合ノ用ニ供スヘシ

第二條 地所建物及船舶ノ所有者ハ地所建物ニ付テハ其所在地船舶ニ付テハ其定繫場ヲ管轄スル區裁判所若クハ其出張所又ハ登記所ニ印鑑ヲ差出スヘシ

改印シタルトキ亦前項ニ同シ但前印紛失ニ因リ改印シタルトキハ同一ノ區裁判所若クハ其出張所又ハ登記所ニ印鑑ヲ差出シタル者二名以上ノ連署シタル書面ヲ以テ改印ノ事由ヲ疏明スヘシ

印鑑ハ郵便ヲ以テ差出スモ妨ケナシ  
第三條 印鑑ハ左ノ雜形ニ從フヘシ

印鑑雜形 (用紙厚紙五寸横二寸)

印鑑	姓名
④	那市町番地
	姓名

○第五百八十七

特許意匠及商標ノ登記方ノ件  
明治二十三年十月二十四日  
農商務省告示第九號

本年九月法律第七十八號ヲ以テ登記法第一條ニ追加規定ノ農商務省特許局ニ於テ登錄シタル特許意匠及商標ノ登記ハ當省特許局ヨリ本人ノ居住地ヲ管轄スル登記所ニ通知シテ之ヲ爲スヘキニ付本人ニ於テ其登記ヲ登記所ニ請求スルヲ要セス

● 伺指令

● 不動産買賣讓與契約中買戻ノ契約アリテ登記アルモノノ公賣取扱方ノ件  
明治二十年六月二十一  
福岡縣伺

地所船舶買賣讓與ニ際シ附帶ノ契約則チ年期買戻等ノ契約アリテ登記簿ニ登記シアルモノハ該物件ニ對シ公賣處分ヲナストキ關係人ヘ通告スヘキ筋ト被相考候得共右ハ明治十年第七十九號布告第一條但書及十六年太政官第十六號達ノ範圍外ニシテ他ニ成文無之ニ付若シ其通知ヲ怠リ處分ヲ決行セシ後關係人ヨリ不納金辨納ノ義申出ツルト雖公賣處分ヲ取消スヘキ者ニ無之義ト相心得可然乎

內務大臣 司法省 伺  
明治二十年十月七日  
伺之通

但附帶ノ契約アルモノハ公賣ノ際公告ニ明記スヘシ  
第一節 寄附及附託物ニ關スル件

○第五百八十八

社寺學校病院等ニ寄附ノ物件所有權轉移ノ件  
明治九年四月十八日  
布告第五十四號

社寺學校病院等へ寄附候土地建物其他物品等別段之契約無之分ハ寄附主ニ於テ其所有ヲ離レタルモノトシ一般ノ讓渡ヲ以テ處分候條此旨布告候事

○第五百八十九 實印ヲ預ケ又ハ預ルヲ禁ス明治五年七月十日 布告第百九十七號

人民實印ノ儀ハ諸事證據ニ相成大切ノ品ニ候處妄ニ他人へ相預ケ候者有之ニ付間々奸詐ノ訴訟差起リ以ノ外ノ事ニ候以來實印相預候儀固被禁候條萬一心得違ノ者有之候節ハ預ケ人預リ人共吃度可及處置候事

○第五百九十 預金穀裁判處分方ノ件明治七年三月四日 布告第百二十七號

預金穀ハ其證書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、ルノ明文ナキ分ハ出訴候トモ本年五月一日ヨリ以後ハ貸金同様ニ裁判可致候條此旨布告候事

○第五百九十一 預金穀取戻訴訟受否年限ノ件明治十年二月二十九日 布告第百三十二號

預ケ金穀ノ訴訟ハ其證書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、ル明文アルモノハ年數ニ拘ハラズ受理スヘキ成規ニ候處自今二十年以前ニ係ルモノハ一切裁判不及候條此旨布告候事

○第五百九十二 預ケ金穀裁判ニ及ハサル年限指稱方ノ件明治十年八月十七日 司法省達第百五十九號 大審院 裁判所

本年第拾貳號公布ノ儀ニ付太政官へ甲號ノ通上申候處乙號ノ通御裁令有之候條此段爲心得相違候事

甲號 本年第拾貳號公布ノ儀ニ付上申 十年四月十日

本年第拾貳號公布預ケ金穀訴訟ノ儀ハ過去ノ事ヲ指サヤ將來ノ事ヲ謂フヤ法文明確ヲ欠クト雖モ思フニ必ス既往ノ事ノミニ限リ一時ノ活斷ヲ以テ之カ限界ヲ立テシ者ニシテ即チ丁卯以前ノ貸借訴訟ハ不採上ノ類ナラント信用セリ若シ之ヲ將來ノ事トシ通常ノ出訴期限ヲ定メラレタル者トセハ抑モ又附托物(預物ヲ云金銀ナラハ封印ノ儘)ニ出訴ノ期限ヲ設クルハ何等ノ理由ナリヤ本來預ケ預リノ約ハ金穀貸借ノ約ト其性質ヲ異ニスルモノナルニ出訴ノ期限ヲ設クルハ政府ノ法律ヲ設テ我カ人民ノ權利財產ヲ保護スルノ原理ニ戻ルモノナリ今此ニ貸借ト其性質ヲ異ニシ金穀貸借ニ出訴期限ヲ設ケ預ケ預リノ約ニ出訴期限ヲ設ケ可カラサルノ理由ヲ述ントス抑政府保護ノ點ヨリ之ヲ論スル時ハ假令幾多ノ歲月ヲ經ルト雖モ貸タル者へハ取返スヘキノ權利ヲ伸張セシメ借タル者へハ返償スヘキノ義務ヲ執行セシムルコソ當然ノ理ナリ然レモ年移リ物換リ事跡モ自ラ湮滅シテ其證ヲ得ルニ由ナク假令ヒ之ヲ得ルモ證以テ證トナスニ足ラス徒ニ紛争ヲ生シ權利者却テ權利ヲ失ヒ義務者却テ義務ヲ免ル、ニ至ルノ恐アリ元來金穀ノ貸借タルヤ貸主ハ其契約期限ニ至ラサレハ返償ヲ要求スルノ權ナク借主ハ公ニ之ヲ自由ニ使用スル所有權ヲ得タル者ニテ期限ニ至リ始メテ返償ノ義務アリ故ニ債主其期限ヲ過テ數十年ノ久ヲ經ルモ一應ノ催促ナク又訴アルコトモ無キ時ハ法律上借主ハ曩既ニ返償シタル者ト看做シ又債主ハ既ニ其權利ヲ拋棄シタル者ト看做スノ理由ニ基ク是レ金穀貸借上出訴期限ノ設アル所以ナリ然ルニ附託ノ約ハ本來懇親信用ノ點

ヨリ起ル者ニシテ財産ヲ自家ニ藏貯スルノ安堵ナラサルカ或ハ子孫ノ爲メ慮ル所アルヨリ  
 之ヲ他人ニ附託シ保護ヲ依頼スル所以ナルヲ以テ(預ケ金ハ必ス融通使用スル)附託者ハ何時タリ  
 トモ之ヲ取戻ヲ得ヘキハ固ヨリ言ヲ俟タス受託者ニ在テハ受託中敢テ其所有權ヲ得タルモ  
 ノニアラス其所有權ハ他人ニアルヲ明認シテ其附託ヲ受ケ之ヲ保護スルノ義務アルモノ  
 ニテ雙方ノ附託者ノ求ニ應シ何時モ之ヲ返戻セサルノ理由アリ故ニ制法者ハ此ノ理由ニ  
 基ツキ雙方ノ權利義務ヲ保護完全ナラシムヘキモノナリ是レ其附託物等ニ出訴ニ期限ヲ設  
 クヘカラサルノ理由ナリ(彼ノ有名ナル佛國民法中此ノ)然レモ受託者受託ノ物品ヲ轉賣若クハ遺  
 失等ヲナシ現存セサル時附託者ヨリ要償ノ訴ヲナスハ固ヨリ出訴ノ期限ヲ要スヘキナリ  
 請フ當ミニ之ヲ論セン元來受託者ハ最初契約ノ時ヨリ一種ノ義務ヲ負フ者ナリ第一ハ附託  
 者ノ求メニ從ヒ何時タリトモ返戻スヘキノ義務アリ第二ハ若シ返戻シ能ハサル時ハ其償ヲ  
 爲スヘキノ義務アリ故ニ其物品受託者ノ手ニ現存セサル時ハ第二ノ場合即チ其償ヲ要求ヲ  
 ナサハルヘカラス是ニ於テハ其附託物ヲ轉賣遺失セシヨリ出訴ノ期限ヲ起算スヘク若シ  
 附託者ヨリ轉賣遺失等ノ日ヲ證據立ル能ハサル時ハ初メ附託契約ノ時ヨリ起算スヘキ者タ  
 リ(抑モ附託契約ハ全ク附託者ノミニ權利アリテ其附託セシ翌日ニテモ何時ニテモ取戻シ得ヘキ者ナ  
 リ)然ラシムル所蓋斯場合ニ至テハ一般負債要償ト同一ノ性質ナレハナリ是ニ於テ之ヲ觀レ  
 ハ附託物取戻ノ訴ニ二十年ノ出訴期限ヲ立ツルハ事理ニ反シ事實ニ戻リ決シテ年限ヲ設ク  
 ヘキモノニ非ス而シテ亦必スシモ出訴期限ヲ立テサルモ物換リ星移リテ現物存在セサルニ

唯其預リ證文ヲ以テ強テ取戻ヲ訴フル者アルモ即チ右第二ノ場合ニ移ルヲ以テ之ヲ裁スル  
 ハ自カラ出訴期限ニ與ルヘケレハ決シテ不都合ヲ生セサルナリ然ル時ハ該公布ハ全ク過去  
 ノ事ノミニ限り候儀ト信用致シ候過般各裁判所ヨリ陸續伺出候ニ付右ノ主旨ヲ以テ指令可  
 及ト存候條一應爲念相伺候也

乙號指令 四月十九日

伺之通

第二節 貸借及質入書入

○第五百九十三 無年期ノ貸金返濟期限ノ件明治六年一月十三日 布告第十號

金穀貸附證文ノ内返濟期限無之歟又ハ出來次第返却可致等ノ證書取置後日訴出ツルニ於テ  
 ハ裁判申渡ヨリ十二ヶ月ノ内濟方可申付事

但從前今後共無年期貸附中内證屢返濟ヲ促スト雖モ滿五年ニ至ル迄一度モ不訴出者ハ裁  
 判ニ不及候尤土地家屋等ノ貸賃ハ不動産ニ屬スル儀ニ付滿五年ヲ過ルト雖モ可及裁判事

○第五百九十四 連帶ノ負債償却方ノ件明治八年四月二十日 布告第六十三號

金穀其他借用證書中借主數名連印ニテ各自分借ノ員數ヲ記載セサル分ハ右連印中失踪又ハ  
 死亡シテ相續人ナキ者等有之トモ其借用シタル金銀其他ノ總額ヲ其連印中現在ノ者ヘ償却  
 可申付候條此旨布告候事

但右證書中分借ノ員數無之トモ別ニ分借ノ明證アルハ此限ニアラス

○第五百九十五 連借證書處分ニ關スル裁定ノ件明治十三年二月十二日  
司法省第三號大審院諸裁判所  
連借證書處分ノ義ニ付甲號ノ通熊谷裁判所ヨリ伺出候間乙號ノ通内訓及ヒ候條爲心得此旨  
相違候事

甲號

熊谷裁判所伺 明治十三年一月二十日

甲乙丙ト連借證書ノ内甲ハ東京乙ハ長崎丙ハ箱館等各所在ヲ異ニセル者アリ右ハ明治八年第六十三號公布ニ照セハ失踪死亡等ノ事故アルニ非レハ債主之レヲ認求セントスルニハ斯所在ヲ異ニセル者ト雖モ其負債者一同ヘ對シ認求セサルヲ得サルモノ、如シ若果シテ然リトセハ連借證書ニシテ別段ノ約條之レ無キ分ハ何レモ保證人ノ義務ト敢テ別ナキモノニ似タリ然レモ右ハ明治十年六月仙臺裁判所伺御指令(民事部第廿七號十一葉見合)ノ意ヲ推考スレハ債主ノ撰ム所ニヨリ其一名又ハ二名ヘ對シ全部ノ請求ヲ爲スモ亦妨ケナシト雖モ現ニ被告セラレタル一名又ハ二名ニ於テ他ノ連借者ノ召喚ヲ乞フ場合ニ在テハ又召喚セサルヲ得サルモノ、如シ然ルニ是等一々召喚セシ上ニ非レハ審理判決スルヲ得サルモノトセハ裁判上頗ル不便ヲ生シ徒ラニ夥多ノ年月ヲ費スノミナラス債主ノ損害モ亦少ナカラス畢竟分借ノ員數ヲ明記セサル連借者ハ素ヨリ保證人ノ義務トハ全ク其生贖ヲ異ニスレハ各自ニ其全額ヲ負擔スヘキ義務ナシトモ亦謂フ可カラス左スレハ債主ニ於テ右連借人ノ内現在スル一名又ハ二名ヲ相手取出訴セシト被告ニ於テ他ノ連借者ノ召喚ヲ求ル際裁判官ニ於テ其

求メニ應シ連借者ヲ召喚スルモ無益ノ時日ヲ經過スルノミニテ現在ノ被告ニ全額返辨セシムルモ不都合之レ無モノト思料スル片ハ直チニ其全額ヲ償却セシメ可然義ト存候得共右ハ前顯第六十三號ノ公布ニ抵觸スルノ疑議有之候間一應奉伺候至急仰内訓候也  
乙號

内訓 明治十三年二月九日

連借證書處分ノ義ニ付伺ノ趣明治八年第六拾三號公布ノ主旨ハ借用證書中數名連印各自分借ノ員數ヲ記セサル分ハ右連印中失踪又ハ死亡シテ相續人無キ者等有之片ニ限リ現在セル數名ノ者ヘ償却可申付トノ義ナレハ獨リ一名又ハ二名而已ニ對シ全額ヲ認求スルヲ得ス必ス訴答文例第八章第廿五條ニ照準スヘシ  
但仙臺裁判所ヘノ指令第二條ハ援引不相成候事

○第五百九十六 動産不動産書入金穀貸借規則明治六年八月二十三日  
布告第三百六號  
動産不動産書入金穀貸借規則左之通相定候條此旨布告候事

- 一 動産不動産書入金穀貸借規則
- 一 動産不動産ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シ右期限中書入ノ動産不動産流亡又ハ燒失ヲ爲スト雖モ負債ハ身代限濟方可申付事
- 一 動産不動産ヲ書入ニ爲シ金穀貸借シ濟方ノ期ニ臨ミ右書入ノ動産不動産ノ相場高下アリテ耀賣ノ價ヒ負債ノ高ヨリ餘分アル時ハ其餘分ハ借主ヘ與フヘシ若シ其價ヒ負債ヨリ不

足ナレハ身代限濟方可申付事

一 壬申第三百號布告以前家祿ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シタル分ハ家祿ヲ除キ外物品ヲ以テ身代限濟方可申付事

○第五百九十七 金穀借用ノ證書他人へ讓渡ノ件明治九年七月六日 布告第九十九號

金穀等借用證書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡ス時ハ其借主ニ證書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡證書有之モ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事

但相續人へ讓渡候ハ此限ニアラス

(附言) 社寺什物田畑山林寄付物古文書類等賣却質入書入ノ件ハ第九類第三章第二款ニ

ニ掲ク●失踪死亡跡遺留財產賣却及質入書ノ手續等ハ第六類第三章第三款第二節ニ掲

ク●十九年八月法律第一號符號第五百八十號登記法ニ於テ地所建物船舶賣却與質入書入

登記ノ件ヲ定ム●二十四年七月內務省訓令第十二號(符號第二百八十一)ヲ以テ神官ニ於

テ神社所藏ノ什器及古文書類賣却與質入書入ヲ禁ス

第三節 保證人辨濟規則

○第五百九十八 金穀貸借請人證人辨濟規則明治八年六月八日 布告第百貳號

明治六年六月第九拾五號布告金穀貸借請人證人辨濟規則本年十月一日ヨリ左ノ通改正(施行)候條同日以後借用證書へ加印候者ハ改正ノ通可相心得此旨布告候事八年布告百廿號ヲ以テ(改正)ノ下(施行)ノ

二字ヲ削リ(候條)ノ下二十二字ヲ加フ

金穀貸借請人證人辨濟規則

第一條 金銀借用返濟相滞リ本人身代限濟方申付候上不足相立候節ハ其不足ノ分證人ハ濟方申渡シ猶不相濟ニ於テハ其證人ヲモ身代限申付其上不足相立候ハ、借主並ニ證人ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致事

第二條 借主逃亡又ハ死去跡相續人無之時ハ其證人ハ濟方申渡シ候上不相濟ニ於テハ身代限申付猶不足相立候ハ、證人ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直次第皆濟可致事

第三條 身代限申付候上不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ雛形之通裁判所ニ於テ其ノ原證文ノ裏へ記シ押印ノ上貸主へ可相渡置事

裏書雛形

第一條ノ節書式

表書ノ元利金何百何拾圓相滞ルニ付借主何ノ誰身代限申付ル處不足相立證人何ノ誰ヲモ身代限ヲ以テ辨償爲致都合金何百何拾圓ニ相成ニ付右請取殘リ何百何拾圓ハ借主何ノ誰證人何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致モノ也

年 月 日

某裁判所印

第二條ノ節書式

表書ノ元利金何百何拾圓借主何之誰死亡跡相續人無之ニ付證人何ノ誰へ身代限裏以テ辨償申付ル處金何百何拾圓ニ相成ニ付右受取殘リ何百何拾圓ハ證人何ノ誰ハ勿論其相續人

年 月 日

某裁判所印

第七百六十五



ニ至ルマテ身代持直次第皆濟可致モノ也(同上(失跡)ナ  
(逃亡)ト改ム  
年月日

某裁判所印

第三款 利息制限

○第五百九十九 利息制限法明治十年九月十一日  
布告第六十六號

別息制限法左之通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下

ハ一ケ年ニ付百分ノ二十(二割)百圓以上千圓以下百分ノ十五(一割五分)千圓以上百分ノ

十二(一割二分)以下トス若シ此制限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各制限ニマテ

引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メタルルル裁判所ヨリ言渡ス

所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ不拘百分ノ六トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者

アルル總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フルルルハ負債主ヨリ借主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金料等ヲ差出

スヘキコトヲ約定スルコトアルル概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケ

タル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルルハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

○第六百 金穀等渡方延滞及無期限ノ約定ヲナシタル分利足處分方明治六年三月二十五日  
司法省布達第四拾三號

預リ金穀

賣掛代金

諸職人手間代

地代

店賃

立替金穀

敷金

證據金

受負金

手附金

小作金穀

村入用ノ割合金穀

雇人給金

飯料

諸品ノ損料

無利息貸金穀

右ノ類ニテ金穀等可相渡期限ニ臨ミ渡方延滞致候節ハ其期限ノ日且期限ナクシテ金穀入用  
次第可相渡旨ノ約定ヲ爲シタル分ハ渡方ノ掛合ヲ受ケ候日ヨリ何レモ利息ヲ生シ可申筋ニ  
付其節ハ雙方示談ヲ以テ利息ノ歩合ヲ定メテ證書ヲ受取渡シ致スヘシ若シ其儀ナクシテ追  
テ訴訟ニ及フ時ハ明治六年第九拾貳號布告ニヨリ處分致シ候條此旨可相心得候事

但債主利息ヲ請求シテ負債者承諾セサル時ニ限リ本文ノ處分ニ及フ可シ若シ雙方示談整

フカ又ハ債主ニ於テ請求ヲ爲サル分ハ此例ニアテス七年司法省布達第二  
十二號ヲ以テ追加ス

○第六百一 金穀貸借利息計算期限明治六年十月二十八日  
司法省布達第七十四號

明治六年當省第二十八號金穀貸借利息ノ儀裁判決定迄計算可致旨及布達置候處右ハ貸借ノ

金穀返濟之日亦ハ身代限配當金處分濟ノ日迄利息ヲ計算致シ候儀ト可相心得此旨布達候事

第二章 刑事ニ付郡市町村長關係ノ件

第一款 刑法ノ明條中公署公吏等ニ關スル條項

○第六百二一 官廳官署官吏印文書鑑札等ノ條項公署公吏公署ノ印文書鑑札等ニ適用

明治二十三年十月八日(十月九日公布) 法律第百號

朕公署、公吏並公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

刑法中官廳、官署ニ關スル條項ハ公署ニ適用シ官吏ニ關スル條項ハ公吏ニ適用シ官印文書免狀、鑑札ニ關スル條項ハ公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ適用ス

●刑法第三百二十九條乃至第四百一一條官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪、第四百七十四條乃至第四百七十六條官ノ封印ヲ破棄スル罪、第四百七十九條乃至第四百八十一條公務ヲ行フヲ拒ム罪、第四百九十四條第四百九十六條第四百九十八條官印ヲ偽造スル罪、第二百三條以下官ノ文書ヲ偽造スル罪、第二百十三條乃至第二百十七條免狀鑑札及疾病證書ヲ偽造スル罪、第二百三十一條第二百三十二條身分ヲ詐稱スル罪、第二百七十三條官吏公益ヲ害スル罪、第二百七十六條第二百七十七條第二百八十四條官吏人民ニ對スル罪、第二百八十九條以下官吏財産ニ對スル罪

●伺指令

●刑法第二百七十七條報告ヲ受ケタル場合及司法警察補助官タル者該條ニ含有ノ件明治十六年十月五日

根室輕罪裁判所檢察請願

第一條 刑法第二百七十七條身體財産ヲ妨害スル犯人アルニ當リ豫審判事檢察官官吏其報告ヲ受ケテ速ニ保護ノ處分ヲ爲サ、ル者ハ云々トアリ右ハ公務ノ餘假則登樓ノ如キ場合ト雖モ該報告ヲ受ケタル以上ハ無論職權ヲ以テ其保護ノ處分ヲ爲スヘキモノト心得可然ヤ將タ公務ノ餘暇ナルヲ以テ治罪法第五條(刑事訴訟法第六十條)ニ依テ通常凡人ノ資格ヲ以テ其處分ヲ爲スヘキ哉

第二條 右第二百七十七條ニハ治罪法第六十條(刑事訴訟法第四十七條)警視警部區長郡長治安判事警部ノ在ラサル地ノ戶長等モ該條ヘ含著シ居ル無論ノ儀ト心得可然哉  
司法省內訓 明治十六年十月三十日

請訓之趣左ノ通心得ヘシ

第一條 職務外ノ時期ト雖モ相當ノ處分ヲ爲スコトヲ得但之ヲ爲サ、ルモ刑法ノ問フ所ニ非ス

第二條 見解ノ通

●官吏ノ職務ニ對シ文書ヲ送致シテ侮辱シタル者處分ノ件明治十七年三月十日 山形始審裁判所酒田支廳檢察官  
官吏ノ職務ニ對シ文書ヲ直チニ其官吏ニ送致シ以テ侮辱シタル者法律ニ明文無之候處右ハ筆記セシ言語ナリトシ又直接之ヲ送致シタルヲ以テ目前ニ於テ爲セルト同一ナリトスル時

ハ刑法第四百十一條初項ヲ以テ論ス可シト雖モ已ニ紙上ニ移シタル上ハ即文書ノ名ヲ命ス可クシテ之ヲ言語ト云フ可カラズ又假令直接之ヲ送致スルモ其身全ク外ニ在レハ之レヲ目前ノ所爲ト言フ可カラサレハ該項ニ依ルヘキモノニ非ラサル可ク然ルニ同條ノ次項ナル其目前ニ非スト雖モ刊行ノ文書ヲ以テ侮辱スト云ヘル其刊行ノ文字ハ即印刷發行ノ二事ニシテ必ス印刷シテ以テ世上ニ公行スルモノヲ云フカ如クナリト雖モ文書ハ必スシモ印刷ヲ要セス手書シタルモノモ亦之ニ含蓄セス又必スシモ廣ク世上ニ發行スルモノノミオラス直ニ其官吏ニ送致スルモノモ亦含蓄シタルモノニシテ該項ニ依リ論スヘキモノニ候哉又ハ縱令其官吏ニ送致スルモ唯雙方ノ間ニ在ルモノニシテ他人ニ漏泄セサルモノナレハ該項ニ含蓄セス到底刑法第二條ニ依リ論スルコトヲ得サル儀ニ候哉

司法省指令 明治十七年三月二十八日

伺ノ趣刑法第四百十一條第一項ニ依リ處分スル儀ト心得ヘシ

第一款 刑法附則及死刑者犯由牌揭示式

○第六百三十一 刑法附則明治十四年十二月十九日  
布告第十七號

刑法附則別冊ノ通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

右奉 勅旨布告候事

(別冊)

刑法附則

第一章 主刑執行

第一條 死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ獄司刑場ニ立會獄司ヨリ囚人ニ死刑

ヲ執行スヘキコトヲ告示シタル後獄丁ヲシテ之ヲ執行セシム但其時限ハ午前十時前トス

第二條 死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルヲ許サス

但立會官吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第三條 死刑ヲ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作り立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印

シ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム可シ

第四條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フヲ禁ス

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭

六月大祓

秋季皇靈祭

神宮神嘗祭

天長節

後桃園天皇祭

新嘗祭

光格天皇祭

十二月大祓

第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ト申スル者ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ検査セシメ果シテ懐胎ナル時ハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケテ執行スヘシ

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ獄司之ヲ許可シ下付スルコトヲ得

第七條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何時ニテモ獄司ノ許可ヲ得テ其親屬故舊ニ接見スルコトヲ得

第八條 死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ屬籍氏名年齢職業住所及ヒ其罪狀刑名ヲ記載シテ左ノ各所ニ榜示公告ス可シ

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前

犯罪ノ地

犯人住居ノ地

第九條 徒流ノ囚ヲ發遣スルハ裁判ヲ爲シタル地ノ獄司ヨリ内務卿ニ上申シ其命令ヲ待テ發船ノ地ニ護送ス可シ

第十條 徒刑ノ囚ハ島地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得

第十一條 流刑ノ囚幽閉中獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ

第十二條 流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ内務司法兩卿ニ上申シ其許可ヲ受ケルコトヲ得

第十三條 徒刑ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者家屬ヲ招キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許スコトヲ得但其路費ハ自ラ之ヲ辨ス可シ

第十四條 流刑ノ囚幽閉ヲ免シ地ヲ限リ居住セシムル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ獄司ノ監督ヲ受ケシム若シ已ムコトヲ得サル事故アル時ハ獄司ニ請フテ限外ニ出ルコトヲ得

第十五條 流刑ノ囚幽閉ヲ免セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シタル時ハ本刑期限内ト雖モ島地ニ於テ直チニ其刑ヲ執行ス可シ

第十六條 懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得

第十七條 禁獄輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ者ハ獄司之ヲ許ス可シ

第十八條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期百日以内ハ工錢ヲ給與セ

第十九條 囚人ニ給與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付シ及ヒ領置スル方法ハ監獄ノ規則ニ從

第二十條 罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル時ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徵收セス  
附加ノ罰金ニ於ル亦同シ

第二章 監視

第二十一條 監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來ヲ檢束スル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀  
ヲ監視セシムル者トス

第二十二條 監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ最近ノ  
警察所ニ護送シ警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致シ監視ヲ執行セシム但主刑ノ期滿免  
除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止タ監視ニ付スル者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ護送スヘシ  
年八月布告第四十二號  
ヲ以テ本條ヲ改正ス

第二十三條 犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ起算滿期ヲ記載シタル文書及ヒ刑名宜  
告書ノ謄本ヲ附ス可シ

第二十四條 (犯人ノ住居遠地ニ在テ一日程ヲ過クル者ハ獄司若クハ檢察官ヨリ先ツ最近  
ノ警察所ニ護送シ其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致ス可シ)同上布告ヲ以テ  
本條ヲ削除ス

第二十五條 警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限定  
シテ旅券ヲ付與シ犯人到着ノ日直チニ之ヲ其地ノ警察所ニ差出サシム但途中事故アリテ  
淹滞シタル時ハ第二十一條ノ例ニ從フ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ其地ノ警察所ニ送送スヘシ  
第二十六條 犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ期間遵守ス可キ條件ヲ讀聞カセ監視  
ノ票ヲ下付ス可シ

第二十七條 監視ニ付セラレタル者ハ其期間左ノ條件ヲ遵守ス可シ  
一 毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルコトヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可  
シ但疾病又ハ已ムコトヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ  
可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス  
三 事故アリテ其住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ  
四 擅ニ他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許サス若シ已ムコトヲ得サル事故アル時ハ其事由ヲ警察所  
ニ具申シ許可ヲ受ク可シ

第二十八條 監視ノ期間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ  
第二十九條 警察所ニ於テ住居ヲ轉スルコトヲ許可シタル時ハ其事由ヲ轉住ノ地ノ警察所ニ  
通知シ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ送送ス可シ

第三十條 他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許可シタル時ハ其里程ヲ計リ先方ノ地ニ滞留スル時日  
ヲ算シ往復日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與ス可シ  
犯人先方ノ地ニ到レハ其地ノ警察所ニ出テ旅券ヲ示シ官吏ノ認印ヲ受ケ限定ノ日數内ニ

歸來リ直チ其旅券ヲ警察所ニ還納スヘシ

第三十一條 旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時淹滞シタル時ハ事由ヲ其地ノ警察所ニ具申シ官吏ノ證書ヲ受テ歸著ノ日旅券ニ添ヘ警察所ニ差出ス可シ

第三十二條 監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引受人ナキ時ハ其期限間懲治場ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在テ歸著スル資力ナキ者亦同シ

第三十三條 懲治場ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸著スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ

第三十四條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付スヘキ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付スヘキ時ハ並ニ主刑滿限ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ

第三十五條 罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ

第三十六條 監視ニ付セラレタル者其規則ヲ遵守シ悛改ノ狀アル時ハ警察官ヨリ其實事ヲ上申シ内務司法兩卿ノ命ヲ受テ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第三十七條 假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ヒ第二十九條ノ例ニ從フ可シ

第三章 假出獄及ヒ特別監視

第三十八條 假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ獄司ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月日ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレンコトヲ内務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ

第三十九條 假出獄ヲ許シタル時ハ獄司ヨリ其證票ヲ犯人ニ下附ス可シ

第四十條 假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 本人ノ屬籍氏名年齢住所刑名及ヒ處刑ノ年月日
- 二 殘期何年月何日假出獄ヲ許ス事
- 三 假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事
- 四 假出獄中更ニ重罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セサル事

第四十一條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財産ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

第四十二條 假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票ノ謄本ヲ添ヘ第二十二條ノ例ニ依リ犯人ヲ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ

第四十三條 特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十四條 特別監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守ス可シ  
一 毎週間一度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルコトヲ表シ監視ノ票ヲ出シ官吏ハ認印ヲ受ク

可シ但疾病又ハ己ムヲ得サル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由ヲ届出ツ可シ

二酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サス

三事故アリテ住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルコトヲ許サス

四往復一日程ヲ過クル地ニ旅行スルコトヲ許サス

第四十五條 特別監視ノ期間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第四十六條 假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル獄司ニ遞送ス可シ

主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ

第四十七條 假出獄ヲ許ス可キ者住所ナク及ヒ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ懲治場ニ留置ス可シ

第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及ヒ第五十一條第五十二條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條 證人ノ日當出頭ハ一度ニ付キ金貳拾錢乃至金五拾錢ノ範圍内ニ於テ豫審判事又ハ裁判所之レテ定ム但止宿料ヲ給與スル場合ニ於テハ日當ヲ給與セス

以下五條 第二十八年二月法律第三號ヲ以テ本條ヲ改正ス

第四十九條乙 醫師、鑑定人、通辯人、翻譯人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金參拾錢乃至金五圓ノ

範圍内ニ於テ豫審判事又ハ裁判所之テ定ム

第四十九條丙 證人、醫師、鑑定人、通辯人、翻譯人ノ旅費ハ海陸路滿一里ニ付キ金五錢乃至

拾錢ノ範圍内ニ於テ豫審判事又ハ裁判所之テ定ム但通路兩線以上アル時ハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

第四十九條丁 證人、醫師、鑑定人、通辯人、翻譯人ノ止宿料ハ一日ニ付キ金貳拾錢乃至金五

拾錢ノ範圍内ニ於テ豫審判事又ハ裁判所之テ定ム但滿八里以上ノ地ヨリ來リ滞在スル時ニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十條 證人、醫師、鑑定人、通辯人、翻譯人ノ日當、旅費及止宿料ハ豫審ニ於テハ其終結

前、公判ニ於テハ其判決前ニ本人ヨリ請求スルニ非サレハ之ヲ給與セス

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第百十條(刑事訴訟法第百二十四條)ニ從

ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日當ノ外若干ノ償金ヲ給スルコトアル可シ

第五十二條 解判舍密等ノ費用及ヒ數多ノ時間ヲ要スル翻譯料ノ類ハ日當ノ外別ニ之ヲ給與ス可シ

第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ納メサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵收ス

第五章 賠償處分

第五十四條 贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト雖モ若シ輾轉シテ他人ノ手

ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還給セシムル者トス

第五十五條 贓物轉轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シタル物品ハ其公商若クハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサレハ直チニ還給セシムルヲ得ス  
 若シ公商ニ由ラズシテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムトヲ得ス但其買取者ハ買者ニ對シ轉價ヲ求ムルヲ得

第五十六條 贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贓物現在スル時ハ還給ヲ拒ムトヲ得ス但典物トシテ受取タル者ハ典主ニ對シ轉價ヲ求ムルコトヲ得

第五十七條 贓物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トヲ區別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス可シ

第五十八條 贓物已ニ費用シタル時又ハ識別ス可カラサル時又ハ其所在ノ知レサル時ハ損害ノ賠償ヲ請求スルヲ得

第五十九條 人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲メ現ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ請求スルヲ得但失火ハ此限ニ在ラス

第六十條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判所ニ請求スルヲ得若シ其審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非サレハ之ヲ請求スルヲ得ス

第六十一條 刑事裁判所ニ於テ贓物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求スル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スヲ得其民事裁判所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從フ可シ

第六十二條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルヲ得第六十三條 贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更

ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルヲ得

○第六百四 死刑者犯由牌揭示式明治十五年二月六日 司法省違内第三號裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

處刑ノ者犯由揭示ノ儀ニ付明治七年五月當省第九號ヲ以テ相違置候旨モ有之候處今般新刑法實施ニ付テハ明治十四年十二月第六拾七號公布刑法附則第八條ニ據リ自今左ノ通改正候條此旨相違候事

一 死刑ノ執行アリタルトキハ重罪裁判所書記ニ於テ左ノ雛形ニ據リ公告案ヲ製シ三日間該應門前ニ揭示シ且別ニ宣告書ノ謄本ヲ製シ犯罪ノ地並犯人住居ノ地方(東京ハ)府縣(他)ハ速ニ送達スヘシ

一 警視廳府縣ニ於テハ重罪裁判所書記ヨリ死刑宣告書ノ謄本送達アレハ左ノ雛形ニ據リ犯罪ノ地並犯人住居ノ地何レモ三日間通衢ニ榜示公告スヘシ

重罪裁判所門前榜示

犯罪ノ地又ハ犯人住居ノ地榜示

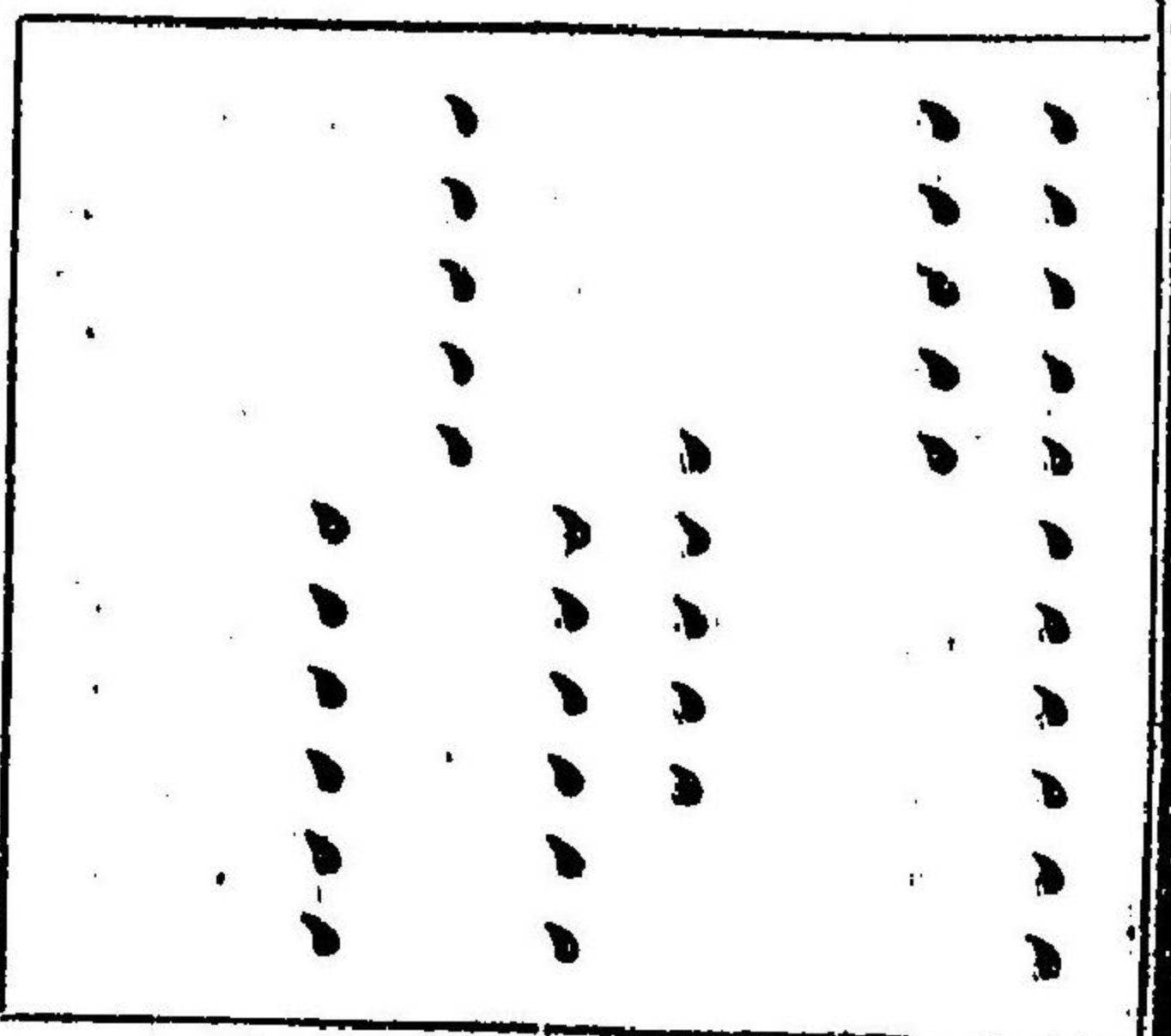
堅紙用

宣告書全文ヲ掲ク  
 、 、 、 、 、  
 、 、 、 、 、  
 、 、 、 、 、  
 、 、 、 、 、

宣告書全文  
 、 、 、 、 、  
 、 、 、 、 、  
 、 、 、 、 、  
 、 、 、 、 、



質ノ品ヲ撰用ス



右之通宣告相成候ニ付公  
告スルモノ也  
警視總監名  
又ハ府縣長官名

伺指令

●市町村公署ニ於テ監視者ノ檢印ヲ受ケシムル件明治十七年三月二十二日  
監視規則中一月兩度所轄警察署ニ出頭セシムルコアリ邊地人民ノ如キハ所轄警察署ヲ距ル  
或ハ十數里ノ遠キニ及ヒ山ヲ躋エ海ヲ航シ日數三四日ヲ要セサレハ往復スル能ハサルモノ  
アリ爲ニ犯則スルモノ比々有之候故ニ自今警察署ナキ地ニ於テハ監視表ノ檢印ヲ戶長役場  
ニ受クルノ便ヲ與フルキハ獨リ犯則者ヲ減スルノミナラス實地ノ取締モ亦大ニ相立可申依  
テ本規則御改正相成度此段及上申候也  
司法省內訓 明治十七年三月十八日

監視規則中改正ノ儀ニ付上申ノ趣檢印ヲ受クヘキ警察署往復一泊以上ヲ要スル地ニア  
ル場合ニ於テハ郡役所又ハ戶長役場ニ出頭シ檢印ヲ受ルモ妨ケナキ儀ト心得ヘシ

●死刑ノ宣告ヲ爲シタル者犯由揭示ノ件明治十六年九月十二日 茨城縣伺  
第一條 茲ニ死刑ノ宣告ヲ受ケタル犯人アランニ其裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲シ該上告棄却  
セラレタル後死刑執行シタル時犯由ヲ榜示公告スルニハ原裁判言渡書ノ全文ヲ掲ケ(上  
告ニ對スル判文ハ公告セス)明治十五年御省丙第三號御達ニ依リ揭示方取扱可然哉

第二條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者前條ノ如ク上告ヲ爲シ其上告ニ付キ原裁判言渡ノ幾分ヲ  
破毀セラレ死刑ヲ執行シタル時ハ原裁判言渡書及ヒ大審院判決書ノ全文ヲ掲ケ公告スル  
儀ト相心得可然哉

右ハ死刑ノ宣告ヲ受ケタル後上告及ヒ哀訴ヲ爲シ其上訴總テ棄却セラレ己ニ裁判確定シタ  
ル者有之ニ付刑ノ執行ヲ爲シタル時ハ取扱方差問候條至急御指揮有之度此段相伺候也

司法省指令 明治十六年九月十八日  
書面伺之通

第十五類 訴訟及訴願

第一章 民事ノ訴訟ニ關シ郡市町村長取扱及心得ヘキ諸則  
第一款 民事訴訟手續

第六百五

民事訴訟法中市町村長取扱及郡吏員及市町村吏員取扱フヘキ條項明治二十三年三月十七日(四月二十一日公布)法律第二十九號

朕民事訴訟法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟法

第一編 總則

第二章 當事者

第七節 訴訟上ノ救助

第九十一條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出タスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條 外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限リ之ヲ求ムルコトヲ得

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ム

ル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得  
原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出タスコトヲ要ス  
其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ  
開示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ニ付テ  
モ之ヲ付與スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ無資力ヲ證スルコトヲ要セス  
相手方上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ  
權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤヲ調査スルコトヲ要セ  
ス

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セザリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何  
時々トモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ効力ヲ生ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟済スルコトノ假免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三 送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因  
リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及ボサス

第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟済ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟

費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ  
因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ  
亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手数料及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得(以下  
略ス)

第三章 訴訟ノ手續

第一節 送達

第一百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所  
ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達  
吏ト爲ス

第三百二十七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス

原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル

第三百二十八條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第三百四十四條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限り效力ヲ有ス

第三百三十八條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルトキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限り效力ヲ有ス

第三百四十五條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ

成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十六條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ事務所ニ於テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十七條 第三百二十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十八條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ第三百四十五條第二項ニ準シ送達ヲ爲スコシ但住居ニ於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルコト明白ナルトキニ限ル

前項ノ場合ニ於テハ送達告知等ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ爲ス

第三百四十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第三百五十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲ス可キ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルトキニ限り之ヲ施行スルコトヲ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲ス可キ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ許可ノ命令ハ認證シタル曆本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限り效力ヲ有ス

第五百十一條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及ヒ受取人ノ受取證並ニ執達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作クルコトヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスコトヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサル旨ヲ述フルトキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ

第四百十三條第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル(以下略ス)

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第六節 人證

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言スル義務アリ

第二百九十條 官吏公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルトキニ限り證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大

臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス 此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限り之ヲ拒ムコトヲ得

右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可シ

第二百九十一條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 證人及ヒ當事者ノ表示

第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表示

第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時

第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨

第五 裁判所ノ名稱

第二百九十四條 合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ貳拾圓以下ノ罰金ヲ言

渡ス可シ 證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十五條 證人其出頭セザリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辯解スルトキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

證人ノ不參屆及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十七條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者

第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ任フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ム權利アル旨ヲ告ク可シ

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者カ其職務上黙秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リテ知りタル事實ニシテ黙秘ス可キモノニ關スルトキ

第三 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ招ク恐アルトキ

第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財產權上ノ損害ヲ生セシム可キトキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯スルコト能ハサルトキ

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百九十八條第四號ノ場合ニ於テハ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第一 家族ノ出產、婚姻又ハ死亡

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財產事件ニ關スル事實

第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行為ノ成立及ヒ旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行為

前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其黙秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シ

期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作りタルトキハ之ヲ當事者ニ

通知ス可シ

第三百一條 拒絶ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタル拒絶ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第三百二條 原因ヲ開示セシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立ヲ要セシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絶ニ因リテ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス

證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百二條乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問スルコトヲ得

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサル者

第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺クル者

第二 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者

第四 第三百九十七條及ヒ第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ規定ニ依リ證言ヲ拒絶スル權利アリテ之ヲ行使セサル者但第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ場合ニ於テ

ハ拒絶ノ權利ニ關スル事實ニ付キ證言ヲ爲スコトヲ申立テラレタルトキニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第六編 強制執行

第一章 總則

第五百二十六條 執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナル場合ニ於テハ債務者ノ住居、倉庫及ヒ筐匣ヲ搜索シ又ハ閉鎖シタル戸扉及ヒ筐匣ヲ開カシムル權利ヲ有ス

抵抗ヲ受タル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用キ且警察上ノ援助ヲ求ムルコトヲ得若シ兵力ヲ要スルトキハ之ヲ執行裁判所ニ申立ツ可シ

第五百二十七條 執達吏ハ執行行為ヲ爲スニ際シ抵抗ヲ受タルトキ又ハ債務者ノ住居ニ於テ執行行為ヲ爲スニ際シ債務者又ハ成長シタル其家族若クハ雇人ニ出會ハサルトキハ成丁者二人又ハ市町村若クハ警察ノ吏員一人ヲ證人トシテ立會ハシム可シ

第五百二十八條 強制執行ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル各人ニハ其求ニ因リ執達吏ノ記録ノ閱覽ヲ許シ及ヒ記録中ニ存スル書類ノ謄本ヲ付與スルコトヲ要ス

第五百二十九條 夜間及ヒ日照日並ニ一般ノ祝祭日ニハ執行裁判所ノ許可アルトキニ限リ

執行行為ヲ爲スコトヲ得

右許可ノ命令ハ強制執行ノ際之ヲ示スコシ  
第五百四十條 執達吏ハ各執行行為ニ付キ調書ヲ作ル可シ  
此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 調書ヲ作リタル場所、年月日

第二 執行行為ノ目的物及ヒ其重要ナル事情ノ略記

第三 執行ニ與カリタル各人ノ表示

第四 右各人ノ署名捺印

第五 調書ヲ其各人ニ讀聞セ又ハ閱覽セシメ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコトノ開示

第六 執達吏ノ署名捺印

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ具備スルコト能ハサルトキハ其理由ヲ記載スコシ

第二章 金銭ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節 動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第五百六十六條 債務者ノ占有中ニ在ル有體動産ノ差押ハ執達吏其物ヲ占有シテ之ヲ爲スニ其物ハ債權者ノ承諾アルトキ又其運搬ヲ爲スニ付キ重大ナル困難アルトキハ之ヲ債務

者ノ保管ニ任スコシ此場合ニ於テハ封印其他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスルトキニ限リ其効力ヲ生ス

執達吏ハ債務者ニ其差押ヲ爲シタルコトヲ通知スコシ

第五百六十七條 前條ノ規定ハ債權者又ハ物ノ提出ヲ拒マサル第三者ノ占有中ニ在ル物ノ差押ニ付テモ亦之ヲ準用ス

第五百六十八條 果實ハ未タ土地ヨリ離レサル前ト雖モ之ヲ差押フルコトヲ得然レトモ其差押ハ通常ノ成熟時期ノ前一个月内ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

蠶ハ其多分カ繭ヲ成造スル爲メ揚リ蠶ト爲リタル後ニ非サレハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第五百六十九條 差押ノ效力ハ差押物ヨリ生スル天然ノ産出物ニモ當然及フモノトス

第五百七十條 左ニ掲クル物ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第一 衣服、寢具、家具及ヒ廚具但此物カ債務者及ヒ其家族ノ爲メ缺ク可カラサルトキニ限ル

第二 債務者及ヒ其家族ニ必要ナル一个月間ノ食料及ヒ薪炭

第三 技術者、職工、勞役者及ヒ穩婆ニ在テハ其營業上缺ク可カラサル物

第四 農業者ニ在テハ其營業上缺ク可カラサル農具、家畜、肥料及ヒ次ノ收穫マテ農業ヲ續行スル爲メ缺ク可カラサル農産物

第五 文武ノ官吏、神職、僧侶、公立私立ノ教育場教師、辯護士、公證人及ヒ醫師ニ在テ



ハ其職業ヲ執行スル爲メ缺ク可カラサル物並ニ身分相當ノ衣服  
 第六 文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師ニ在テハ第六百十八條ニ規定  
 スル職務上ノ収入又ハ恩給ノ差押ヲ受ケサル金額但差押ヨリ次期ノ俸給又ハ恩給ノ  
 支拂マテノ日數ニ應ジテ之ヲ計算ス  
 第七 藥舖ニ在テハ調藥ヲ爲ス爲メ缺ク可カラサル器具及ヒ藥品  
 第八 勳章及ヒ名譽ノ證標  
 第九 實印其他職業ニ必要ナル印  
 第十 神體、佛像其他禮拜ノ用ニ供スル物  
 第十一 系譜  
 第十二 債務者又ハ其家族ノ未ダ公ニセサル發明ニ關スル物及ヒ債務者又ハ其家族ノ  
 未ダ公ニセサル著述ノ稿本  
 第十三 債務者及ヒ其家族カ學校ニ於テ使用ニ供スル書籍  
 然レトモ債務者ノ承諾アルトキハ第三號乃至第八號ニ掲ケタル物ヲ除ク外之ヲ差押フル  
 コトヲ得(以下略ス)  
 第三款 債權及ヒ他ノ財產權ニ對スル強制執行  
 第六百四條 俸給又ハ此ニ類スル繼續收入ノ債權ノ差押ハ債權額ヲ限トシ差押後ニ收入ス  
 可キ金額ニ及フモノトス

第六百五條 職務上收入ノ差押ハ債務者ノ轉官兼任又ハ増俸ニ因ル收入ニモ亦及フモノト  
 ス

第六百六條 債務者ハ債權ニ關スル所持ノ證書ヲ差押債權者ニ引渡ス義務アリ債權者ハ差  
 押命令ニ基キ強制執行ノ方法ヲ以テ其證書ヲ債務者ヨリ取下ケシムルコトヲ得  
 第六百十八條 左ニ掲ケル債權ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス  
 第一 法律上ノ養料  
 第二 債務者カ義務捐建設所ヨリ又ハ第三者ノ慈善ニ因リ受クル繼續ノ收入但債務者及  
 ヒ其家族ノ生活ノ爲メ必要ナルモノニ限ル  
 第三 下士、兵卒ノ給與並ニ恩給及ヒ其遺族ノ扶助料  
 第四 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乘組員ニ屬スル軍人軍屬ノ職務上ノ收入  
 第五 文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師ノ職務上ノ收入、恩給及ヒ其  
 遺族ノ扶助料  
 第六 職工、勞役者又ハ雇人カ其勞力又ハ役務ノ爲ニ受クル報酬  
 第一號、第五號、第六號ノ場合ニ於テ職務上ノ收入、恩給其他ノ收入カ一个年間ニ三百圓  
 ヲ超過スルトキハ其超過額ノ半額ヲ差押フルコトヲ得  
 第二節 不動産ニ對スル強制執行  
 第二款 強制競賣

第六百四十二條 強制競賣ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 債權者、債務者及ヒ裁判所ノ表示

第二 不動産ノ表示

第三 競賣ノ原因タル一定ノ債權及ヒ其執行シ得ヘキ一定ノ債務名義

第六百四十三條 申立ニハ執行力アル正本ノ外左ノ證書ヲ添付ス可シ

第一 登記簿ニ債務者ノ所有トシテ登記シタル不動産ニ付テハ登記判事ノ認證書

第二 登記簿ニ登記アラサル不動産ニ付テハ債權者ノ所有タルコトヲ證ス可キ證書

第三 地所ニ付テハ國郡市町村、字、番地、地目、反別若クハ坪數、土地臺帳ニ登錄シタル地價及ヒ其地所ニ付キ納ム可キ一年ノ租稅其他ノ公課ヲ證ス可キ證書

第四 建物ニ付テハ國郡市町村、字、番地、構造ノ種類、建坪及ヒ其建物ニ付キ納ム可キ一年ノ公課ヲ證ス可キ證書

第五 地所、建物ニ付キ貸借アル場合ニ於テハ其期限並ニ借賃ヲ證ス可キ證書

第六 第二號、第三號及ヒ第四號ノ要件ニ付テハ債權者公簿ヲ主管スル官廳ニ其證明書ヲ求ムルコトヲ得

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ證明スル能ハサルトキハ債權者ハ競賣申立ノ際其取調ヲ執行裁判所ニ申請スルコトヲ得但此場合ニ於テハ裁判所ハ執達吏ヲシテ其取調ヲ爲サシム可シ

強制管理ノ爲メ既ニ不動産ヲ差押ヘタル場合ニ於テ其執行記録ニ第一號乃至第五號ノ要件ヲ記載シタルモノ有ルトキハ其證書ヲ添付スルコトヲ要セス

第六百四十四條 競賣手續ノ開始決定ニハ同時ニ債權者ノ爲メ不動産ヲ差押フルコトヲ宣言ス可シ

差押ハ債務者カ不動産ノ利用及ヒ管理ヲ爲スコトヲ妨ケス

差押ハ其決定ヲ債務者ニ送達スルニ因リ其效力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第六百五十八條 競賣期日ノ公告ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 不動産ノ表示

第二 租稅其他ノ公課

第三 貸借アル場合ニ於テハ其期限並ニ借賃

第四 強制執行ニ因リ競賣ヲ爲ス旨

第五 競賣期日ノ場所、日時及ヒ競賣ヲ爲ス可キ執達吏ノ氏名並ニ住所

第六 最低競賣價額

第七 競落期日ノ場所及ヒ日時

第八 執行記録ヲ閱覽シ得ヘキ場所

第九 登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産上權利ヲ有スル者其債權ヲ申出ツ可キ旨

第十 利害關係人競賣期日ニ出頭ス可キ旨

第六百五十九條 競賣期日ハ公告ノ日ヨリ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ

此期日ハ裁判所ノ意見ヲ以テ裁判所内又ハ其他ノ場所ニ於テ執達吏ヲシテ之ヲ開カシム

第六百六十條 競落期日ハ競賣期日ヨリ七日ヲ過クルコトヲ得ス

此期日ハ裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第六百六十一條 競賣期日ノ公告ハ左ノ箇所ニ揭示シテ之ヲ爲ス

第一 裁判所ノ揭示板

第二 不動産所在地ノ市町村ノ揭示板

此他公告ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ掲載スルコトヲ得

第三款 強制管理

第七百六條 強制管理ニ付テハ第六百四十二條、第六百四十三條、第六百四十四條第一項第

三項及ヒ第六百五十一條乃至第六百五十四條ノ規定ヲ準用ス

不動産カ債權者ノ債權ニ付キ不動産上ノ義務ヲ負フタル場合ニ於テハ第六百四十三條第

一號第二號ニ依リ提出ス可キ證書ハ不動産ヲ債務者カ占有スルコトヲ疏明スル證書ヲ以

テ足ル

第七百七條 裁判所ハ強制管理開始ノ決定ニ於テ債務者カ管理人ノ事務ニ干涉スルコト及

ヒ不動産ノ收益ニ付キ處分スルコトヲ禁シ又不動産ノ收益ノ給付ヲ爲ス可キ第三者アル

トキハ其第三者ニ其後ノ給付ヲ管理人ニ爲ス可キコトヲ命ス可シ

既ニ收穫シ若クハ收穫ス可ク又ハ期限ノ到來シ若クハ到來ス可キ果實ハ收益ニ屬ス  
開始決定ハ第三者ニ對シテハ之ヲ送達スルニ因リ其效力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲ  
爲ス

第四章 假差押及ヒ假處分

第七百三十七條 假差押ハ金錢ノ債權又ハ金錢ノ債權ニ換フルコトヲ得ヘキ請求ニ付キ動

産又ハ不動産ニ對スル強制執行ヲ保全スル爲メ之ヲ爲スコトヲ得

假差押ハ未タ期限ニ至ラサル請求ニ付テモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第七百四十八條 假差押ノ執行ニ付テハ強制執行ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ

差異ノ生スルトキハ此限ニ在ラス

第七百五十六條 假處分ノ命令其他ノ手續ニ付テハ假差押ノ命令及ヒ手續ニ關スル規定ヲ

準用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルトキハ此限ニ在ラス

第七百五十七條 假處分ノ命令ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス

右裁判ハ急迫ナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

何指令

●民事訴訟法第六百四十三條第三項ニ依リ債權者ヨリ地目地價等ノ證明ヲ出願スルルトキ

取扱方ノ件 明治二十四年一月十二日  
福井縣收稅長閣合

二十三年法律第二十九號民事訴訟法第六百四十三條第三項ニ據リ債權者ヨリ土地ノ地目地

價等證明ヲ出願スルモノアリ右ハ町村役場地ノ土地臺帳ニ據リ市町村長之レニ證明スルモノ歟或ハ直稅分署ニ於テ證明スヘキモノ歟果シテ後段トセハ別段制例モ無之ニ付無手数料ニテ證明シ可然モノトハ相考候得共爲念及御問合候

大藏省主稅局回答 明治二十四年三月十一日

後段御見込ノ通ニテ可然存候

○第六百六 民事訴訟法施行條例明治二十三年七月十六日(七月十七日公布)

朕民事訴訟法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟法施行條例

第一條 民事訴訟法實施前ニ提起シタル訴訟ニ付テノ爾後ノ訴訟手續ハ民事訴訟法ニ依リテ之ヲ完結ス

第二條 民事訴訟法實施前ニ闕席ノ儘言渡シタル裁判ニ對シテハ民事訴訟法ニ依リ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障ノ期限ハ新法ニ依リ其實施ノ日ヨリ起算ス但其期間カ舊法ノ控訴上告期限ヲ超過スルトキハ此期限ニ從フ

第三條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ニ對スル控訴上告期限ハ新法ノ控訴上告期間ニ依リ其實施ノ日ヨリ起算ス但其期間カ舊法ノ控訴上告期限ヲ超過スルトキハ其期限ニ

從フ

第四條 民事訴訟法實施前ニ確定シタル裁判ニ對シテハ民事訴訟法ニ依リ再審ヲ求ムル訴ヲ爲スコトヲ得但民事訴訟法實施前ニ再審ノ條件生シタルトキハ其條件ノ生シタル日ヨリ再審ノ期間ヲ起算ス

第五條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ノ強制執行ハ民事訴訟法ニ依リテ之ヲ完結ス但シ既ニ身代限ノ揭示ヲ爲シ又ハ公賣ニ著手シタル事件ハ其手續ノ終了マテハ舊法ニ從フ

第六條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ノ執行命令ヲ得サル場合ニ於テハ民事訴訟法第四百九十九條ノ規定ニ從ヒ證明書ヲ要スル者ハ其訴訟記録ノ存在スル裁判所ニ之ヲ求ムルコトヲ得

第七條 民事訴訟法實施前既ニ勸解ヲ出願シ未ダ完結ニ至ラサル事件ハ民事訴訟法第三百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所繼續シテ之ヲ完結スルコトヲ得

第八條 民事訴訟法ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

第九條 民事訴訟法ニ於テ親族ト稱スル者ハ當分ノ內刑法ノ親族例ニ依ル

第十條 婚姻離婚及養子ノ縁組離縁ニ關スル訴ニ付テハ特別ノ慣例アルモノハ當分ノ內其慣例ニ從フ

第十一條 明治八年第六號布告ハ當分ノ内其效力ヲ有スルモノトス

第十二條 明治十年第十九號布告控訴上告手續第十六條中大審院トアルヲ上告裁判所ト改

メ該條ハ當分ノ内其效力ヲ有スルモノトス

○第六百七 上告手續中豫納金ノ件 明治十年二月十九日

明治八年<sup>五</sup>第九十壹號布告大審院諸裁判所職制章程同年<sup>同</sup>第九拾三號布告控訴上告手續別

冊ノ通り改正候條此旨布告候事 大審院諸裁判所職制章程ハ略之

第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ(大審院)ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサルハ

ハ上告ヲ爲スコト得ス 二十二年七月法律第五十號ヲ以テ(大審院)ヲ(上告裁判所)ト改メ本條ノニ效力ヲ有ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルハ其預リ金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ

預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ對照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム 被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云

第一款 出訴期限及失踪後ノ訴訟處分方ノ件

○第六百八 出訴期限規則 明治六年十一月五日

金毀借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限

ヲ定メ條約ヲ結ヒ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所へ出訴イタシ不苦

候處延期ノ勘辨ヲ加へ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴イタ

シ候トモ又ハ勘辨ヲ加へ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中  
數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方諸人證人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ  
有之專理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定候條  
來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自  
分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡  
スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事

出訴期限規則

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金
- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 職人ノ手間代金
- 一 日雇人ノ給料
- 一 請負金

一芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等  
一男女藝者ノ揚代金  
右ハ六ヶ月限

第二條

一醫師ノ診診及ヒ藥料  
一授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料  
一商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金  
一一年期マテノ奉公人給料  
右ハ一年限

第三條

一期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息  
一期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息  
一家屋及ヒ土地ノ借賃  
一小作米金  
一證據金  
一敷金  
一物品ノ借賃又ハ損料

一養育料

一七ヶ年期マテノ奉公人給料

一期限ナキ年金及ヒ生涯ノ年金

右ハ五ヶ年限

第四條

一條約證書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時出訴致シ候テモ苦シカラサル事

第五條

一從前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做スヘシ又從前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一條第二條第三條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事

但明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリトス

第六百九

布告第十號

無期限貸金穀返濟方及ヒ土地家屋ノ貸賃出訴期限ニ關セサル件明治六年一月十三日

金穀貸附證文ノ内返濟期限無之歟又ハ出來次第返却可致等ノ證書取置後日訴出ツルニ於テハ裁判申渡ヨリ十二ヶ月ノ内濟方可申付事

但從前今後共無年期貸附中内證展返濟ヲ促スト雖モ滿五年ニ至ル迄一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候尤土地家屋等ノ貸賃ハ不動産ニ屬スル儀ニ付滿五年ヲ過ルト雖モ可及裁判事

○第六百十 負債主失踪後ノ訴訟處分方明治八年一月二十日 布告第六號

民事裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ探上ケサル成例ニ有之候處本年二月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨布告候事

第一條 債主定期期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定期滿期ニ至リ直ニ裁判所へ訴出ツ可キ事

第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定期滿期又ハ出訴期限將ニ盡ントスルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右與書訴狀ヲ再呈シ其旨届ケ出ツ可キ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀探上ケ直ニ失踪者所管ノ戸長へ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル證書ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラサルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書證書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主於テ前條ノ裏書證書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月第三百六拾貳號布告出訴期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

第二款 家資分散法

○第六百十一 家資分散法明治二十三年八月二十日(八月二十一日公布) 法律第六十九號

朕家資分散法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

家資分散法

第一條 民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟スル資力ナキ債務者ニ對シテハ管轄裁判所ハ職權ニ因リ又ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ家資分散者タルノ宣告ヲ爲ス可シ右ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得

此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三條 第一條ノ宣告ハ裁判所及市町村ノ揭示場ニ揭示シテ之ヲ公告ス可シ

第四條 家資分散者ハ其宣告ヲ受ケタル日ヨリ選舉權及被選舉權ヲ失フ

第五條 民法及本法施行以後ニ於テ從前ノ法律中身代限處分ヲ受ケタル者ニ對シ公權ノ喪失ヲ定メタル條項ハ破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタル者ニ對シ效力ヲ有ス

第六百十一 民事訴訟費用法明治二十三年八月十五日(八月十六日公布) 法律第四十六號

ヘキコトヲ命ス

民事訴訟費用法

第一條 民事訴訟法ノ規定ニ於ケル訴訟費用ハ以下數條ノ規定ニ從ヒ之ヲ算定ス

第二條 訴狀其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金二錢五厘トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

圖面ハ一葉ニ付金十錢トス但別ニ測量ヲ要シタルトキハ其測量費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金五十錢トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

第四條 民事訴訟用印紙法ニ從ヒ貼用シタル印紙ノ費額ハ其代價ニ依ル

第五條 執達吏ノ手数料及ヒ立替金ハ執達吏手数料規則ノ規定ニ從フ

第六條 郵便料、電信料及ヒ運送料ハ其實費ニ依ル

第七條 官報、公報及ヒ新聞紙ヲ以テ公告シタル公告料ハ各其定價ニ依ル

第八條 民事訴訟法第二百二十七條ノ規定ニ從ヒ辯護士ノ附添ヲ命シタルトキハ其報酬ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第九條 當事者ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テ此日當ヲ二十五錢トス

第十條 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當

ヲ給セス

第十一條 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢乃至五圓ノ範圍内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

鑑定ヲ爲スニ付キ別ニ支出シタル費用ハ其實費ニ依ル

第十二條 當事者ノ滞在費ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ一日金二十五錢トシ證人、鑑定人及ヒ通事ノ滞在費ハ一日金五十錢トス

第十三條 當事者、證人、鑑定人及ヒ通事ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ付キ金十錢トス

通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十四條 判事及ヒ裁判所書記檢證ノ爲メ實地臨檢ヲ爲スニ付テノ旅費及ヒ滞在費ハ證人ニ準ス

第十五條 本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ル

第十六條 強制執行及ヒ非訟事件ニ關ル費用ハ執達吏手数料規則ニ定メタルモノヲ除ク外前數條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ算定ス

強制執行又ハ非訟事件ニ關シテ保管人若クハ管理人ヲ任命シタルトキハ其費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

○第六百十二 民事訴訟用印紙法

明治二十三年八月十五日(八月十六日公布)  
法律第六十五號



朕民事訴訟用印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スルコトヲ命ス

民事訴訟用印紙法

第一條 民事訴訟ノ書類ニハ以下數條ノ規定ニ從ヒ其正本ニ印紙ヲ貼用ス可シ但裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 財産權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

- 訴訟物ノ價額金五圓マテ 二十錢
- 同 十圓マテ 三十錢
- 同 二十圓マテ 六十錢
- 同 五十圓マテ 一圓五十錢
- 同 七十五圓マテ 二圓二十錢
- 同 百圓マテ 三圓
- 同 二百五十圓マテ 六圓五十錢
- 同 五百圓マテ 十圓
- 同 七百五十圓マテ 十三圓
- 同 千圓マテ 十五圓

同 二千五百圓マテ 二十圓

同 五千圓マテ 二十五圓

同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ二圓ヲ加フ

訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從フ

第三條 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ

財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ト其訴訟ニ由テ生スル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ

第四條 本訴ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第五條 控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第六條 左ニ掲クル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第一 抗告

第二 故障

第三 證據調ノ申立

第四 假差押及ヒ假處分ノ申請

第五 判決ノ送達アラシムコトヲ求ムル申立

第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五十錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十一條第三項及ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第九條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十條 答辯其他前數條ニ掲ケサル申立及ヒ申請ニハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十一條 民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙ヲ貼用セサル民事訴訟ノ書類ハ其效ナキモノトス但印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有效ナラシムルヲ得

第十二條 印紙ノ種類及ヒ貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル

第十三條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ許サス

第十四條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ

仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十五條 前條ノ規定ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用キス

第十六條 第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訟事件ニ之ヲ準用ス

第二章 刑事訴訟ニ付郡吏及市町村吏員關涉等ノ件  
○第六百十四 刑事訴訟法中郡吏及公吏ニ關スル要項明治二十三年十月六日(十月七日公布)法律第九十六號

刑事訴訟法

第一編 總則  
第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルモノニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償、贓物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニ非ス又告訴私訴ノ拋棄ニ因テ消滅スルモノニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ付キ第二審ノ判決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三者ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ公訴附帶ノ私訴ニ參加スルコトヲ得

第五條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償、返還ヲ要ムル妨害ト爲ルコトナカル可シ

第六條 公訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 被告人ノ死去

第二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄

第三 確定判決

第四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

第五 大赦

第六 時效

第七條 私訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 拋棄又ハ和解

第二 確定判決

第三 時效

第八條 公訴ノ時效ハ左ノ期限ヲ經過スルニ因テ成就ス

第一 違警罪ハ六月

第二 輕罪ハ三年

第三 重罪ハ十年

第九條 私訴ノ時效ハ被害者無能力ナルトキ又ハ公訴ニ附帶セスシテ其訴ヲ爲シタルトキト雖モ公訴ノ時效ト其期間ヲ同クス  
公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタルトキハ民法ニ定メタル時效ノ例ニ從フ

第十條 公訴、私訴ノ時效ハ犯罪ノ日ヨリ其期間ヲ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十一條 時效ハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期間ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯、從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ  
時效ノ經過ヲ中斷シタルトキハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期間ヲ起算ス

第十二條 起訴、豫審又ハ公判ノ手續其規定ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スルトキハ時效ノ經過ヲ中斷スル效ナカル可シ但裁判所ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スルトキハ此限ニ在ラス

第十三條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人、告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過失ノ申立ヲ爲シタルトキ亦同シ

民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十四條 被告人無罪ノ普渡ヲ受ケタリト雖モ判事、檢事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡查、憲兵卒ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十五條 此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シロヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可カラズ但時効ノ期間ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十六條 此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サルモノト雖モ三里以上ナルトキ亦同シ

島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

第十七條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期間ヲ經過シタルトキハ特別ノ場合ヲ除ク外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ

第十八條 訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其地ニ假住所ヲ定メ裁判所ニ届

出ツ可シ否ラサルトキハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第十九條 書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定アラサルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第二十條 官吏、公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署、公署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署、公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其書類ノ効ナカル可シ

官吏、公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ官吏、公吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十一條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ原本、正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入、削除及ヒ欄外ノ記入アルトキハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其變更増減ノ効ナカル可シ

第二十二條 此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルトキハ其數アリトス

第二十三條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第二十四條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ規定ニ從フ

第二編 裁判所

第一章 裁判所ノ管轄

第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第四十六條 検事ハ後ニ記載シタル告訴、告發、現行犯其他ノ原因ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査ス可シ

第四十七條 警視總監及ヒ地方長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ地方裁判所検事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府知事ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏、公吏ハ検事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

第一 警視、警部長、警部、警部補

第二 憲兵將校、下士

第三 島司

第四 郡長

第五 林務官

第六 市町村長

第四十八條 海船内ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第四十九條 何人ニ限ラス犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ検事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速ニ其書類ヲ管轄裁判所ノ検事ニ送致ス可シ

第五十條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ其事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ

第五十一條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第五十二條 官吏、公吏、其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ検事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏、公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

第五十三條 何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ検事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケクル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第五十四條 告訴、告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第五十二條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律上代理人之ヲ爲スモ其效アリトス

第五十五條 告訴、告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十條ノ規定ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第五十六條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第五十七條 重罪、輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

第一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラルトキ

第二 兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身體、被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ

第三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戶主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

第五十八條 司法警察官及ヒ巡查、憲兵卒其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ合狀ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名、住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事、違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シ其氏名、

住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得

第五十九條 巡查、憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第六十條 何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第六十一條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サルトキハ自己ノ氏名、職業、住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查、憲兵卒ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡查、憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡查憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第三章 豫審

第一節 合狀

第七十六條 總テ合狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名、職業、住居ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌體格等ヲ明示ス可シ  
又合狀ニハ之ヲ發スル年月日時ヲ記載シ判事及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ勾引狀、勾留狀ハ巡查、憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシム

第七十七條 勾引狀、勾留狀ハ時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查、憲兵卒數人ニ分付スルコトアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ其正本、謄本ニ執行ノ場所、日時ヲ記載シ被告人ヲシテ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第七十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲兵卒ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潜匿シタリト思料シタルトキハ其地ノ市町村長又其差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラヌ搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印スヘシ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス但旅店、割烹店其他夜間ト雖モ衆人ノ出入スル場所ニ付テハ其公開時間店內ニ限リ搜索ヲ爲スコトヲ得

第七十九條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潜匿シタルコトヲ知リ又ハ潜匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルトキハ巡查、憲兵卒ニ令狀ヲ帶行セシムルコトヲ得

巡查、憲兵卒ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事、檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

第二節 密室監禁

第三節 證據

第九十條 被告人ノ自白、官吏ノ檢證調書、證據物件、證人及ヒ鑑定人ノ供述其他諸般ノ微憑ハ判事ノ判斷ニ任ス

第九十一條 豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據微憑ヲ集取ス可シ

第九十二條 豫審判事臨檢、搜索、物件差押又ハ被告人、證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁判書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急速ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ立會人二名アルヲ要ス但監獄署ニ於テ被告人ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第九十三條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第九十四條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用ユ可カラ  
ス

第九十五條 裁判所書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ  
豫審判事ハ被告人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印ス  
ルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第九十六條 被告人其供述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立タルトキハ更ニ訊問ヲ爲シ其  
訊問及ヒ供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第九十七條 被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコト得

第九十八條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト、人違ナキコト其他事實ヲ發見ス可キ一切  
ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスルトキハ被告人ト他ノ被告人、證人又ハ其他ノ者ト對  
質セシムルコトヲ得

第九十九條 書記ハ對質人ノ供述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對  
質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第九十五條第九十六條ノ規定ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

其百條 被告人又ハ對質人對ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ應ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシム  
若シ雙者、啞者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ  
被告人又ハ對質人國語ニ通セサルトキ亦同シ

第百一條 通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ  
書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百二十六條第百三十七條第百四十一條ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押

第百二條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場合ニ臨ミ檢  
證ヲ爲ス可シ

第百三條 豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法、日時、場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可  
キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ  
又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

第百四條 豫審判事ハ被告人ノ住居又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住居  
ニ臨檢シ搜索ヲ爲スコトヲ得  
被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住居ニ在ラサルトキハ同居ノ親屬若シ其在ラサルトキハ  
市町村長ノ立會アルヲ要ス

第七十八條第三項ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百五條 豫審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ身體及ヒ之  
ニ屬スル物件ニ就キ搜索ヲ爲スコトヲ得

第百六條 豫審判事ハ臨檢、搜索ニ因リ發見シタル物件其事實ヲ證明スルニ足ル可シト思



料シタルトキハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ裁判所書記之ヲ擔任ス可シ

第一百七條 豫審判事ハ臨檢、搜索、物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサルトキハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコト得

第一百八條 被告人ハ臨檢、搜索、物件差押ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ自ラ立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラス

第一百九條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第一百十條 豫審判事ハ臨檢、搜索ノ場所ニ於テ證人ノ供述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスルトキハ第一百十五條以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ

第一百十一條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得シテ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アルトキハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得

第一百十二條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢、搜索、物件差押ノ事ヲ區裁判所

判事ニ囑託スルコトヲ得

第一百三條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シテ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

第一百十四條 證言ヲ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サレハ之ヲ差押ヘ及ヒ開披スルコトヲ得ス

第六節 證人訊問

第一百五條 證人ノ呼出狀ニハ其氏名、住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時、場所及ヒ呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第一百十六條 證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第一百十七條 證人ト爲ル可キ者豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ナルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官又ハ隊長ハ即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アルトキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第一百八條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應セサルトキハ  
檢事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言  
渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス  
豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ  
發スルコトヲ得

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサルトキハ費用賠償ノ外二倍ノ罰金ヲ言渡ス可シ又勾引狀ヲ  
發スルコトヲ得

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所  
屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲スコシ其勾引ニ付テモ亦同シ

第一百九條 豫審判事ハ證人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其出頭セサリシコト  
ヲ正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス  
可シ

第二十條 證人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出スコシ若シ之ヲ遺失シタ  
ルトキハ其人違ナキコトヲ説明スコシ

第二十一條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齢、職業、住所及ヒ第  
百二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フ可シ

第二十二條 豫審判事ハ證人ヲシテ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ

附加セサル旨ヲ宣誓セシム可シ

裁判所書記ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサ  
ルトキハ其旨ヲ附記スコシ

第二十三條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實  
參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得

第一 民事原告人

第二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但婚族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同  
シ

第三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者

第四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人又ハ同居人

第二十四條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

第一 十六歳未満ノ幼者

第二 知覺精神ノ不十分ナル者

第三 癡癡者

第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

第六 現ニ供述ヲ爲スコキ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ

言渡ヲ受ケタル

第二百二十五條 左ニ記載シタル場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルト

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、辯護人、公證人、神職、僧侶其身分、職業ノ爲メ委託ヲ受

ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シ

第二百二十六條 證人宣誓ヲ肯セズ又ハ宣誓シテ供述ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ヌ可シ

第二百二十七條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第二百二十八條 豫審判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又

ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコトヲ肯セサルトキハ第百十八條ノ規定ニ從フ

第二百二十九條 第百條第百一條ノ規定ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百三十條 皇族證人ナルトキハ豫審判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ヌ可シ

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

第二百三十一條 豫審判事ハ證人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ裁判所書記ヲ

シテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其供述ヲ變更増減センコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニハ豫審判事、書記及ヒ證人共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第二百三十二條 豫審判事ハ證人裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

第二百三十三條 第百十八條第百十九條及ヒ第百二十六條ニ掲ケタル證人ニ對スル豫審判事

ノ權ハ受託判事ニモ屬ス

第三百二十四條 證人ハ出頭ニ付テノ旅費、日當ヲ要ムコトヲ得

第七節 鑑定

第八節 現行犯ノ豫審

第四百十二條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯

アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ合狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第四百十三條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作クルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ハ其豫審手續ヲ繼續ス可キモノニ非サル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第四百十四條 地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス  
證人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽ク可シ

第四百十五條 前條ノ場合ニ於テ地方裁判所檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致シ區裁判所檢事ハ之ヲ地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

第四百十六條 區裁判所檢事其裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ第四百十四條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三日内ニ起訴ノ手續ヲ爲スコトヲ得

第四百十七條 第四百十四條第四百十六條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但勾留狀ヲ發スルコトヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致シ且被告人ヲ逮捕シタルトキハ共ニ之ヲ送致ス可シ

第四百十八條 地方裁判所檢事ハ區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルトキハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時内ニ之ヲ審問シ勾留狀ヲ發シ又ハ發セスシテ前項ノ手續ヲ爲スコトヲ得

第四百十九條 地方裁判所檢事ハ何レノ場合ニ於テモ輕罪ノ現行犯ニ係リ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲スコトヲ得

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲

ス可カラス

第九節 保釋保釋

第十節 豫審終結豫審終結

第四編 公判

第一章 通則通則

第二章 區裁判所公判

第二百二十六條 呼出ヲ受ケタル被告人又ハ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ其代人公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ檢事ノ請求スル所ヲ聽キ區裁判決ヲ爲ス可シ  
私訴關係人出頭セサルトキハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ區裁判決ヲ爲ス可シ

第二百二十七條 禁錮ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人出頭セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルニ非サレハ區裁判決ヲ爲ス可カラス  
豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期間ヲ定メ其期間ニ被告人出頭セサルトキハ區裁判決ヲ爲ス可キ告知書ヲ其親屬又ハ其本籍若クハ最後ノ住所ノ市町村長ニ送達ス可シ若シ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地分明ナラサルトキハ同上ノ告知書ヲ少クトモ一月間裁判所ノ揭示板ニ貼付シテ公示ス可シ

第二百二十八條 區裁判決ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ區席者ニ送達ス可シ

區席判決ヲ受ケタル者ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ルコトヲ得

第二百二十九條 故障申立ノ期間ハ三日トス此期間ハ罰金以下ノ刑ヲ言渡シタル判決及ヒ私訴ノ判決ニ付テハ區席判決ノ送達ヲ以テ始マリ禁錮ノ刑ヲ言渡シタル判決ニ付テハ被告人自ラ其送達ヲ受ケ又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル(以下略ス)

附則

第四條 此法律ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

第五條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行シ其日ヨリ治罪法ヲ廢ス

○第六百十五 犯罪證據物トシテ公署ノ書類差押方ノ件明治十七年五月三十日 司法省達丙第一號 大審院裁判所野視廳府廳

犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ書類ヲ差押フル儀ニ付甲號福井縣上申ニ對シ乙號ノ通及指令候條爾後戸籍帳等ノ差押ニ付テハ右ノ手續ニ依リ取扱フ可キ儀ト心得可シ此旨相達候事

甲號

裁判所ニ於テ犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ要書差押ヘタル節還附方ノ儀ニ付上申犯罪證據物トシテ裁判所ニ於テ戸長役場備置ノ戸籍帳又ハ土地建物船舶賣讓渡質入書入

奥書副印等ヲ差押へ數十日間還附セサルコトアリ然ルニ戶長役場ニ於テハ部下ノ人民生死送人籍其他ノ異動加除ヲ要シ又ハ陸續公證ヲ請ヒ就中質入書入契約ノ如キ義務消盡ニ據リ公證取消ノ儀申出ル者アルモ本簿へ照較消印スル能ハサルヲ以テ其旨ヲ具へ簿冊下戻方裁判所へ照會スルモ某事件ニ付差押ヘタル證據物ナル故一件落著迄還付シ難キ旨回答有之取扱上頗ル差支候趣ヲ以テ伺出候向アリ右ハ犯罪證據物トシテ差押ヲ要スルハ其一部分ニ止ルヘクシテ而シテ該簿冊ニ登載セル其他ノ事件全体ニ關シ行政上取扱ニ支障ヲ來シ不都合不尠就テハ斯場合ニ於テハ其必要ノ廉ハ裁判所ニ於テ謄寫シ本書加除スルヲ得サル様掛紙契印等ヲ爲シ而シテ簿冊ハ直ニ還付スヘク様致度御詮議ノ上何分ノ御指揮相成度此段上申候也

明治十七年一月二十九日

内務卿山縣有朋殿  
司法卿山田顯義殿

福井縣令 石黒 務

乙號

書面上申之趣聞届候尤裁判所ニ於テ謄寫セシ該書へハ戶長之レニ調印スヘシ若シ其謄寫ニ拘ハル内ニ加除等ヲ要スル時ハ其都度裁判所ノ許否ヲ得ヘキ儀ト可心得事

明治十七年五月二十八日

伺指令

●郡吏員戶長等職務上刑事裁判所へ證人トシテ出頭旅費日當請求方ノ件明治十八年九月四日 千葉縣伺

一郡吏員戶長等職務上ニ係リ刑事裁判所證人トシテ裁判所ニ出頭スルトキハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルヲ得ルハ勿論ノ儀ト存候得共被告事件ノ無罪又ハ免訴トナリタルト

キハ明治十七年太政官第五十七號公達ニ準シ請求セサル儀ト心得可然哉又ハ右ノ場合ト雖モ郡吏員戶長等ニ在テハ請求スルヲ得ヘキ儀ニ候哉

一前顯太政官第五十七號公達ニハ被告事件無罪又ハ免訴トナリタルトキハ請求セサル儀ト有之候得共治罪法第九十條(刑事訴訟法第三百二十四條)ニハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルコトヲ得下有之然レハ被告事件未タ判決ヲ經サル以前ニ在テ之レヲ請求シ置キ

無罪又ハ免訴トナリタルトキハ之ヲ受取ラサル儀ト心得可然哉  
司法省指令 明治十八年十二月二日

伺之趣第一項前段伺之通第二項伺之通

第三章 行政訴訟及訴願ニ關スル件

第一款 行政裁判法及行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件

○第六百十六 行政裁判法明治二十三年六月二十八日(六月三十日)公布

行政裁判法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

行政裁判法

第一章 行政裁判所組織

第一條 行政裁判所ハ之ヲ東京ニ置ク

第二條 行政裁判所ニ長官一人及評定官ヲ置ク評定官ノ員數ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
行政裁判所ニ書記ヲ置ク其員數及職務ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 長官ハ勅任トス評定官ハ勅任又ハ奏任トス

長官及評定官ハ三十歳以上ニシテ五年以上高等行政官ノ職ヲ奉シタル者若クハ裁判官ノ職ヲ奉シタル者ヨリ内閣總理大臣ノ上奏ニ依リ任命セラル、モノトス  
書記ハ長官之ヲ判任ス

第四條 長官及評定官ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

一 公然政事ニ關係スルコト  
二 政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ衆議院議員府縣郡市町村會ノ議員若クハ參事會員タルコト

三 兼官ノ場合ヲ除ク外俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就クコト  
四 商業ヲ營ミ其他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ムコト

第五條 第六條ノ場合ヲ除ク外長官及評定官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非ザルハ其意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラル、コトナシ  
行政裁判ノ長官又ハ評定官ヲ兼任スル者ハ其本官在職中前項ヲ適用ス

第六條 長官及評定官身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルトキハ内閣總理大臣ハ行政裁判所ノ總會ノ決議ニ依リ其退職ヲ上奏スルコトヲ得

第七條 長官ハ行政裁判所ノ事務ヲ總理ス  
長官故障アルトキハ評定官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其先ナル者之ヲ代理ス

第八條 長官ハ自ら裁判長トナリ若クハ評定官ニ裁判長ヲ命スルコトヲ得  
部ヲ分ツノ必要アルトキハ其組織及事務分配ハ勅令ノ定ムル處ニ依ル

第九條 行政裁判所ノ裁判ハ裁判長及評定官ヲ併セ五人以上ノ列席合議ヲ要ス但列席ノ人員ハ奇數ニ限ル若シ缺席ノ爲メ偶數トナリタルトキハ官等最モ低キ評定官ヲ議決ヨリ除ク官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其後ナル者ヲ除ク  
議決ハ過半數ニ依ル

第十條 長官又ハ評定官ハ左ノ場合ニ於テ評議及議決ニ加ハルコトヲ得ス

一 裁判スヘキ事件自己又ハ父母兄弟姉妹若クハ妻子ノ身上ニ關スルトキ  
二 裁判スヘキ事件一人ノ資格ヲ以テ意見ヲ述ヘタルモノ又ハ理事者代理者若クハ職務外ノ地位ニ於テ取扱ヒタルモノニ關スルトキ  
三 裁判スヘキ事件行政官タルノ資格ヲ以テ其事件ノ處分又ハ裁決ニ參與シタルモノニ關スルトキ

第十一條 前條ノ場合ニ於テ原告又ハ被告ハ原因ヲ説明シテ文書又ハ口頭ヲ以テ長官又ハ

評定官ヲ忌避スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ行政裁判所ハ本人ヲ回避セシメ之ヲ議決ス

第十二條 忌避若クハ除外ノ原因タル事情ニ付キ長官又ハ評定官ヨリ申出アルトキハ又ハ他ノ事由ヨリシテ長官又ハ評定官カ法律ニ依リ評議及決議ニ加ハルヲ得サルノ疑アルトキハ行政裁判所ハ本人ヲ回避セシメ之ヲ議決ス

第十三條 行政裁判所ノ處務規程ハ勅令以テ之ヲ定ム

第十四條 行政訴訟ノ辯護人タルコトヲ得ルハ行政裁判所ノ認許シタル護辯士ニ限ル

第二章 行政裁判所ノ權限

第十五條 行政裁判所ハ法律勅令ニ依リ行政裁判所ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審判ス

第十六條 行政裁判所ハ損害賠償ノ訴訟ヲ受理セス

第十七條 行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外地方上級行政廳ニ訴願シ其裁決ヲ經タル後ニ非サレハ之ヲ提起スルコトヲ得ス

各省大臣ノ處分又ハ内閣直轄官廳又ハ地方上級行政廳ノ處分ニ對シテハ直ニ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

各省又ハ内閣ニ訴願ヲ爲シタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス

第十八條 行政裁判所ノ裁判ハ其事件ニ關係ノ行政廳ヲ羈束ス

第十九條 行政裁判所ノ裁判ニ對シテハ再審ヲ求ムルコトヲ得ス

第二十條 行政裁判所ハ其權限ニ關シテハ自ラ之ヲ決定ス

行政裁判所ト通常裁判所又ハ特別裁判所トノ間ニ起ル權限ノ爭議ハ權限裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第二十一條 行政裁判所ノ判決ノ執行ハ通常裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第三章 行政訴訟手續

第二十二條 行政訴訟ハ行政廳ニ於テ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ告知シタル日ヨリ六十日以内ニ提起スヘシ六十日ヲ經過シタルトキハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得ス但法律勅令ニ特別ノ規程アルモノハ此限ニ在ラス

訴訟提起ノ日限其他此法律ニ依リ行政裁判所ノ指定スル日限ノ計算並ニ災害事變ノ爲メ遷延シタル期限ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス

第二十三條 行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外行政廳ノ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止セス但行政廳及行政裁判所ハ其職權ニ依リ又ハ原告ノ願ニ依リ必要ト認ムルトキハ其處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

第二十四條 行政訴訟ハ文書ヲ以テ行政裁判所ニ提起スヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十五條 訴訟ハ左ノ事項ヲ記載シ原告署名捺印スヘシ

一 原告ノ身分、職業、住所、年齢



二 被告ノ行政廳又ハ其他ノ被告  
 三 要求ノ事件及其理由  
 四 立證  
 五 年月日

訴狀ニハ原告ノ經歷シタル訴願書裁決書並ニ證據書類ヲ添フヘシ  
 第二十六條 訴狀ニハ被告ニ送付スル爲メニ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ  
 第二十七條 行政裁判所ハ原告ノ訴狀ニ就テ審査シ若シ法律勅令ニ依リ行政訴訟ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ其理由ヲ付シタル裁決書ヲ以テ之ヲ却下スヘシ  
 其訴狀ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ之ヲ改正セシムル爲メ期限ヲ指定シテ之ヲ還付スヘシ  
 第二十八條 行政裁判所ニ於テ訴狀ヲ受理シタルトキハ其副本ヲ被告ニ送付シ相當ノ期限ヲ指定シテ答辯書ヲ差出サシムヘシ  
 答辯書ニハ原告ニ送付スル爲メ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ  
 第二十九條 行政裁判所ハ必要ナリト認ムルトキハ其期限ヲ指定シテ原告被告交互ニ辯駁書及再度ハ答辯書ヲ差出サシムヘシ  
 第二十條 行政裁判所ハ訴狀及答辯書ノ附屬文書ノ副本ヲ原告被告交互ニ送付スル代リニ所内ニ於テ之ヲ閱覽セシムルコトヲ得

第三十一條 行政裁判所ハ訴訟審問中其事件ノ利害ニ關係アル第三者ヲ訴訟ニ加ハラシム又ハ第三者ノ願ニ依リ訴訟ニ加ハルコトヲ許可スルヲ得  
 前項ノ場合ニ於テハ行政裁判所ノ判決ハ第三者ニ對シテモ亦其效力ヲ有ス  
 第三十二條 行政官廳ハ其官吏又ハ其申立ニ依リ主務大臣ヨリ命シタル委員ヲシテ訴訟代理ヲ爲サシムルコトヲ得  
 代理者ハ委任狀ヲ以テ代人タルコトヲ證明スヘシ  
 第三十三條 行政裁判所ハ豫メ指定シタル期日ニ於テ原告被告及第三者ヲ召喚シテ審廷ヲ開キ口頭審問ヲ爲スヘシ  
 原告被告及第三者ニ於テ口頭審問ヲ爲スコトヲ望マサル旨ヲ申立タル場合ニ於テハ行政裁判所ハ文書ニ就キ直ニ判決ヲ爲スコトヲ得  
 第三十四條 審廷ニ於テハ原告被告及第三者ノ辯明ヲ聽クヘシ  
 審廷ニ於テハ裁判長ノ許可ヲ得タル者ヨリ順次發言スヘシ  
 原告被告及第三者ハ事實上及法律上ノ點ニ就キ文書ニ盡サ、ル所ヲ補足シ又ハ誤謬ヲ更正シ若クハ新ニ證據ヲ提出シ及證書ヲ提示スルコトヲ得  
 第三十五條 主務大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ公益ヲ辯護スル爲メ委員ヲ命シ審廷ニ差出スコトヲ得  
 行政裁判所ハ判決ヲ爲ス前ニ委員ヲシテ意見ヲ陳述セシムヘシ

第三十六條 行政裁判所ノ對審判決ハ之ヲ公開ス

安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アリ又ハ行政廳ノ要求アルトキハ行政裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

第三十七條

公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ公衆ヲ退カシムルノ前之ヲ言渡ス

第三十八條

行政裁判所ハ原告被告及第三者ニ出廷ヲ命シ並ニ必要ト認ムル證憑ヲ徵シ證人又ハ鑑定人ヲ召喚シ審問ニ應シ證明及鑑定ヲ爲サシムルコトヲ得

證人又ハ鑑定人ヲシテ審問ニ應シ證明及鑑定ヲ爲スヘキ義務ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス其義務ヲ盡サ、ル場合ニ於テ處分スヘキ科罰ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス

行政裁判所ハ口頭審問ニ於テ舉證ノ手續ヲ爲シ又ハ評定官ニ委任シ若クハ通常裁判所又ハ行政廳ニ囑託シテ之ヲ調査ヲ爲サシムルコトヲ得

第三十九條

行政裁判所ニ於テ審問中ノ事件ニ關シ民事上ノ訴訟起ルコトアリテ通常裁判所ノ確定ヲ待ツノ必要アリト認ムルトキハ其審判ヲ中止スルコトヲ得

第四十條

審問手續ニ關スル故障ノ申立ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス

第四十一條

召喚ノ期日ニ於テ原告若クハ被告若クハ第三者出廷セサルコトアルモ行政裁判所ハ其裁判ヲ中止セス

原告被告及第三者共ニ出廷セサルトキハ行政裁判所ハ審問ヲ行ハス直ニ判決ヲ爲スコトヲ得

第四十二條

裁判宣告書ハ理由ヲ付シ裁判長評定官及書記之ニ署名捺印シ其謄本ニ行政裁判所ノ印章ヲ捺シ之ヲ原告被告及第三者ニ交付スヘシ

第四十三條

行政訴訟ノ文書ニハ訴訟用印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第四十四條 行政訴訟ニ關スル規程ヲ適用スルコトヲ得

第四章 附則

第四十四條

此法律ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

第四十五條

第二十條第二項ノ權限爭議ハ權限裁判所ヲ設クル迄ノ間樞密院ニ於テ之ヲ裁定ス

裁定ノ手續ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第四十六條

從前ノ法令ニシテ此法律ト牴觸スルモノハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十七條

此法律施行ノ前既ニ行政訴訟トシテ受理シ審理中ニ係ルモノハ仍從前ノ成規ニ依リ處分スヘシ

第六百十七條

行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件明治二十三年十月九日十月十日公布  
法律第六號

朕行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ毀損セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

- 一 海關稅ヲ除ク外租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件
- 二 租稅滯納處分ニ關スル事件
- 三 營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件
- 四 水利及土木ニ關スル事件
- 五 土地ノ官民有區分ノ査定ニ關スル事件

第二款 行政裁判所處務規程及行政訴訟豫納金手續並訴答書式

○第六百十八 行政裁判所處務規程明治二十三年八月二十九日(八月三十日公布)  
勅令第九十二號  
 行政裁判所處務規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 行政裁判所處務規程
- 第一條 行政訴訟各事件ノ掛評定官ハ行政裁判所長官ノ指定ニ依ル
  - 第二條 行政裁判法第八條ニ依リ評定官ヲシテ裁判長タラシムルトキハ同法第七條第二項ノ順序ニ從ヒ之ヲ命スヘキモノトス
  - 第三條 裁判長ハ一事件毎ニ審判準備ノ爲メ掛評定官中ノ一名若クハ二名ニ專理員ヲ任命スルコトヲ得
  - 第四條 裁判長行政裁判法第三十八條第二項ノ場合ニ於テ科罰ヲ言渡シタルトキハ書記ヲシテ訴訟ノ記錄ニ之ヲ記入セシム

- 第五條 毎年七月十一日ヨリ九月十日マテノ間ハ行政裁判所ニ於テ緊急ノ事項ト認ムルモノ、外既ニ著手シタル訴訟ヲ停止シ並ニ新ナル訴訟ニ著手セス
  - 第六條 行政裁判所ノ總會議ハ評定官總員三分ノ二以上列席スルニ非サレハ議決ヲ爲スコトヲ得
  - 第七條 總會議ノ議事ハ長官之ヲ整理ス若シ長官故障アルトキハ評定官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス
  - 第八條 行政裁判所ハ訴訟ノ呼出狀及其他ノ書類ヲ使丁若ハ郵便ヲ以テ送達シ又ハ通常裁判所ニ囑託シテ送達セシムルコトヲ得
  - 第九條 行政裁判所ハ法律命令ノ範圍内ニ於テ其職權ニ屬スル事件ニ付告示ヲ發スルコトヲ得
  - 第十條 行政裁判所長官ハ法律命令ノ範圍内ニ於テ事務取扱ノ順序方法ニ關スル規定ヲ設クルコトヲ得
- 書記ノ職務ニ關スル規程ハ行政裁判所之ヲ定ム
- 第六百十九 行政訴訟豫納金手續明治二十三年十一月十九日  
勅令第九十二號  
 行政訴訟豫納金手續左ノ通相定ム
- 豫納金手續
- 第一條 行政訴訟ヲ爲ス者ハ臨時特別費ヲ除クノ外訴訟提出ノ際ニ於テ書類送達等ノ費用

ニ充ツル爲メ金貳圓ヲ豫納スヘシ  
 第二條 豫納ヲ爲サントスル者ハ當廳ノ保管金送付書ヲ以テ之ニ金員ヲ添ヘ大藏省預金局ニ納付スヘシ  
 第三條 第一條豫納金ニ於テ仍ホ不足ナルトキハ追納セシムルコトアルヘシ  
 追納手續モ亦前條ニ依ルヘシ  
 第四條 豫納金ノ殘額アルトキハ訴訟事件終局ノ後之ヲ還付ス  
 ○第六百二十 行政訴答書式 明治二十四年七月十四日  
 行政訴答書式左ノ通相定ム  
 書式

何々訴狀

住所身分職業若クハ何府何市何町何職  
 原告 氏 名

(住居ノ地行政裁判所ヨリ八里以上ニ在ルトキハ其里程)  
(訴訟代理人アルトキハ此處へ其住所身分職業ヲ附書ニシ氏名ヲ記シ願ニ訴訟代理人ト記スヘシ辯護人アルトキモ亦之ニ準ス)  
 被告 官 氏 名

(被告官廳ニアラサルトキハ何府何市何町何村何職氏名若クハ住所身分職業氏名)

一定ノ申立

何、何、何、何、何、

事實

何、何、何、何、何、

理由

何、何、何、何、何、

立證

何、何、何、何、何、

何、何、何、何、何、

年月日

行政廳ヨリ處分書若クハ裁決書ヲ交付シタル年月日

原告 氏 名 印

(訴訟代理人ナルトキハ代理人署名捺印スヘシ)

行政裁判所長官宛

何々答書

(訴狀ハ正副兩通ヲ出スヘシ若シ被告數名ニシテ其住居各八里以上ヲ離隔スルトキハ其數ニ應ジテ差出スヘシ)

被告 何 官 氏 名

(被告官廳ニアラサルトキハ何府何市何町何村何職氏名若クハ住所身分職業氏名ヲ記シ又ハ訴訟代理人又ハ辯護人アルトキハ訴訟署名ノ例ニ依リ)  
 住所身分職業若クハ何府何市何町何村

原告 氏 名  
(訴訟代理人又は辯護人アルトキハ  
トキハ訴訟署名ノ例ニ依リ)

一定ノ申立  
何、

事實  
何、

理由  
何、

立證  
何、

年月日

被告 氏 名印

(訴訟代理人ナルトキハ  
代理人署名捺印スヘシ)

行政裁判所長官宛

(控訴ハ正副副出スヘシ)

證據物寫

何、  
右相違無之候也

年月日

原告(被告) 氏 名印

(訴訟代理人ナルトキハ  
代理人署名捺印スヘシ)

行政裁判所長官宛

(證據物寫ハ正副兩道ヲ出スヘシ若シ被告數名ニシテ其住  
居各八里以上ヲ離隔スルトキハ其數ニ應ジ差出スヘシ)

第二款 訴願

○第六百二十一 訴願法 明治二十三年十月九日(十月十日公布)  
朕訴願法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

訴願法

第一條 訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付之ヲ提起スル  
コトヲ得

- 一 租税及手数料ノ賦課ニ關スル事件
  - 二 租税滯納處分ニ關スル事件
  - 三 營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件
  - 四 水利及土木ニ關スル事件
  - 五 土地ノ官民有區分ニ關スル事件
  - 六 地方警察ニ關スル事件
- 其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル事件

第二條 訴願セントスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ  
 訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決ヲ爲シタル行政廳ヲ經由スヘシ  
 國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテ訴願セントスル者ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ  
 第三條 各省大臣ノ處分ニ對シ訴願セントスル者ハ其省ニ之ヲ提起スヘシ  
 第四條 裁判所ノ裁判各省ノ裁決及第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其事件ニ付更ニ訴願スルコトヲ得ス  
 第五條 訴願ハ文書ヲ以テ之ヲ提起スヘシ  
 第六條 訴願書ノ侮辱誹毀ニ涉ルモノハ之ヲ受理セス  
 第七條 訴願書ハ證據書類ヲ添ヘ並下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其裁決書ヲ添フヘシ  
 第八條 多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代人ヲ選ヒ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナル

コトヲ證明スヘシ  
 法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得  
 第八條 行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス  
 行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政廳ニ訴願スルコトヲ得ス  
 行政廳ニ於テ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得  
 第九條 法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス  
 其訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ期限ヲ指定シテ還付スヘシ  
 第十條 訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得  
 郵便遞送ノ日數ハ第八條ノ訴願期限内ニ之ヲ算入セス  
 第十一條 第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ十日以内ニ辯明書及必要文書ヲ添ヘ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ  
 第十二條 第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三日以内ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦前二項ノ例ニ依ルヘシ

第十二條 訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行ヲ停止セス但行政廳ハ其職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行ヲ停止スルコトヲ得

第十三條 訴願ハ口頭審問ヲ爲サス其文書ニ就キ之ヲ裁決ス但行政廳ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ口頭審問ヲ爲スコトヲ得

第十四條 訴願ノ裁決ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其理由ヲ付スヘシ訴願ヲ却下スルトキ亦同シ

第十五條 訴願ノ裁決書ハ其處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シテ之ヲ訴願人ニ交付スヘシ訴願書ヲ却下スルトキ亦同シ

第十六條 上級行政廳ニ於テ爲シタル裁決ハ下級行政廳ヲ羈束ス

第十七條 訴願ノ手續ニ關シ他ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノハ各其規程ニ依ル

第十八條 明治十五年十月二十五號請願規則ハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條 此法律施行ノ前請願規則ニ依リ受理シタル請願ハ仍其規則ニ依リ之ヲ處分ス

第二十條 第八條ノ訴願期限ハ此法律施行ノ前行政處分ヲ受ケ又ハ請願規則ニ依リ指令ヲ受ケタル事件ニシテ其處分又ハ指令ヲ受ケタル日ヨリ滿五年ヲ經過セザル

第二十一條 行政廳ニ呈出スル請願ハ此法律ニ依ルノ限ニ在ラス

郡市町村  
吏員必要  
類聚法令大全下卷畢

明治二十七年二月十六日印刷同十九日發行  
全 年二月二十日再版印刷發行 (定價金貳圓)  
全廿八年七月廿七日增訂三版印刷同卅一日發行

東京市麴町區麴町二丁目十七番地  
著作兼發行人 市 岡 正 一

東京市京橋區尾張町新地四番地  
印刷人 中 川 彌 曾 吉

全市全區全町全番地  
印刷所 自 由 閣

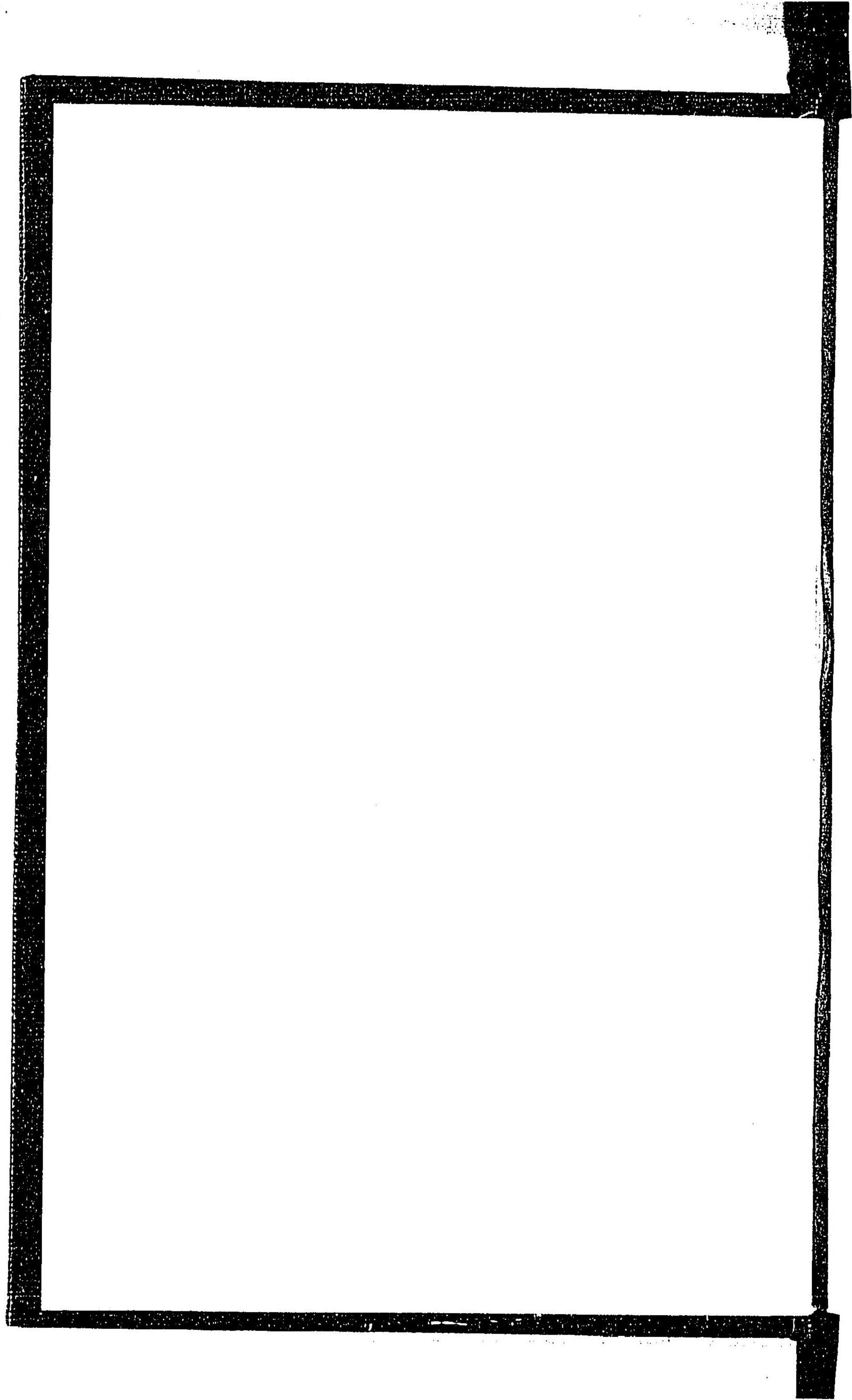
東京市麴町區麴町二丁目十七番地

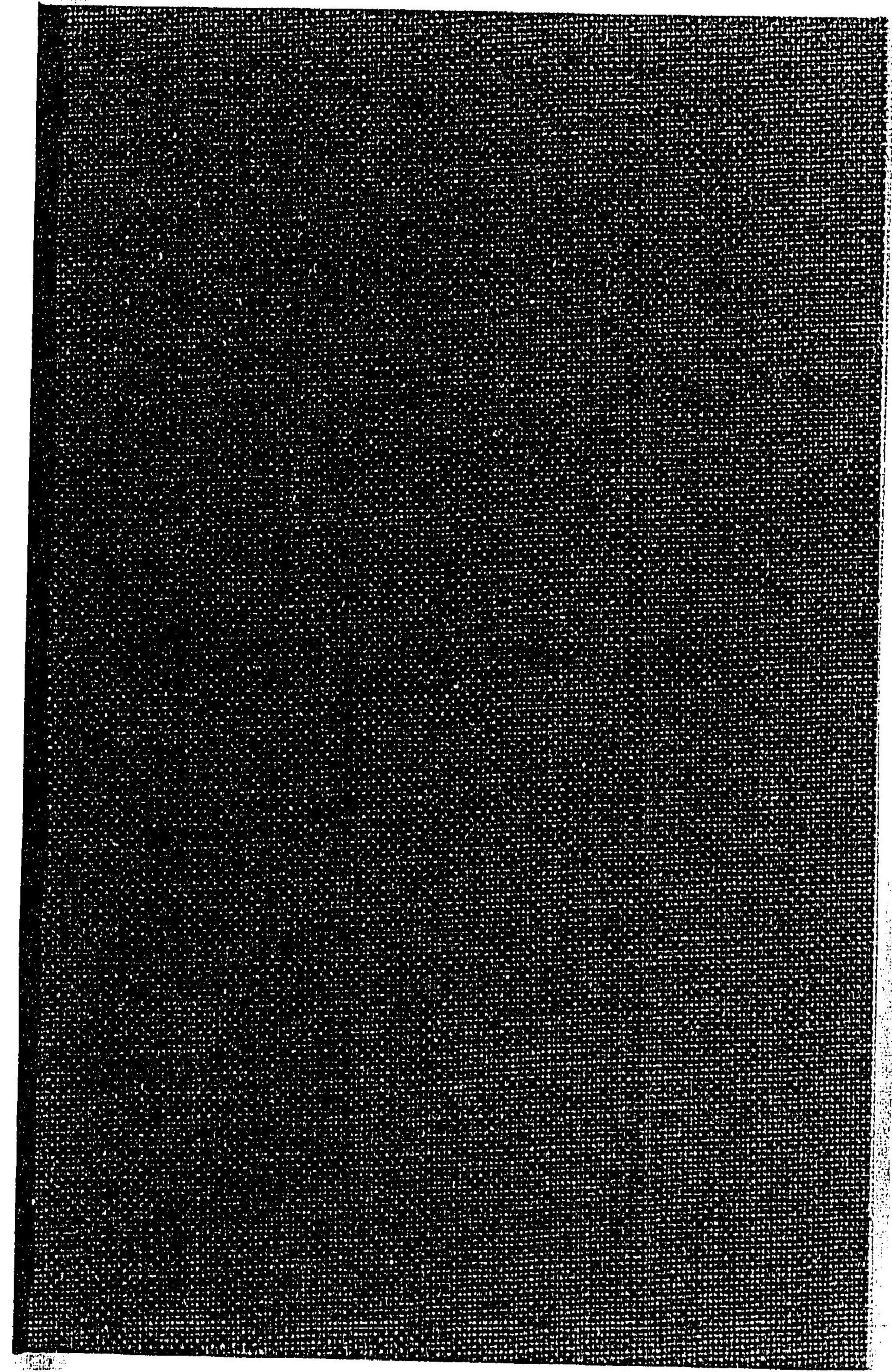
發行所

博行館本部



47-N-94





禁電子式複写

